

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

はぎ の 遺 跡  
萩 野 遺 跡  
かん ばやし  
官 林 遺 跡

1994

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

はぎ の 遺 跡  
萩 野 遺 跡  
かん ばやし  
官 林 遺 跡

1994

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

太平洋側の福島県いわき市と新潟市を結ぶ磐越自動車道は、現在完成に向けて着々と工事が進められ、工事は県境付近に集中しております。全線が開通すると太平洋側と日本海側とで経済・文化など多方面にわたって地域社会に大きく貢献するものと考えられます。

新潟県教育委員会は昭和59年以来、磐越自動車道の建設に伴って数多くの遺跡の発掘調査を実施してまいりました。本書は安田町に所在した「萩野遺跡」・「官林遺跡」の発掘調査報告書で、調査結果をまとめたものです。

特に、萩野遺跡は縄文時代中期の遺跡で、住居跡は発見されませんでしたが、出土した土器は北陸・東北・関東地方の影響を受けたものです。当時の人々も広域的に交流し、その生活の一端をうかがい知ることのできる資料を得ることができました。

この調査結果が、地域の歴史を解明するための資料として広く活用していただければ幸いります。

最後に、本調査に対して多大なご協力とご援助を賜った日本道路公団新潟建設局・同新潟工事事務所をはじめ、安田町教育委員会に対して厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

新潟県教育委員会

教育長 本間 栄三郎

## 例　　言

1. 本報告書は新潟県北蒲原郡安田町大字六野瀬字館野・萩野に所在する萩野遺跡、同町大字六野瀬字官林に所在する官林遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は磐越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委という）が調査主体となり、平成2年度に実施した。
3. 整理作業は県教委から財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）が受託して実施した。
4. 整理および報告書作成にかかる作業は平成4年度に実施し、埋文事業団調査課第1係職員および曾和分室作業員がこれにあたった。
5. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管・管理している。遺物の注記記号は萩野遺跡を「HG」、官林遺跡を「KH」として出土地点を併記した。
6. 石材の鑑定については、県立教育センター地学研究室河内一男氏に御教示を賜った。
7. 石器の使用痕については種類ごとに異なる網目で表示し、各図版に凡例を付した。
8. 各遺跡における遺物番号は土器・石器ごとに通し番号とし、図面図版と写真図版の番号は一致している。
9. 引用文献は著者および発行年を文中〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
10. 本書は亀井 功（埋文事業団調査課主任）を中心に分担執筆したもので、ほかに本間信昭（文化行政課埋蔵文化財係長）、望月正樹（埋文事業団調査課主任）がこれにあたった。第Ⅱ章、第Ⅳ章3(1)が本間、第Ⅳ章4(1)の第1群A・H・J関係が望月で、それ以外については亀井である。また、荒木繁雄氏（新潟県文化財保護指導員）から第Ⅳ章2(3)で土壤分析とその執筆をいただいた。なお、本書の編集は鈴木俊成（埋文事業団調査課主任）・望月が行った。
11. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

青沼道文・黒坂 収・佐藤順一・鳥井 誠・古山 昇・前山精明・増子正三

## 目 次

第 I 章 序 説 .....	1
1. 調査に至る経過 .....	1
第 II 章 地理的環境 .....	3
1. はじめに .....	3
2. 地形と遺跡の分布 .....	3
3. 萩野遺跡・官林遺跡の地理的環境 .....	7
第 III 章 調査の概要 .....	8
1. 調査体制と整理作業 .....	8
A 調査体制 .....	8
B 整理作業 .....	8
第 IV 章 萩野遺跡 .....	9
1. 調査の経過 .....	9
2. グリッド設定と基本層序 .....	11
(I) グリッド設定 .....	11
(2) 基本層序 .....	13
(3) 層序と沼沢バミス .....	15
3. 遺構 .....	16
(1) 炭焼き窯跡 .....	16
(2) 炉跡 .....	17
(3) 土坑 .....	18
4. 遺物 .....	20
(1) 土器・土製品 .....	20
(2) 石器 .....	41

第 V 章 宮林遺跡 .....	45
1. 調査の経過 .....	45
2. グリッド設定と基本層序 .....	45
(1) グリッド設定 .....	45
(2) 基本層序 .....	45
3. 遺構 .....	47
4. 遺物 .....	48
第 VI 章 まとめ .....	49
1. 土器 .....	49
(1) 北陸系土器 .....	49
(2) 東北系土器 .....	53
(3) 関東系土器 .....	53
(4) 土偶 .....	54
(5) その他 .....	54
2. 石器 .....	54
要約 .....	57
引用・参考文献 .....	58

## 挿 図 目 次

第1図	荻野遺跡・官林遺跡の位置と周辺の遺跡分布	4
第2図	荻野遺跡・官林遺跡の範囲および試掘トレンチ位置図	10
第3図	荻野遺跡グリッド設定図	12
第4図	荻野遺跡の層序	14
第5図	荻野遺跡土器出土状況	21
第6図	荻野遺跡石器出土状況（A地区）	41
第7図	官林遺跡グリッド設定図	46
第8図	官林遺跡の層序	47

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	3
第2表	荻野遺跡石器観察表	44
第3表	荻野遺跡爪形文と他の文様の組合せ	50
第4表	蓮華文の出土比較	51
第5表	荻野遺跡蓮華文の種類と他の文様の組合せ	55

## 図 版 目 次

### 図面図版

#### 荻野遺跡

- 図版1 荻野遺跡遺構全体図
- 図版2 荻野遺跡遺構全体図（A地区）
- 図版3 荻野遺跡遺構全体図（A地区・B地区）

- 図版4 萩野遺跡遺構全体図（C地区）
- 図版5 遺構個別実測図1 炭窯跡・炉跡
- 図版6 遺構個別実測図2 土坑・ピット(1)
- 図版7 遺構個別実測図3 土坑・ピット(2)
- 図版8 土器実測図1 土器(1)
- 図版9 土器実測図2 土器(2)
- 図版10 土器実測図3 土器(3)
- 図版11 土器実測図4 第1群土器 A・B・C・D1
- 図版12 土器実測図5 第1群土器 D1・D2・D3・D4・E1
- 図版13 土器実測図6 第1群土器 E1・E2・E3・E4・F1・F2
- 図版14 土器実測図7 第1群土器 F3・G1・G2・G3
- 図版15 土器実測図8 第1群土器 G4・H・I
- 図版16 土器実測図9 第1群土器 J・K1-1・K1-2・K1-3
- 図版17 土器実測図10 第1群土器 K1-3・K1-4・K1-5・K2・K3・K4
- 図版18 土器実測図11 第1群土器 L・M
- 図版19 土器実測図12 第1群土器 M
- 図版20 土器・土製品実測図13 第1群土器 N、第2～6群土器、土製品
- 図版21 石器実測図1 石器 石礫、石匙、打製石斧、磨製石斧
- 図版22 石器実測図2 石器 石鍤、磨石類
- 図版23 石器実測図3 石器 磨石類、凹石、石皿類
- 官林遺跡
- 図版24 官林遺跡遺構全体図・遺構個別実測図・遺物実測図（土器、石器）

### 写真図版

#### 萩野遺跡

- 図版25 遺跡A地区全景 遺跡B地区全景 遺跡C地区全景
- 図版26 1 遺跡遠景 2 A地区F9・G9付近完掘状況  
3 A地区E10付近完掘状況 4 B地区完掘状況 5 C地区完掘状況  
6～9 調査風景
- 図版27 1～4 A地区土層 5～8 B地区土層 9 C地区土層  
10 C地区土柱状図
- 図版28 1・2 C地区土柱状図 3～10 遺物出土状況
- 図版29 遺構 1～3 炭窯跡 4・5 C14-5炉跡 6・7 D14-7炉跡
- 図版30 遺構 1・2 1号土坑 3・4 SX71 5～7 A地区ピット群

- 図版31 遺構 1・2 ピット16 3・4 ピット18 5・6 ピット22  
7・8 ピット45 9・10 ピット46
- 図版32 遺構 1・2 ピット55 3・4 ピット67 5・6 ピット68  
7・8 ピット88 9・10 ピット104
- 図版33 遺構 1・2 ピット112 3・4 ピット130 5・6 ピット148  
7 D14-13炉跡 8 ピット136 9・10 5、6号土坑
- 図版34 遺物 1～6
- 図版35 遺物 7～13
- 図版36 遺物 14～22
- 図版37 遺物 第I群土器 24～55
- 図版38 遺物 第I群土器 56～93
- 図版39 遺物 第I群土器 94～132
- 図版40 遺物 第I群土器 133～165
- 図版41 遺物 第I群土器 166～192
- 図版42 遺物 第I群土器 193～207
- 図版43 遺物 第I～VI群土器 208～228 土製品 229～231
- 図版44 遺物 石器 1～18
- 図版45 遺物 石器 19～29
- 図版46 遺物 石器 30～35
- 図版47 B地区土層別鉱物
- 官林遺跡
- 図版48 遺跡全景 完掘全景
- 図版49 遺構 遺物

## 第Ⅰ章 序 説

### 1. 調査に至る経過

磐越自動車道は、福島県いわき市を起点とし常磐自動車道から分岐して、郡山市で東北縦貫自動車道に連結・交差し、さらに会津若松市を経て会津坂下・西会津を通過し、新潟県津川町から新潟市に至る総延長約207kmの高速道路である。この道路は、阿武隈山系や奥羽山脈を越えて太平洋沿岸と日本海沿岸とを直結させ、産業・経済・文化の交流を促進する重要な役割をもつている。

磐越自動車道いわき・新潟線のうち郡山市から会津坂下町については、昭和48年11月に基本計画が決定し、昭和53年11月には郡山～猪苗代間が整備計画区间に格上げされた。同年12月にはいわき～郡山間及び会津坂下～新潟間が基本計画路線に決定された。そして、昭和57年1月に猪苗代～会津坂下間及び津川～新潟間が整備計画に格上げされ、同時に日本道路公団に調査の指示がなされた。これより先、昭和56年12月、建設省北陸地方建設局は、津川～新潟間の路線概要及び環境影響評価の説明を県文化行政課及び関係6市町村に行った。

昭和59年8月、日本道路公団新潟建設局から新潟県教育庁文化行政課（以下、県文化行政課という）へ津川～新潟間の計画路線内及びその周辺の埋蔵文化財包蔵地の分布調査依頼がなされた。これに対し県文化行政課は同年10月に周知の遺跡のみに限って分布調査を実施し、他に平野部や段丘上にも未周知の遺跡が存在する可能性を指摘し、今後とも分布及び確認調査を実施する必要がある旨回答した。

昭和60年2月、日本道路公団に津川町～新潟市間（約46km）の工事施行命令が出された。昭和61年8月、日本道路公団新潟建設局は最後の路線発表を行い、昭和62年4月に県文化行政課へ磐越自動車道の工事工程の説明と新潟～安田間の2回目の分布調査依頼を行った。同月県文化行政課は五泉～新潟間の分布調査を実施し、法線内に16か所の試掘調査必要地点があること、及びその調査面積を回答した。また、同年11月、津川～安田間に對しても分布調査を実施し、45か所の試掘・確認調査必要地点とその調査面積を日本道路公団に回答した。この結果を踏まえて昭和63年1月、県文化行政課と日本道路公団の間で安田～新潟間の文化財発掘工程打合せ会議を開催し、同年2月、県文化行政課は試掘・確認調査の各地点の調査面積を日本道路公団に回答した。

## 1. 調査に至る経過

昭和63年3月、日本道路公団新潟建設局は会津坂下町～津川町間の路線を発表した。

新潟～安田間の発掘調査が本格化したのは昭和63年6月以降、萩野遺跡（安田町）と二瓶遺跡（五泉市）の確認調査からである。県文化行政課は調査の結果、萩野遺跡の国道49号線以西と二瓶遺跡は遺物点数・遺構検出数から本調査は必要ないことを回答した。同年8月安田～新潟間の今後の調査について県文化行政課と日本道路公団は協議を行った。この協議をふまえて、県文化行政課は翌平成元年12月から平成2年1月まで3回に分け、萩野遺跡（国道49号線以東）他と赤坂山中世窯跡の確認調査を実施した。そして、平成元年12月、県文化行政課は日本道路公団に対し、安田町萩野遺跡他、赤坂山中世窯跡の確認調査の結果を報告し、出土遺物、出土遺構の分布状況から萩野遺跡他について約8,000m<sup>2</sup>にわたり本調査が必要な旨回答した。また、赤坂山中世窯跡の東でも中世窯跡が2基確認でき、その部分についても本調査が必要な旨回答した。それに基づいて県文化行政課は平成2年5月から10月まで萩野遺跡・官林遺跡の本調査を実施した。

なお、官林遺跡周辺の字名は地元で官林と呼称するが、土地更正図には官林と記されており、ここでは更正図にならい「官林」の字をとって遺跡名とした。



萩野遺跡確認トレント

## 第二章 地理的環境

### 1. はじめに

新潟県北蒲原郡安田町は、新潟市の南西約20kmに位置する。南には蒲原山地が位置し、西側に新津丘陵、北側には飯豊山地が連なっている。町の南を流れる阿賀野川は、飯豊山地から的小河川を合流して、扇状地や広大な沖積地である新潟平野を形成している。安田町は、笛神丘陵の西側部分、通称五頭丘陵と新潟平野の接点に位置し、面積40.76km<sup>2</sup>、人口約10,500人である。町の中心部および周辺集落は、阿賀野川の自然堤防上や五頭丘陵の先端部に所在する。主産業は稲作を主体とした農業であるが、明治時代に始まった酪農も近年定着してきた。工業では、良質の粘土を使って江戸時代末期から始まった瓦の生産が盛んをきわめ、「安田瓦」として全国に出荷されてきた。しかし、新建材等の出現によって以前程の活況は見られなくなった。しかし、県内唯一の瓦生産地であるかたわら、陶器や陶管等の生産が続けられ、一大窯業地であることに変わりはない。また、近年は交通網の整備によって、近代的な工業やレジャー産業等が進出し、新しい町づくりが行われている。

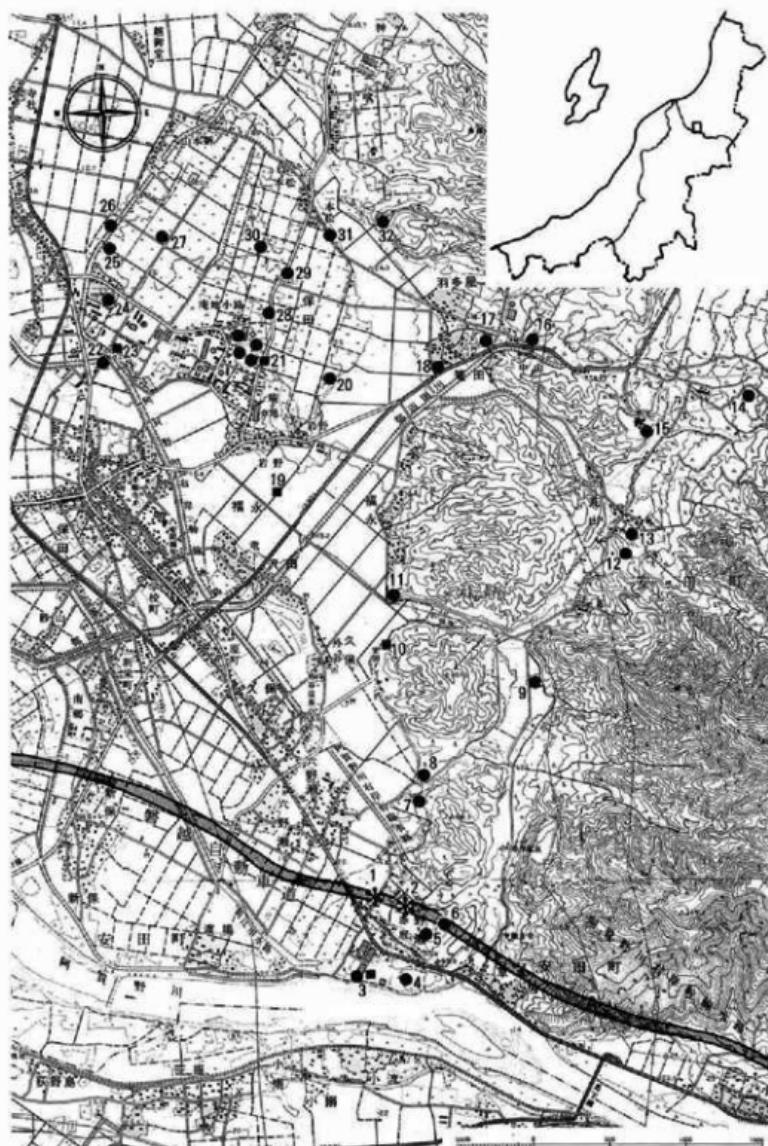
### 2. 地形と遺跡の分布

新潟県の北部は、西側に日本海をひかえ、そのなだらかな海岸線に沿って日本有数の新潟平野が広がる。福島県との境には越後山脈が南北に連なり、東側は飯豊山地が東西に延びる。

第1表 周辺の遺跡一覧表（第1図に対応）

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	秋 野	绳文（中・後期）	11	藤 屋 敷	绳文	22	山 ノ 下	绳文（中・後期）
2	官 林	绳文（中期）	12	保 田 断面	绳文	23	大 曲	弥生（中期）
3	六 野 湖	绳文（南・晚）	13	吉ヶ瀬平	绳文	24	藤 堂	绳文（中・後期）
	弥生（中期）、中世		14	日 陰 平	绳文	25	中 道	绳文（中・後期）
4	越後赤坂A	绳文土器	15	ツ ベ ャ	绳文（中・後期）	26	小 山 端	绳文（後期）
5	赤 板 山	绳文（中・前期）	16	石 仏 先土器	绳文	27	行 塚	绳文（中期）
6	赤坂山B	绳文（中・後期）	17	家 渚	绳文	28	上野林D	绳文（中期）
7	不 勝 説	绳文、平安、奈良	18	家 畠	绳文	29	上野林B	绳文（中期）
8	新 制	绳文（中期）	19	雷 田 古墳	绳文	30	上野林F	绳文（中期）
9	野 中	绳文（中・後期）	20	上野林A	绳文（中期）	31	二 本 松	绳文
10	山 下 A	弥生（中期）	21	横 峰	绳文（中・後・後期）	32	毛 城 山	绳文

2. 地形と遺跡の分布



第1図 萩野遺跡・官林遺跡の位置と周辺の遺跡分布

●先土器・縄文時代 ■弥生・古墳時代  
測量基準点 1:25,000 地形図  
「新津」「村松」「馬下」(平成2年)

阿賀野川の北側地域は阿賀北と呼ばれ、東北地方の文化の影響が濃い。魚沼丘陵は阿賀野川を越えて北に延びつつ、西側へなだらかに広がる。この地帯を五頭丘陵と呼んでいる。

五頭丘陵は、後背の山地から流れ出て堆積した風化花崗岩砂と花崗岩を主成体とした丘陵である。丘陵の西側は、阿賀野川の度重なる流路の変遷により、入り組みの多い地形である。また、この沖積地に突き出す台地は厚い粘土の堆積地となっている。安田町内の遺跡は、このような地形に影響され、各時代ごとに以下の三つの特徴を持って分布する（第1図）。

(1) 五頭丘陵に所在するもの

先土器時代～弥生時代の遺跡が主体で、丘陵の西側先端部に分布する。標高約30～70m位の小丘陵や小扇状地に分布している。

(2) 台地に所在するもの

縄文時代中期～弥生時代中期の遺跡が主体で、台地の縁辺に分布している。台地の中央部では確認されていない。縄文時代は中期～後期が中心である。

(3) 沖積地に所在するもの

古墳時代～中世の遺跡が主体で、沖積地の自然堤防上に分布している。平安時代の遺跡が多く発見されている。

次に各時代の遺跡を紹介する。

先土器時代は横峰D遺跡(21)と石仏野遺跡(16)がある。

石仏野遺跡はツベタ川の右岸、五頭丘陵の南側先端部、標高約35mの緩斜面に位置する。ここでは長さ4.9cm、幅3.5cmの縦形搔器と剥片が採集されている。横峰D遺跡は五頭丘陵から西側に突き出した標高約25mの平坦な台地上に位置し、南側をツベタ川が流れる。ここから細石核が採集されていた（南部郷協議1975）が、その後の圃場整備により遺跡は埋滅した。

縄文時代前期は六野瀬遺跡(3)がある。口辺部に貼付された菱形文、胴部に縦の羽状縄文を施した深鉢形土器が発掘により出土した。なお、この遺跡は他に縄文時代晚期、弥生時代中期、中世の複合遺跡（杉原1970）であることから、それぞれの時代でも紹介する。

縄文時代中期は、荻野(1)・官林(2)・新割(8)・野中(9)・ツベタ(15)・上野林A(20)・横峰(21)・山ノ下(22)・藤堂(24)・中道(25)・行塚(27)・上野林D(28)・上野林B(29)・上野林F(30)の各遺跡がある。

新割遺跡は、五頭丘陵の西側先端から南へ小さく突き出す標高約20mの丘陵端に位置し、土器・石器等が出土する。ツベタ遺跡は、ツベタ川左岸の小扇状地西側先端地の標高約70mに位置する。後背の丘陵から流れ出た花崗岩砂と花崗岩との土砂が厚く堆積しており、その下に縄文時代中・後期の包含層がある。数回にわたる調査の結果、縄文時代中期の馬高式及び大木8b式の土器、縄文時代後期の三十稻場式土器・石匂い炉などの他、土偶、石器等が発掘された。ここからは把手を有する深鉢・板状土偶・土版や石器等が採集されている（中川ほか1970）。これ

らは丘陵内側の谷筋に沿って所在する遺跡である。

縄文時代後期（中期も含む）は、上野林A（20）・B（29）・D（28）・F（30）遺跡、横峰遺跡（21）、山ノ下遺跡（22）、藤堂遺跡（24）、中道遺跡（25）、行塚遺跡（27）がある。横峰遺跡は、標高25mの台地南側先端部に位置し、A～Dの4地点に分けられている。横峰C遺跡から、縄文時代中期の馬高式及び大木8b式の深鉢形土器、後期後半の深鉢形土器・壺形土器等が発掘されている。藤堂遺跡は、台地西側標高20mに位置する。縄文時代後期の堅穴住居跡と炉跡等の遺構とともに、小型の壺形土器や鉢形土器、土錐・土偶・耳飾り・石製品等が発掘されている〔本間ほか1974ほか〕。

縄文時代晩期は、赤坂山B遺跡（6）、横峰B遺跡（21）がある。横峰B遺跡からは、縄文時代晩期の壺形土器や平安時代の須恵器が採集されている。

弥生時代中期は、山ノ下A遺跡（10）、六野瀬遺跡（3）、大曲遺跡（23）がある。六野瀬遺跡は、阿賀野川右岸の標高約25mの段丘上に位置する。この段丘は五頭丘陵の南端部にあたり、阿賀野川の浸食によって残ったものである。ここでは、地表下約30cmで弥生時代中期の再葬墓が発掘されており、新潟県の弥生時代の文化を考えるうえにおいて貴重な遺跡である〔佐藤〕。

大曲遺跡は弥生時代中期前葉の遺跡で、台地西端の標高26mに位置する。ここでは数箇所の調査で4基の墓壙（再葬墓群）が発掘され、再葬に用いられた北陸系や関東（須和田式）系の様相を強く持った弥生時代中期の壺が26個も出土し、全国的にも注目されている遺跡である〔石川1989〕。

古墳時代は雲雀田遺跡（19）がある。ここは沖積地にある遺跡で、古墳時代前半の壺や器台等が採集されている。

平安時代～中世は、新割遺跡（8）、不動院遺跡（7）、五輪敷沢窯跡、赤坂山中世窯跡、六野瀬館跡がある。新割遺跡は、標高20mの南側に小さく突き出す丘陵端に位置する。ここからは縄文土器や石器の他、須恵器が採集されており、窯跡の可能性があると言われている。また、南に隣接する不動院遺跡においても、縄文土器の他須恵器の环と蓋、羽口や鉄滓等が採集されており、北側には平安時代の五輪敷沢窯跡があり、窯跡・製鉄跡の存在をうかがわせるものである。六野瀬館跡は大字六野瀬にあり、沖積地の自然堤防上に立地し、東西約130m、南北約70mの規模である。中世陶器、青・白磁が出土している。赤坂山中世窯跡は六野瀬館跡の東に位置し、窯跡から常滑系陶器が出土する鎌倉時代後期から室町時代前期の遺跡である。

このように安田町には各時代の遺跡が数多く存在する。しかし、調査の例は数遺跡のみで、各時代ごとの発掘が行われていない。それでも、調査された遺跡は貴重な資料を提供している。今後調査が進むことによって、この地域の歴史がさらに明らかになるものと考えられる。

### 3. 萩野遺跡・官林遺跡の地理的環境

南北に連なる五頭丘陵の南側を阿賀野川が流れている。大きく蛇行する阿賀野川は、五頭丘陵との間に沖積地をつくっている。萩野遺跡・官林遺跡は、阿賀野川右岸の沖積地と五頭丘陵の接点に位置し、両遺跡が所在する丘陵は、五頭丘陵の南端にあたる。

萩野遺跡はこの丘陵の南端西側標高約22mの平坦地に位置し、畠地となっていた。遺跡地の北側にも畠地が続いており、台地西側は旧阿賀野川の流路跡、東側に小さな沢が入っている。そして、三方は水田に囲まれ、小さく突き出した舌状台地となっている。台地の下位層は、阿賀野川によって運ばれた沼沢火山灰と経石を多量に含む土砂の層であり、その上位に丘陵から流れ出た土砂が堆積している。遺物はこの上位層に包含されている。

官林遺跡は、標高約30mの丘陵先端西側緩斜面に位置する。丘陵は五頭丘陵の南端から舌状に突き出している。丘陵は北から延び、三方には沢が入り水田と溜池になっている。遺跡地は畠地であるが戦後杉林を開墾したもので、数回にわたって表土が削られ包含層も削られたものと考えられる。上層は薄い表土で覆われ、下層は橙褐色粘土層となっている。

両遺跡が所在する丘陵の東側には北に貫く沢があり、後背の丘陵とその成因を異にしているものと思われる。

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1. 調査体制と整理作業

発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、それぞれ下記の体制で実施した。また、報告書については荻野・官林の両遺跡が位置的に近接していることや、協議経過が重複することなどから合本とした。

#### A 調査体制

【荻野遺跡】 調査期間 平成2年5月8日～10月12日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 鶴川徹夫）

管理 総括 大嶋圭己（新潟県教育庁文化行政課長）

管理 吉倉長幸（ “ 課長補佐）

庶務 境原信夫（ “ 主事）

調査 調査指導 本間信昭（ “ 埋蔵文化財第2係長）

調査担当 亀井 功（ “ 文化財主事）

調査職員 高橋知之（ “ 22条職員）

河合順之（ “ 嘱託）平成2年7月退職

【官林遺跡】 調査期間 平成2年7月23日～8月4日

調査主体・管理・調査員等は荻野遺跡と同様である。

#### B 整理作業

出土遺物の水洗・注記作業は、原則として現場で発掘作業と並行して実施した。遺物の復元・実測・写真撮影・図版作成などの作業は、調査職員を中心に曾和分室の整理作業員があたった。両遺跡の遺構図版については本間が担当した。

また、平成4年度からは側新潟県埋蔵文化財調査事業団が発足し、同事業団曾和分室整理作業員を中心に整理を継続した。

## 第IV章 萩野遺跡

### 1. 調査の経過

萩野遺跡と官林遺跡の発掘調査は磐越自動車道の工事に伴い、平成2年5月8日から10月12日までの延べ158日間にわたって行われた。当初、調査予定面積は8,000m<sup>2</sup>であったが、西側端と東側端の部分は旧河道であることが判明し、予定地内の町道部分も遺構の存在が考えられないことから調査を実施しなかった。実質調査面積は萩野遺跡が5,800m<sup>2</sup>、官林遺跡が2,100m<sup>2</sup>であり、下記の日程で調査を実施した。

5月8日、器材搬入と諸準備。調査予定地内に存在する水道管の移設工事を先行させたため、調査範囲を3地区（図版1）に分け調査した。1つは予定地内町道より西側のうち水道管敷設予定地まで（A地区）。2つはその水道管敷設予定地から西側（B地区）。3つは予定地内町道から東側全域（C地区）である。A地区は確認調査の結果から遺跡の中心部と想定したが水道管移設工事のため当初発掘作業に着手できなかった。また、C地区にある民家は立退や畠の作物収穫の問題等でA地区同様、当初からの調査ができない部分が多くあった。

5月10日から重機により西側のB地区の表土剥ぎ作業を開始。14日から人力によるB地区Ⅱ層面の精査作業を行う。並行してA地区の小グリッドの杭打ちを行う。16日になってもB地区の遺物・遺構の検出がなく、砂利の多い旧阿賀野川河道を発掘調査範囲から除外し、調査範囲を縮小、南側の一部を排土置場とする。5月19日、水道管敷設工事開始。防護柵工事実施、即日完成。5月21日、B地区漸移層の精査を行うが、遺物はわずかで、ピットを少数検出したが、木根跡も多く存在する。24日にB地区のピット完掘写真撮影終了。

5月24日からA地区の表土剥ぎ開始。A地区は遺跡の中心範囲と想定したので、第Ⅰ層から人力で発掘を行う計画である。大グリッドごとにⅡ層まで発掘し遺物・遺構を確認後、大グリッド2～3単位ずつ、引き続いてⅢ層の発掘作業に入る。F9・G9・E9・D9・D10区の順に南から北へと作業を進める。F9区のⅡ層から遺物多数が出土した。A地区に東西方向3本、南北方向2本のメインセクション設定。5月31日、G9区の地山面精査開始。E9区（Ⅱ層上面）から遺物多数出土。遺構はまったく検出されない。6月1日、A地区の小グリッドごとに発掘作業を進める。E9区のⅡ・Ⅲ層から石斧・石錘・一括土器など多数の遺物が出土するものの、相変わらず遺構は検出されない。

6月7日、これまでの発掘作業でめぼしい遺構を確認できなかつたので、作業の順序を変更

## 1. 調査の経過

し、北端のB 10・11区から順次南へ表土を剥ぎ、ついで数cmずつ全体を削ることにする。以後、この方法で発掘作業を進める。6月11日に南北セクションの西側（B 8区）の表土剥ぎを開始する。この地域は表土・II層とも薄く、小グリッドによってはII層を確認できないところもある。地山面まで薄い所もあるが、地山面の連続性をつかめない所が多い。

6月13日、ピットの調査に入る。ピットのほとんどは木根跡である。B 8・C 8～10区は土層が不規則なため、表土剥ぎとII・III層の精査作業が困難であった。そして、遺構の検出がないうえ、全体に遺物の出土量も少ない。

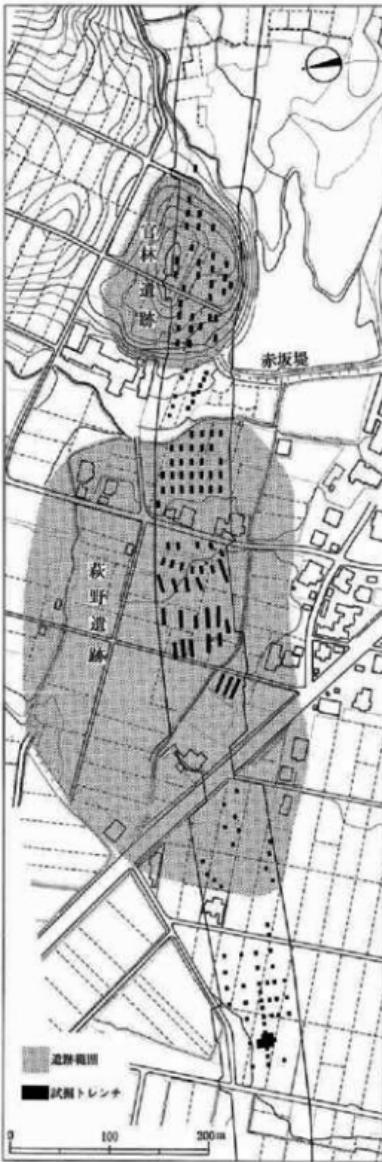
6月20日から28日、降雨のため、発掘作業休止。遺物の洗浄と注記作業を行う。

6月29日、発掘作業再開。C 7～9区からE 7・8区の範囲では出土遺物が極端に少ない。D 9区でわずかに遺物が出土する。7月12日、F 8区から土器片が多数出土したが、遺構は検出されない。7月16日、Eラインより北側のIV層までの精査終了。やはり、遺構は検出されない。7月17日、IV層遺構確認調査終了範囲でのV層の遺構確認調査を開始。

7月19日から官林遺跡の杭打ち作業と草木伐採作業を並行して行う。翌日、官林遺跡の硬い土に合わせ重機で表土剥ぎを開始する。

7月23日からA地区全面のV層遺構確認作業とピットの半裁、完掘作業を進めるが、すべて木根跡のピットである。7月26日、A地区ピット平面図作成開始。A地区レベル実測開始。

7月30日からB地区レベル実測。大半の作



第2図 秋野遺跡・官林遺跡の範囲および試掘トレンチ位置図

業員は官林遺跡の発掘作業を行う。

7月31日、A地区ピット平面図作成。この日から実測作業補助員を除いて全員が官林遺跡の発掘作業に入る。官林遺跡は地表面まで削平されているため遺物・遺構ともまったく検出されない。8月3日、遺跡東側からようやくピット2基検出。官林遺跡完掘全景写真撮影。

8月1日～4日、A地区ピットレベル実測、小グリッド杭撤去、B地区ピットレベル実測、A地区完掘全景写真撮影、A地区ピット平面図作成等の作業終了。

8月5日～20日まで夏季休業のため発掘作業休止。

8月21日、繁茂する雑草を除去後C地区の発掘作業開始。東側に調査範囲確定のため1×2mのトレンチ（南北方向）を10m間隔に4か所、1×3mのトレンチを16ラインに、また、1×2mのトレンチを15ラインに掘る。その結果16ラインから西側を発掘することにした。表土までは重機で掘り下げ、それより下層を人力で精査した。

8月24日、民家取り壇し開始。

8月29日、炉跡が数基検出される。C地区に小グリッドを設定する。大グリッド数個単位に土層ごとに表土を重機で剥ぎ、II層以下を小グリッドごとに精査しながら掘り下げた。作業はこの繰り返しで進めた。ピット状のものは検出されるが、ほとんど木根跡である。

9月5日～10日、F13・14区で炭窯跡の発掘作業を行う。

9月10日、町道部分の発掘は切り回し工事開始に見通しが立たず、A地区を埋め立ててから行うことと決定する。ただし、C地区の発掘成果により、埋め立て中止も考慮にいれることにする。結局、民家跡の攢乱、町道下の水道管理設、A地区の希薄な検出遺構の3つの状況から町道の発掘を中止した。

9月26日、縦1.5m×横1.5m×深さ2mのトレンチを3か所掘り、土層柱状図を作成する。

9月28日からペルコン、小グリッド杭撤去。

10月2日から遺物洗浄、遺物注記作業と後片付け作業を行い、9日撤収作業を完了する。

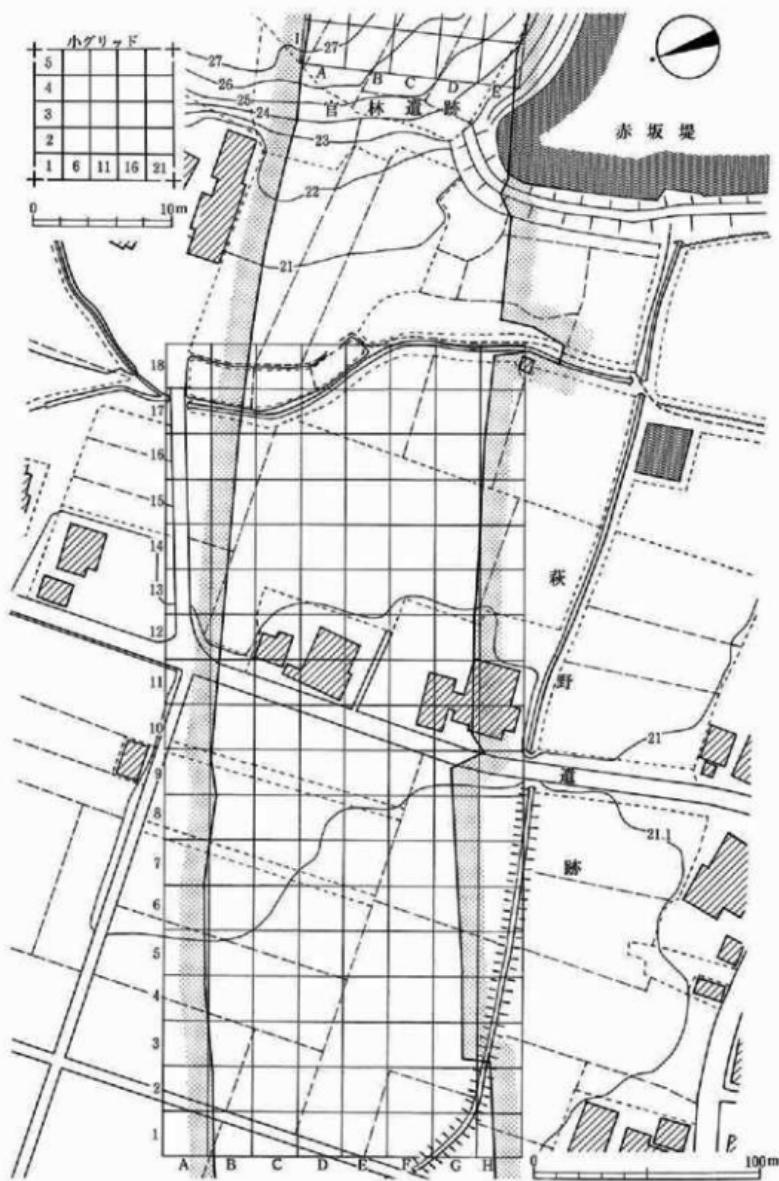
10月10日～12日、C地区ピット平面図・レベル実測、完掘全景写真撮影を行う。

## 2. グリッド設定と基本層序

### (1) グリッド設定

日本道路公団が設置した高速道路法線の中心杭であるSTANo735+00を基点として、100m離れたSTANo734+00を結ぶ線を東西方向の基線とした。これに直交する南北ラインを設定し、10m×10mを1区画として大グリッドを設定した。そしてその北西隅を起点にして、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表わした。両者の組合せでA1・A2…と

2. グリッド設定と基本順序



第3図 萩野遺跡グリッド設定図

することにした。各大グリッドは $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ 単位で25の小グリッドに細分し、北西隅を1として、東へ2、3…と続け、南東隅を25とした。そして、各小グリッドはB 5-8、E 10-21などと表記した。また、本調査地域をA・B・Cの3地区に分けた。A地区は、東西方向でおおむね8~10区分内、B地区は東西方向でおおむね4~7区分内、C地区は東西方向でおおむね11~16区分内の範囲である。

## (2) 基本層序

本遺跡の現況は、畠地、牧草地、休耕田、それに若干の宅地である。戦前まで松の多い林だった所を、戦後開墾して今日に至っている。調査区内には開墾作業、耕作によって攪乱された部分がある。

遺跡の所在する地域はほぼ平坦であるが、調査地域北側、B 7-10からB 8-8区を頂点に東西へ2度傾斜し、南北方向はほぼ平坦である。B地区のD 6区から南方向へ3度傾斜している。

基本的な層序は以下のとおりである。

I層 黒褐色土 表土(耕作土)。層厚は15~20cmである。

II層 暗褐色土 遺物包含層直上にあり遺物が出土する。層厚は10~15cmである。土のしまりはなくサラサラしている。

III層 黒色土 遺物包含層。ところどころに木炭片が混じる。層厚は20~40cmである。

IV層 暗黃褐色土 漸移層。III層の黒色土とV層の黃褐色土の混じりである。黒色が強い。

V層 黄褐色土 地山。やわらかい土である。層厚は20~60cmである(V層以下は沼沢火山灰層である)。

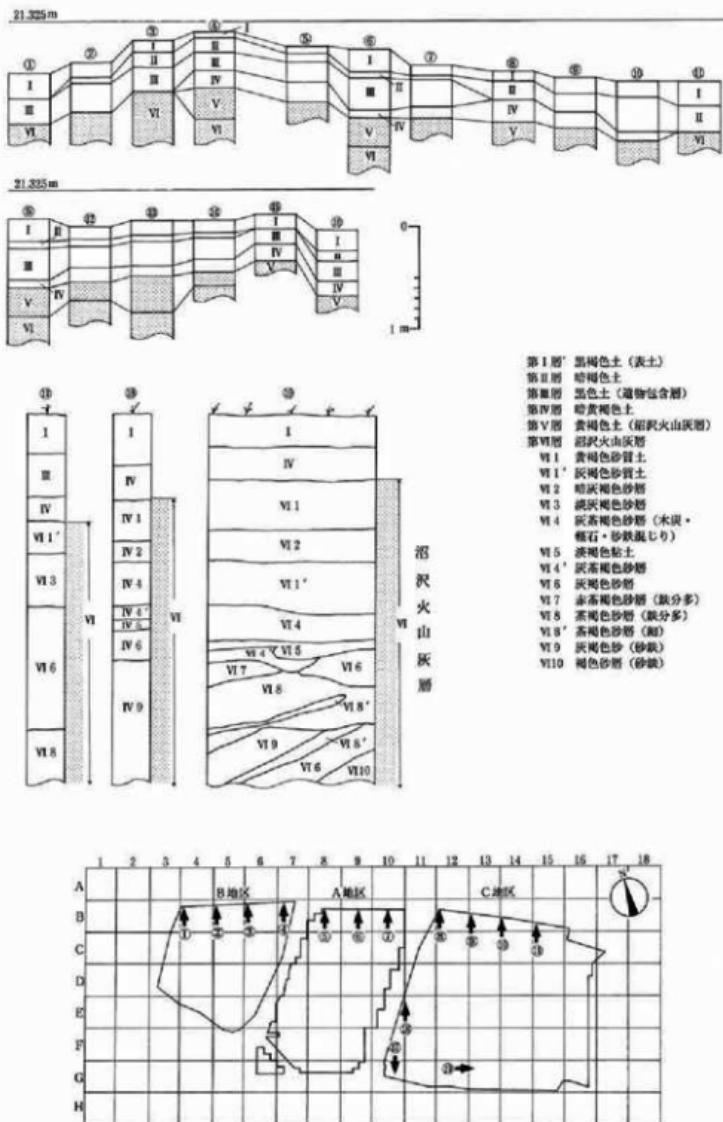
VI層 砂・砂礫層。

A地区が本遺跡の中心的な範囲である。I・II層はもともと一つの層であったが、開墾、耕作によってII層の土色・土質が変化し、I層になったものである。D 8・E 8区では攪乱を受けた痕跡がない。南北メインセクションのE 9-20・25区にかけてII層を、東西メインセクションのE 8-1区でII・III層を確認できない地点がある。南北メインセクションの東西区分の9区辺りの土層では、深掘り(B 9-10・20区、C 9-10区、D 9-10区)の結果、V層の下には砂層が続き、VI層は赤褐色砂(D 9-10区付近)、VI<sup>1</sup>層は淡橙白色細砂、VI<sup>2</sup>層は淡黄色砂(褐色混入)である。F 7区から南は土層の落ち込みがみられ、V層がなくなり荒砂の層となる。遺物が集中して出土する範囲は、F 8-4・5・8~10区、E 9区、B 9区である。

B地区は大半が旧阿賀野川の河道路である。I・II・IV層の下に黄褐色シルト層・黄褐色砂礫層・黒褐色砂礫層があり、V層を確認できない範囲が大半である。

C地区はA地区に統く範囲であるが、III層がほとんどない。農作業や開墾の事情によるもの

## 2. グリッド設定と基本層序



第4図 萩野遺跡の層序

であろう。II層（暗褐色土）はほぼ全域に広がるが、遺物を包含する範囲はC12区より南までで、B12区はない。しかし、C12区の大部分は宅地であり、宅地造成・建築工事により全面にわたって地山面まで深く擾乱されている。東西区分の12ライン以東は、I・II・IV・V層の下から北に張りだした砂質層を持った幾層もの粘土層が、C地区中ほどで南へ落ち込んでいる。南側には砂質層が広く幾層にもわたって堆積している。

### (3) 層序と沼沢バミス (図版47)

#### a はじめに

V層～VI層はどのような成因にもとづいて堆積したのかを明確にするため、同層中の任意の3地点 (a～c) から試料を採集して、砂粒鉱物分析と粒度分析を次のような試料処理法で行った。

#### 〈砂粒鉱物の処理法〉

- イ、分析に使用する試料の量……自然乾燥した土、または砂土25g。
- ロ、粘土分の除去……撚掛け法による懸濁水の除去。
- ハ、鉄分の除去……クエン酸ナトリウムとハイドロサルファイト混合溶液による煎。
- ニ、砂粒の篩分……水洗・乾燥した砂粒を0.6、0.3、0.15、0.074mmの網目の篩により分類する。0.3～0.15mmの粒径の砂粒を双眼実体顕微鏡で検鏡する。

#### 〈粒度分析の処理法〉

試料100gを自然乾燥した砂粒を5.0、1.2、0.6、0.3、0.15、0.074mmの網目の篩によって分類し、それぞれ質量を測定して重量%であらわす。

#### b 試料分析結果と考察

砂粒鉱物分析結果はaは褐色透明な美しい紫蘇石・黒色の細長い柱状の角閃石が一番多く、石英・高温型石英・白色の軽石・磁鐵鉱・ファイバー型の纖維状に発泡した火山ガラスを検出できた。bはaと鉱物組成はあまり変わらず磁鐵鉱、チタン鉄鉱の量が多くなっていた。cによると一層磁鐵鉱・チタン鉄鉱の量は多くなる。疊の中には比較的大きい亜角礫質の怪石、流紋岩、安山岩、凝灰岩等が含まれている。特に大きな軽石がたくさん検出された。

粒度分析の結果は、aでは0.6～0.3mm47.1%、1.2～0.6mm36.2%で中砂から粗砂が多くなっている。bでは0.6～0.3mm54.2%、0.3～0.15mm33.0%で細砂から中砂となっている。cでは5.0mm以上が29.1%、0.6～0.3mm35.0%であった。三つの試料とも中砂が中央値をしめている。

以上の事実から考えられることは、本遺跡の地山の堆積物は角閃石を主体とするデーサイト質の火山噴出物に由来し、その岩石学的特性から沼沢火碎流起源の火山噴出物を母体とする堆

植物である。この沼沢火山起源の鉱物は、堆積している層厚や堆積状態から降下性の火山灰によって堆積したものではなく水性堆積物で、阿賀野川によって運搬、堆積したものと考えられる。

この火山起源の鉱物粒の供給源については、新潟砂丘の後背地である津川付近の沖積段丘堆積物に鹿瀬軽石砂層があり、稻葉等(1976)の報告がある。また只見川第4紀グループ(木村ほか1966)は、その砂層は福島県境のある沼沢火山の放出物であり、その年代は<sup>14</sup>C法により5,000年前後(绳文時代中期)であることを明らかにしている。さらにこの沼沢バシスについては、川上等(1989)「六野瀬遺跡」、石川等(1992)「六野瀬遺跡 1990年調査報告書」に報告されている。また坂井(1981)は新潟砂丘の鉱物の中でこの火砕流物質が阿賀野川によって海へ流失し、それによって砂丘列I-4が形成されたと述べている。

沼沢火山から放出された大量の軽石は洪水によって只見川を下り、阿賀野川を流下してくるが、おそらく狭い峡谷部に一旦停滞して“せきとめ”をつくり、水位が上昇し、火山灰で満った川水は静かに段丘面を浸したのであろう。その勢いはおだやかで表層部の腐食土を流失させなかつばかりでなく、微細な火山灰を腐食土の上に沈積させた。谷はさらに埋められ、浅くなつた水流が粗い火山灰を運んできたと考えられる。

この“せきとめ”的ことが磐越自動車道試掘調査、No.36西部落の南E、No.41羽黒林遺跡の調査時に沼沢火山泥流堆積物の存在が確認されている。

この沼沢火山火砕流物質が山地から平野部の出口にあたる本遺跡付近で、潮流となって放出されたものと考えられる。扇形に氾濫した物質は分級され、VI・V層として堆積し、谷を埋没して扇状地を形成したものと考えられる。本遺跡の大字荻野は扇状地の扇央に立地し、その後の阿賀野川の侵食に耐え、台地状として現在まで残ったものと考えられる。

### 3. 遺 構

荻野遺跡で検出した遺構は炭焼き窯跡1基、土坑8基、炉跡4基、ピット212基である。しかし、遺構内からの出土遺物は少なく、明確に時期を特定できるものはない。ここではそれ代表的なものを図示するが、基本的には個々の説明を行わず、種類ごとに規模・形態・覆土などの特徴をまとめて記すことにする(ピットは主なものを図化したのみである)。

#### (1) 炭焼き窯跡(図版5・29)

炭焼き窯はF13-21・22、F14-1~4、F14-7~9区で1基検出された。炭焼き窯は平地に構築されており、廃棄後上部の構造物は崩壊し、その後畠地として使われてきたため、窯底部のみの残存であった。

窯底の形状は隅丸の長楕円形で、窯体の奥部に円形の突き出し部が付設されている。窯底の長さは5.43mで、突き出し部までの全長は5.90mである。窯底の幅は1.74~1.75mとほぼ一定で、長軸方向はN-68°-Eである。窯底は基本層序V層の黄褐色砂質土を15~20cm掘り込み、ほぼ水平に構築されている。

窯体の南端の突き出し部はピット状を呈し、径65cm・深さ33cmで、煙出しの下に設けられたものである。ピットの側壁は傾斜して底に至るが、南側に「三日月」形の狭い段が築かれている。突き出し部の最下層は柔らかい暗黄褐色土で、その上に粉炭と木炭が大量に混じった黒色土が13cmの厚さで堆積している。最上層は基本層序III層に近似した黒褐色土である。覆土のところどころで焼土の散布が認められた。窯底の北端には径44cm・深さ20cmのピットと径20~30cm・深さ15cm前後のピットが7基検出された。窯底の中央には、幅20~27cm・深さ6~8cmの浅い溝が設置され、溝の両端は突き出し部とピットにつながっている。溝の底は焼けており、硬く、赤褐色を呈している。溝の中には粉炭が堆積していた。また、窯底には木を並べた時に窪んだと考えられる径5~10cmくらいの小穴が認められた。

窯体の覆土は、地山黄褐色砂質土と黒褐色土が混じった暗黄褐色土が、窯底面直上に薄く堆積し、その上に5~10cmの粉炭と木炭が混じた黒色土が堆積している。この木炭層には長さ3~5cmくらいの木炭が混じっている。

窯体の周囲からは、上屋構造などに伴う遺構及び構築時期を決める遺物などは検出されなかった。

## (2) 炉跡

### C14-5 炉跡(図版5・29)

炉の平面は円形、底部は楕円形で断面は摺鉢状を呈する。規模は径80cm・底部長径57cm・短径46cm・深さ23cmである。炉内の覆土は3層からなっている。それぞれ、第1層は炭化物混じりの黒褐色土が約10cm、第2層は炭化物混じりの黒色土が約10cm、第3層はV層の黄褐色土混じりの褐色土が約6cmである。焼土は炉縁・炉底いずれにも見られない。覆土のしまりは弱く、全体にさらさらしている。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

### D14-11炉跡(図版5)

炉の平面は楕円形で、断面は深皿状である。規模は長径92cm・短径58cm・深さ9cmである。長軸はN-68°-Wである。炉の底部は東側へ若干傾斜している。底部東端は窪んでいる。炉内の覆土は4層からなっている。それぞれ、第1層は暗褐色土が4cm、第2層は炭混じりの黒色土が3cm、南端の窪みには第3層の褐色土が5cm、第4層は褐色土混じりの黄褐色土が2cmである。焼土は炉縁・炉底いずれにも見られない。覆土のしまりは弱く、全体にさらさらしている。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

## D14-7 炉跡 (図版5・29)

炉の平面はほぼ円形で、断面は全体として深皿状を呈し南に傾斜しており、南北の両端に窪みがある。規模は長径120cm・短径100cm・深さは南側25cm・北側15cm・中央部7cmである。炉内の覆土は6層からなっている。第1層は炉縁全体に広がる赤橙色の焼土で硬くしまっている。第2層は炉中央に広がる木炭混じりの黒色土が7cm、第3層も炉中央にあり木炭混じりの黒褐色土が8cm、第4層は暗褐色土で南端に集中する。第5層は黄褐色土混じり黒褐色土で南端に堆積する。第6層は黒褐色土混じりの黄褐色土で、南北両端の窪みに堆積するが、中央部の高みから流れたものであろう。第2層から第6層までの覆土は、しまりが弱く、さらさらしている。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

## (3) 土 坑

## 第1号土坑 (図版6・30)

E 9-23区を中心に検出された。土坑はV層の黄褐色土を掘り込み、長径332cm、短径182cm、深さ98cmである。平面は長楕円形を呈し、底が「U」字形の摺鉢状に構築されている。主軸線はN-85°-Eで、ほぼ東西となっている。

覆土は、最下層の第5層がサラサラした黄褐色砂質土で、第4層は黒褐色土のブロックの混じりが多い。

## 第2号土坑 (図版6・30)

C 9-15~20区で検出された。土坑はV層の黄褐色土を掘り込み、その下部はVI 1層灰褐色砂質土に至る。外円径は東西139cm・南北161cmで、内円径は東西72cm・南北90cmで、底径は長径48cm・短径22cm・深さ54cmである。平面の形状は二重になっており、外円、内円ともに楕円形である。外円の傾斜は緩やかで、内円の傾斜が急である。

覆土は第1層が黒褐色土でしまりがある。第2層は暗褐色土、第3層は暗黄褐色土である。覆土の堆積はレンズ状を呈している。

## 第3号土坑 (図版6)

D 10-17区を中心に検出された。土坑はV層の黄褐色土を掘り込み、南北径150cm・東西径163cm、底は南北径114cm・東西径116cm・深さ38cmである。平面は円形で皿状の浅い土坑である。中央部はしまりの良い黒色土で、外周から底部は暗黄褐色土である。

## 第4号土坑（図版6）

B 9-10区で検出された。土坑はV層の黄褐色土を掘り込み、長径116cm・短径82cm・深さ48cmである。平面は梢円形で、断面は摺鉢状を呈している。長軸はN-58°-Wである。覆土は、第1層が黒褐色土、第2層は暗褐色土、第3層は暗褐色砂層である。

## 第5号土坑（図版6・33）

D10-3・8区で検出された。土坑はIV層の暗黄褐色土から掘り込まれ、長径186cm・短径71cm、底部ピット上面まで深さ24cmである。底部のピットは径20cm・深さ23cmである。平面は長梢円形で、底部も長梢円形である。覆土は黄褐色土の単層であり、底部のピットは土坑よりも新しく、覆土は暗褐色土である。出土遺物はなく、時期は確定できない。

## 第6号土坑（図版6・33）

D15-21区で検出された。土坑はIV層の暗黄褐色土を掘り込み、長径262cm・短径85cm・深さ19cm（北端の深さ25cm）である。平面は梢円形で、断面は摺鉢状である。長軸はN-8°-Eである。覆土は、第1層が暗褐色土で、第2層は黄褐色土混じりの暗褐色土、第3層は暗褐色土混じりの黄褐色土である。出土遺物は繩文土器片が1点であるが、摩滅がはげしく、時期は確定できない。

## 第7号土坑（図版6）

D15-21区で検出された。土坑はIV層の暗黄褐色土を掘り込み、長径220cm・短径115cm・深さ30cmで、所々にピット状の落ち込みがある。平面は不定形な摺鉢状である。覆土は、第1層が木炭混じりの黒色土で、第2層は黄褐色土混じりの黒褐色土、第3層は黒褐色土混じりの黄褐色土である。出土遺物はなく、時期は確定できない。

## 第8号土坑（図版6）

C地区北東隅のC17-16~17区で検出された。土坑はIV層から掘り込まれている。推定の規模であるが、径約250cm・底径約120cm・深さ90cmである。形状は円形で、断面は摺鉢状である。覆土は、第1層が黒褐色土で、第2層は粗い砂粒混じりの灰黒褐色土、第3層は灰褐色砂質土、第4層は褐色砂質粘土である。出土遺物はなく、時期は確定できない。

## 4. 遺物

荻野遺跡で出土した遺物は、縄文時代中期から弥生時代までの各時期にわたり、土器・石器・剝片類を含めた総数は約6,300点である。

グリッド別数量分布を見ると土器・石器（剝片を含む）は、A地区（B 9～10、C 9～10、D 9、E 8～9、F 8～9区）に集中する。A地区は低い台地の舌状部分が南へ延びた所で、東西へ緩やかに傾斜している。遺物集中地域から西・南西に向かって出土量は急激に減少し、グリッド6列から西では遺物が出土しなかった。また、東側（C地区）も急減するが、グリッドによっては若干の出土もみられる。土製品・石斧・石鎌・磨石類もほとんどA地区から出土した。これらのこととは、生活の拠点がこの舌状部分から北方に広がっていたことを示している。遺物が縄文時代中期前葉に集中していることもこの遺跡を考えるうえで興味深い。

次に出土層位を見ると、Ⅲ層からの出土が大部分であるが、一個体に復元できる土器であっても、Ⅱ・Ⅳ層から出土した土器片と接合した例がしばしば見られる。また、出土土器には若干の時期差が認められるが、遺物の垂直分布からは、これらの上下差を見ることができなかつた。

遺物の出土は、そのほとんどが遺物包含層からの出土で、明確に遺構に伴うと判断されたものはなかった。したがって、遺物については遺構と包含層を分けて扱うことはせず、所属時期・器形（土器）と器種（石器）別に分類して報告する。なお、報告に際してはできるかぎり多くの資料を抽出・図示するように努めた。

- ・土器については、新潟県内の報告例が少ない器形のものがあり、分布範囲を知るうえで重要となる。
- ・石器の出土量は調査面積の広さの割に少ないが、出土土器が中期前葉に集中することから該期の石器組成を知る貴重な資料である。

## (1) 土器・土製品（図版8～20、写真図版10～19）

縄文時代中期から弥生時代に属するもので、時期不明の細片を含めるとおよそ6,000点である。時期区分可能な土器群別の出土割合は、大部分を縄文時代中期前葉（第I群土器）が占め、本遺跡の主体を成していることが分かる。粗製深鉢は時期不明であるが、全体の出土状況から縄文時代中期前葉に属するものと考えられる。なお、出土土器のほとんどは中・小破片のため、全体の器形・文様構成を推定できるものは少ない。

分類にあってはまず時期別に6群に大別し、大部分の土器が含まれる縄文時代中期前葉を第I群とした。そしてI群を文様を主たる要素（A～M）として分類し、さらに細かな特徴によ

り細分(1~5)した。文様帶の中で口辺部に文様が二種以上ある場合は下位の文様を基準に各文様を組み合わせた。浅鉢器形、胴部片、底部などについては細かい分類をしなかった。また、報告順序は必ずしも細かい時期的な前後関係をあらわすものではない。なお、深鉢の器形についてはa~gに細分した。

#### 第I群土器……縄文時代中期前葉の土器

A……細い沈線による同心円の文様をもつもの (22・24)

B……細半截竹管による半隆起線文のもの (25~28)

C……半隆起線文で口縁部文様帶を1段区画するもの

1 - 区画内が縄文のもの (13)

2 - 区画内が蓮華文のもの (14・19・29・30)

D……半隆起線文で口縁部文様帶を2段区画するもののうち、下位が無文であるもの。

1 - 上位区画内が蓮華文のもの (7・12・31~43)

2 - 上位区画内が軌軸文のもの (10・11・21)

3 - 上位区画内が縄文のもの (44・45)

4 - 上位区画内がその他の文様のもの (17・46~52)

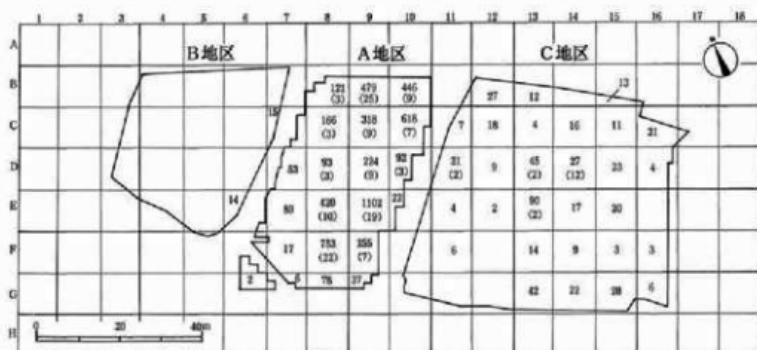
E……半隆起線文で口縁部文様帶を2段区画するもののうち、下位が縄文であるもの。

1 - 上位区画内が蓮華文のもの (16・53)

2 - 上位区画内が軌軸文のもの (59)

3 - 上位区画内が縄文のもの (2・8・20・60~67)

4 - 上位区画内がその他の文様のもの (68~70)



第5図 萩野遺跡土器出土状況 ( ) 内は中期前葉以外の土器破片数

- F ……半隆起線文で口縁部文様帯を2段区画するもののうち、下位が縦位半隆起線文であるもの
- 1 - 上位区画内が蓮華文のもの (71~76)
  - 2 - 上位区画内が繩文のもの (15・77)
- G ……C・D・Eのうち、下位が不明なもの
- 1 - 上位区画内が蓮華文のもの (78~96)
  - 2 - 上位区画内が軌軸文のもの (97・98)
  - 3 - 上位区画内が繩文のもの (99~106)
  - 4 - 上位区画内がその他の文様のもの (107・108)
- H ……口縁部に交差刺突文をもつもの (109~113)
- I ……B字状文・逆J字状文をもつ胴部片のもの (114~132)
- J ……類例の少ない文様をもつものおよび口唇部 (133~143)
- K ……繩文施文の粗製土器
- 1 - 繩文であるもの (4・5・144~148・150~153・160~163)
  - 2 - 口縁部に貼付け粘土紐をもつもの (3・154~159)
  - 3 - 羽状繩文であるもの (1・164・165)
  - 4 - 木目状撚糸文であるもの (166~171)
  - 5 - 撥糸文であるもの (172~176)
- L ……無文の土器 (9・177~184)
- M ……胴部片および底部 (185~206)
- N ……その他の土器
- 1 - 浅鉢形土器 (18・207・208)
  - 2 - 有孔跨付土器 (209)
  - 3 - ミニチュアの小型土器 (210~213)
- 第Ⅱ群土器……繩文時代中期中葉の土器 (214)
- 第Ⅲ群土器……繩文時代中期後葉の土器 (215~219)
- 第Ⅳ群土器……繩文時代後期の土器 (220~225)
- 第Ⅴ群土器……繩文時代晚期の土器 (226)
- 第VI群土器……弥生時代以降の土器 (227・228)
- 土製品………土偶 (229)
- 耳栓 (230)
- 不明 (231)

器形については以下のように分類した。

- a類 口辺がキャリバー形を呈する深鉢
- b類 口辺が「く」の字形に内屈する深鉢
- c類 口辺が直立する円筒形の深鉢
- d類 口辺の外傾する深鉢
- e類 口縁がわずかに外反する深鉢
- f類 口辺がキャリバー形を呈し、口縁が直立する深鉢
- g類 口辺がキャリバー形を呈し、口縁が大きく外傾する深鉢

なお、このほかに平安時代の須恵器の断片（佐渡小泊窯産）が1点出土しているが、図化はしていない。

### 第1群土器

#### A類（図版11、37）

同心円の文様を持つ土器である。1個体と1片が出土している。

22はb類に属し、若干膨らんだ胴部が頭部にきてやや縮み、「く」の字に内屈した口縁を持つ深鉢である。口縁部上端は縦位の集合短沈線が巡り、内屈する突出部分に2条の隆起線文が施されている。この隆起線文上には梢円状の4個の突起が付き、隆起線文下に爪形文が施された細い半隆起線文が4条巡る。この土器は多少いびつな作りであるが4単位である。頭部は細い半隆起線文が3条巡り、胴部の文様は半隆起線文・交互刺突文・爪形文が施された半隆起線文により方形状に4区画される。3つの区画内は沈線により同心円状の文様が施され、うち2つの外円上下左右に刺突文、残りは左下方に多条の爪形文が施され、外円への刺突文が省かれている。今1つの区画は左3条・右2条の爪形文が下方で隅丸状になり、その中は横位の密沈線を充填後、5条の縦位沈線を施している。各区画内の文様は若干の相違を持って施されるが、同心円文や口縁部から頭部にかけての半隆起線文と交互刺突文の充填方法に特徴がある。

色調は明赤褐色を呈し、胎土は良質で、焼成も良い。内面はナデ調整である。

24は深鉢形土器の波状口縁部である。単沈線による渦巻き文と弧線文の施文を主体とする。渦巻き文の最外円部には刺突が施される。口唇部やその他の区画内は密な沈線を充填し、さらに三角形の削り取りを行う。口縁部内側は口唇に平行する段差がある。調整は極めて丁寧で滑らかな仕上がりである。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂質で焼成は堅緻である。

#### B類（図版11、37）

細目の半截竹管による半隆起線文の文様をもつものをまとめた。中期前葉の新保式土器様式に含まれるものと考えられる。本遺跡での出土数は少ない。

25はa類で口縁部がやや内屈しながら直立している。口唇部は細い半截竹管（幅4mm）で上方に突出する。口辺部も細い半截竹管で縄文地を4単位に区画していると想定でき、更に区画内は図上中央上端から「八」の字状に広がる半截竹管によって2分割されている。半截竹管による施文は丁寧である。頸部の無文帯は縄文地を横ナデ調整で仕上げたものである。頸部には幅1.5cm、高さ1cmの貼付突起がある。黒褐色を呈し、内面は横ナデ調整を入念に施している。胎土は良質で焼成も良好である。口径約14cm・現器高約6cmである。

26はc類で口唇部の下約8mmの位置で、幅3mmの細い半截竹管で横位2条の半隆起線文を施す。さらに1.5cmの間隔を取って、横位2条の半隆起線文を施して横位無文帯を形成した後、先の細い半截竹管で縦位の密な沈線を施している。調整は内面、外面ともにやや粗雑である。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土に若干砂粒が混入するが良質である。焼成は良好である。口径は約9cm・現器高約4cmである。27は胴部の小片で器形は不明である。幅3mmの細い半截竹管で縦位の半隆起線文の区画を作る。この区画はB字文の変形したものと推定する。区画内に斜格子目文を施している。格子目文は縦位の沈線を引いた後、横位の沈線を施す。25～27はいずれも器厚が薄目である。

28はc類ないしはe類で、口縁部には細目の半截竹管による2条の横位の半隆起線文を施し、その間は横位のLR縄文帯とする。半隆起線文の引き方は粗雑である。下位は横ナデ調整で仕上げた。色調はにぶい橙色を呈し、内面は既で横ナデ調整を丁寧に施している。胎土は良質であり、焼成も良好である。

#### C類（図版9～11、35～37）

半隆起線文で口縁部文様を1段区画したものをあつめた。その区画内の文様を縄文、蓮華文などに分類した。

C-1類 13はc類で大小一对の山形の突起があり波状口縁となっている。1ないし2単位の波状口縁と想定できる。地文はLR縄文である。波状の頂点から約6cmの位置に径約8mm、高さ約4mmの小突起がある。この小突起は4単位と想定できる。この位置から横位に2条の半隆起線文を巡らし、小突起手前で垂下し、U字形に折り返す。垂下する半隆起線文も小突起同様に4単位と想定できる。口唇部は半截竹管の調整でカマボコ状を呈す。色調は内面が淡黄橙色、外面は暗褐色を呈する。胎土は砂粒を含むがやや良質で、焼成は良好である。口径約28cm・現器高約18cmである。152（Kの1類）は口縁下に豆粒大の貼付突起（4単位）があるが、その施文方法を発展させたものと解せる。

C-2類 14はc類に属するが、底部から直線的に微妙な外傾をもつ。波状口縁を有し、口唇部の半隆起線は波状の頂点で分離する。頂点下約3cmの位置で横位の半隆起線文を6条（2・3条目は爪形）施し、幅1～1.5cmの横位の擦糸文帯を形成し、その上端に三角形陰刻を施す。

やや大きめの蓮華文を作り出している。また、波状頂点直下の6条の半隆起線文上に径約2cmの半球状突起とそこから垂下する爪形が施された粘土紐が貼付けられている。色調は内面が明赤褐色、外面は暗赤褐色を呈する。胎土に混入物がなく良質で、焼成も良好である。内面は横ナデ調整が施されている。口径約23cm、現器高約9cmである。29は14と同様の施文方法である。半隆起線文が数条巡り、胴部は撚糸文である。器形はc類とe類の中間に相当し、口縁部がやや外反気味である。色調は黄褐色を呈し、胎土は良質で焼成も良い。口径約27cm・現器高約8cmである。

30は口縁部のみである。角状の波状口縁である。口唇部は丁寧に調整され、平らで内ソギである。波状頂点から垂下する貼付紐により、文様区画は4単位に分割されるものと想定する。区画内の下段に軌軸文を、上段に長い三角形陰刻を施している。蓮華文の衰退した形態と考える。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂質を帯びやや良質で、焼成はかなり良好である。内面は丁寧に調整されている。

19はc類である。口唇部に半截竹管で調整を加え、口唇部から垂下する隆帶は6cmほどで右へ曲がり、口縁部を4単位に分ける。口縁部に横位3条の半隆起線文を引き、LR繩文帯を形成し、密な綴位沈線を施文したものである。横位3条の半隆起線文下は半截竹管で浅い半隆起線文を縱横に施し、B字状文を作る。その区画内は沈線により雑な格子目文となっている。施文は垂下の粘土紐、B字状文、3条の半隆起線文の順で行われた。色調は内面が暗赤褐色、外面が黒褐色を呈する。胎土は細かい石を若干含むがやや良質であり、焼成も堅緻である。口唇部内側から口縁部内面にかけて横ナデの調整痕が認められる。

#### D類（図版11、12、37）

半隆起線文で口縁部文様帯を2段区画するもののうち、下位が無文であるものをまとめた。さらに、上位区画内の文様を蓮華文、軌軸文、繩文、その他の文様の4つに大きく分類して述べる。

D-1類 上位区画内が蓮華文であるもの。蓮華文の衰退した様式であるという綴位平行短沈線や沈線集合体もここで述べる。

34はc類に属し、胴部、口辺部が共に直線的でやや外傾する円筒形深鉢形土器と想定できる。三角形陰刻で蓮弁を作り出し、花弁に2～3条の沈線を施す。口唇部は調整により、平らに磨かれている。色調は内面が灰黄褐色、外面はにぶい赤褐色を呈する。胎土は少し砂質で、焼成は良好である。

33は円筒形の深鉢形土器の口縁部である。蓮華文は三角形陰刻の抉りで花弁を作り出す。抉り技術は粗雑である。花弁に2～3条の綴位沈線が施される。無文帯を区切る半隆起線文は浅く、粗雑である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は良質で、焼成も良い。

31はc類に属するが、口縁がわずかに外反している。横位2条の半隆起線文により上下の文様区画を分かつ。蓮華文は上段の三角形陰刻により作り出され、花卉は軌軸文である。この文様も蓮華文の衰退したものと位置付ける。

37はf類で上位区画内の文様は、縦位の沈線をひき、二種の文様を施文する。一つは上下から三角形陰刻を施し、横に広い六角形鋸歯状文を作り、その中央は刺突されている。今一つは沈線の中央に横位の沈線を入れ、軌軸文を施している。これも蓮華文の変形と解される。無文帯は隆起線文より低いが、器厚との比較で器面を削り取って調整したものであろう。色調はにぶい褐色を呈する。胎土は良質である。焼成も堅緻であり、器厚は薄手である。口唇部から内面にかけて丁寧な調整で滑らかに仕上げられている。

36はc類で施文方法は32に類似する。半隆起線文と爪形文により上下の文様帯を分ける。下位の無文帯は半隆起線文によりいくつかに分けられる。上位の文様は一つは軌軸文、残りは深い縦の沈線によって正方形を作り、その中央に孔を開け六角形鋸歯状文の変形となっている。無文帯の下位にある軌軸文に三角形陰刻を施し、小さな蓮華文を作っている。上位の正方形の作り出しも蓮華文の変形と解される。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は砂粒が混入している。焼成は良好な方である。

12はc類であるが、d類の要素も若干含むLR縦文地の深鉢である。無文帯と上位の蓮華文は、口唇部を半截竹管で調整した後、2条の半隆起線文を巡らし、横位の縦文帯を2列作る。ただし、上位の縦文帯の場合、うち1条を口唇部から引いて4単位に区画する。下位の縦文帯は磨り消し調整で無文帯に、上位には三角形陰刻と沈線を施文して蓮華文を作り出す。胴部以下は縦文地のままである。色調は全体に明赤褐色で口縁部は黒褐色を呈する。胎土は良質で、焼成も良い。内面に若干の調整痕が認められる。

7・38～43は、上位区画に半截竹管により縦位の平行沈線を施すものである。蓮華文とは文様を異にするが、施文テクニックが同一であるから蓮華文の退化したものとしてここで扱う。また、頸部無文帯の下に、文様帯をもち多段区画であるが、上位と同一文様である。

43はa類に属する。上位の縦位平行沈線帯は幅1.5cm、沈線の間隔5mmである。色調はにぶい黄橙色を呈し、砂質を含み良質で、焼成も良くない。内面に横ナデの調整痕が認められる。

42はc類である。上位の縦位平行沈線帯は幅1.3cm、沈線の間隔約8mmである。下位無文帯の幅は1.3cmである。色調は外面がにぶい黄橙色で、内面は暗褐色を呈する。胎土には雲母を含む砂質分が多い。焼成は良い。内面の調整が良く、口唇部は鋭角的である。

7はa類に属する大型の深鉢である。口唇部の形態から3単位の波状口縁と想定した。頸部に幅4.5cmの無文帯、口縁部と胴部上端に縦位平行沈線帯をもつ。口縁は幅1.5cm前後の縦位平行沈線帯（沈線間隔1cm）を設け、横位2条の半隆起線文を施す。下段も同様の文様構成である。なお、下段の文様帯にはJ字状の隆帯が貼付けられるが、施文順序はJ字状隆帯が先であ

る。この隆帯から5条の縦位平行沈線が底部近くまで垂下する。胴部はR L繩文地である。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土はやや良質で、焼成は良い。施文技術や器面調整は粗雑である。口径約40cm、現器高約27cm、器厚約1cmである。

38・39はc類で、口唇部の隆起線文から約2cm下に横位隆起線文を巡らす。上下の縦位集合沈線帶は幅1.5cm、沈線の幅は4mmで比較的細い。無文帶は丁寧に調整し滑らかである。下位の文様帶には渦巻き状の文様、半円の隆起線文、そこから垂下する3条の隆起線文など複雑である。施文は深く丁寧である。色調は内面が赤褐色、外面は暗赤褐色を呈す。胎土は良質、焼成は堅緻である。口唇部内面は丁寧な調整で滑らかである。口径約27cm、現器高約18cmである。40もc類に属する。横位無文帶（幅2.5cm）から2条の横位半隆起線文を隔てて、上下の区画に縦位平行沈線が施される。沈線および半隆起線文の幅は5mmである。下位の縦位平行沈線上には突起が充填されている。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は砂粒を含む。焼成は良い。41もc類に属する器形の波状口縁である。施文方法は40と同じである。最下位の文様帶に背状の隆帶が付く。色調は明褐色を呈し、胎土・焼成ともに悪い。器厚は約8mmと薄手である。

35はe類に属し、胴部に若干の脇らみをもち、頸部がわずかに外反し、内屈しながら口唇部が立っている。口唇部からひいた半截竹管により口縁部に幅1cm程の区画を3単位作り出し、上位の区画とする。その後、口唇部から縦位の半隆起線文を1条頸部下まで垂下させている。横位無文帶は、横位繩文帶を磨り消して作り出されており、半隆起線文が施されている。色調はにぶい黄橙色を呈し、内面の口辺部は炭化物がこびりついている。胎土、焼成とも良い。内面は調整され、口唇部は稜線状を呈す。口径約13cm、現器高12cmである。37はa類で上位の縦位沈線帶の幅は0.5~1cmと狭い。逆に下位の横位無文帶は幅3cmと広い。口唇部から垂下する半隆起線によって文様帶は、4単位に分けられる。

#### D-2類 上位区画内が軌軸文であるものをまとめた。

10はc類で口縁部は上端に三角形陰刻をもつ軌軸文である。蓮華文とするにはあまりにも粗雑である。口唇部からは逆J字文の隆帯が垂下する。頸部の無文帶は幅2cmで、胴部は縦位平行沈線、B字状文で区画し、その区画内に格子目文を施している。色調はにぶい橙色を呈し、外面は口辺部の所々におこげ状の炭化物が付着する。胎土はやや粗で、焼成も良くない。

11・21はe類で両者とも全体的に粗雑である。口縁部は波状で頂部に抉り、頂部下に径1cm程の孔が穿たれる。胴部上半の2本の隆起線により、口縁と胴部の文様帶を分ける。口縁部文様帶は頸部の横位無文帶と隆起線をはさみ、上下に軌軸文が施される。口唇部は内側に段差があり、口唇から逆J字状の隆帯が垂下している。胴部文様帶は木目状然糸文(II)・撚糸文(II)を地文とし、B字状の隆起線が垂下する。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は粗く、焼成も悪い。内面に少し調整痕が認められる。

#### D-3類 上位区画内が繩文であるものをまとめた。

44・45はa類で口縁部である。44は波状口縁の頂点から半隆起線が垂下する。口縁部はL R繩文と2本の半隆起線が施され、その下位は無文帯である。色調は灰白色を呈し、胎土は砂粒、雲母片を多く含み粗質であり、焼成も悪い。45の口縁部はL R繩文で、下位無文帯との間は、C字状の爪形文と半隆起線文である。胎土は雲母を含む砂質粘土で、焼成は良くない。

D-4類 上位区画内が1~3類以外のものをまとめた。

47はe類と考えられる。口縁部は格子目文と横位2条の沈線で、下位に無文帯をもつ。10の格子目文より沈線は太く深い。色調は内面がにぶい黄橙色、外面は褐灰色を呈する。胎土は砂粒大の石や雲母を含み脆い。焼成も良くない。口唇部は内ソギの調整がなされている。

46・48はc類で文様構成は同一である。口縁部は横位無文帯をはさみ、上下に隆起線が付く。46はさらに口唇部から隆起線が垂下する。この隆起線と無文帯に朱が塗られた痕跡がある。内面調整は難である。48は口唇を平らにし、内面も丁寧に調整されている。

51の器形は不明であるが、口縁部付近と思われる。無文帯の下に横位半隆起線文と逆C字状の爪形文が合わせて3条ある。17はe類で胴部の文様はL R繩文地にB字状文で4単位構成となっている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒や雲母を含み粗質である。焼成は良い方である。

#### E類 (図版8~10、12、13、34~38)

半隆起線文で口縁部文様帯を2段区画するもののうち、下位が繩文であるものをまとめた。上位区画内の文様を蓮華文、軸文、綱文、その他の文様の4つに大きく分類する。

E-1類 上位区画内が蓮華文であるものをまとめた。

16はc類で地文はL R繩文である。施文された横位3条の半隆起線文により、文様区画は分割される。下位の横位繩文帯に特徴がある。半隆起線文上の貼付隆帯により左右の文様が異なる。右側は約1.5cm間隔に横位繩文帯の上下から交互に三角形陰刻のえぐりを入れる。左側は繩文帯のままである。上位区画の蓮華文は狭く、不揃いな間隔(4~8mm)で粗雑な三角形陰刻を施すのみで、蓮華文としては貧弱である。色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土は良質、焼成は良好である。内面は横ナデ調整がなされている。

以下は蓮華文の衰退した文様のものをまとめた。

56はa類で口縁部は内屈する。上位文様は幅3mmの細い半截竹管で縦位の密な沈線を施す。口唇は半截竹管と横ナデにより稜を成す。地文はL R繩文である。色調は明赤褐色を呈す。胎土は砂粒を含む。焼成は良い。

55・57はc類で、ともに上位区画に縦位の平行沈線を施す。地文はL R繩文である。色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土はやや粗、焼成は良い方である。内面には横ナデの調整痕が認められる。器厚は約1cmである。

6はe類で胴部にわずかな膨らみをもち、口縁部が若干外反する。横位3条の半隆起線文が上下の区画を分ける。下位の縄文帯は幅約6cmである。上位区画内は縦位の密な沈線を施す。文様割付は頸部まで2単位、胴部は4単位である。口唇部からは逆J字状の貼付隆帯が下段の半隆起線文まで垂下し、下段の半隆起線文はその位置から胴部中程まで垂下する。口唇は平らにナデられ、内面は滑らかである。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は砂粒と雲母を含み粗質である。焼成は良好である。口径約31cm、現器高約41cmである。

54・58はc類に属し、54の上位区画は縦位沈線で、下位の縄文帯とは横位2条の半隆起線で区切る。色調はにぶい黄橙色で、器厚は約1.3cmとやや厚めである。58も縄文地へ縦位の沈線を施す。色調は黒褐色を呈す。胎土に雲母を含み粗であり、焼成も良くない。

#### E-2類 上位区画内が軌軸文のもの。

59はa類で、軌軸文は縦位の密な沈線を施文後、不連続で雑な横位の沈線を施している。軌軸文下は半隆起線文で地文はLR縄文である。色調は黒褐色を呈す。胎土は砂粒、雲母を含み粗であるが、焼成は良好である。

#### E-3類 上位区画内が縄文であるもの。

2はc類である。口唇部は半円状の突起を1つだけもつ。口縁部は逆J字文により2単位の文様構成である。さらにもう1か所、逆J字文が口唇部から垂下している。各単位の頸部は松笠状の貼付突起を充填し4単位とする。胴部は上位の突起に応じてB字状文により4単位の文様構成をなす。上下の文様帶区画は横位2条の半隆起線文で分かれ、下位文様帶は横位3条と4条の半隆起線文で胴部と区画される。口縁部上位縄文帯の幅は1.5~2.5cm、下位縄文帯の幅2~2.5cmと一定しない。胴部の文様はB字状文と縦位平行沈線を基本としながら、半円・V字状文を施す。B字状文等の区画内は地文のままである。施文順序は逆J字状文・貼付突起の施文、次に横位半隆起線文、最後に胴部のB字状文である。色調は内面がにぶい褐色、外面の上半分は黒褐色を呈する。胎土は砂粒を含み粗質であるが、焼成は良い方である。口径約27cm、現器高約29cmである。

8はc類で逆J字状の隆帯を口唇部から貼付けている。口縁部を2条の半隆起線文で2段に区画する。頸部の半隆起線文は3条で、下の1条は逆J字状文の下で垂下し、胴部中ほどで消滅する。地文はLR縄文である。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成ともに粗い。外面に炭化物が付着する。口径約24cm、現器高約21cmである。

65・66はa類である。地文はLR縄文で、横位2条の半隆起線文が施される。60・67はc類で地文はLR縄文である。口縁部には2条の横位半隆起線が間隔をおいて2帯存在する。60は口唇部から葺状の隆帯が貼付される。色調は褐色を呈し、胎土に大粒の砂が混入する。焼成は良い方である。口径約24cm、現器高約9cmである。

20はd類で口唇には半円状の突起をもつ。上下の区画は2条の半隆起線文と間の爪形文によ

り分かつ。口唇部から脣部にかけて斜めの粘土紐と半隆起線文を組合せて頭部に3単位の文様を構成する。地文はLR繩文である。色調はにぶい黄橙を呈し、胎土は砂粒を含みやや粗質で、焼成は堅緻である。口唇部はソギ調整を加え平らであり、内面も丁寧な調整で滑らかである。口径約20cm、現器高約20cmである。

61~63はc類で口唇は波状を成し、その頂点から粘土紐の隆帯が垂下する。地文はLR繩文である。61の隆帯は横位の繩文圧痕、62・63の隆帯はRL繩文で地文と相違する。62・63は胎土に砂と雲母を含む。

64はa類で波状頂点から2本の平行する縦位の半隆起線が垂下する。内面の調整は丁寧で、色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

#### E-4類 上位区画内がその他のものをまとめた。

68・69はdないしはe類で、口縁部に半隆起線と爪形が2段横走する。68は口縁部に逆J字状文の隆帯のあった痕跡がある。地文はLR繩文である。68の色調は黄橙褐色を呈し、胎土、焼成とともに粗である。口径約19cm、現器高約8cmである。70はe類で幅広の半隆起線2条が横位繩文帯を区画するが、半隆起線文が文様の中心でもある。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

#### F類 (図版10、13、36、38)

半隆起線で口縁部文様帯を2段区画するもののうち、下位が縦位半隆起線文であるものをまとめた。上位区画内の文様を蓮華文、繩文の2つに大きく分類する。

#### F-1類 上位区画内が蓮華文であるものをまとめた。

71・72はa類で2条の半隆起線が横走し、上下の区画を分かつ。71の蓮華文はLR繩文地に三角形陰刻の挟りを施している。72は蓮華文の施文技術が粗雑で、大きさが不揃いである。ともに、色調は内面がにぶい褐色、外表面が黒褐色を呈し、胎土は砂粒、雲母を含み粗質で、焼成も良くない。

73~75はa類で蓮華文の施文に特徴がある。三角形陰刻は文様帯の上端から行い、花弁には沈線が施される。退化した蓮華文といえる。73・75の下位の縦位半隆起線文帯は、2条の半隆起線文の囲みにより何単位かに分かれる。色調は内面が暗茶褐色、外表面が黒褐色を呈する。胎土は雲母を含む砂質でやや粗、焼成は良好である。口唇部と内面に横ナデの丁寧な調整が施される。76も同様な文様構成である。

#### F-3類 上位区画内が繩文であるものをまとめた。

15・77は同一個体と想定する。器形はc類で、上下の区画を分ける2条の半隆起線とその下の縦位半隆起線は粗雑である。上位区画の繩文帯はLRで脣部はRLである。口唇部から垂下すると思われる逆J字文と、それより下へ延びる半隆起線により文様構成が分かれている。色

調は内面がにぶい黄橙色、外面が暗褐色を呈する。胎土はかなり粗質で、焼成も悪い。口径約22cm、現器高約12cmである。

#### G類(図版14、38)

D・E・F類に含まれるもの内、下位の文様帶の不明なものをまとめた。上位区画内の文様を蓮華文、軌軸文、繩文、その他の文様の4つに大きく分類する。

##### G-1類 蓮華文をもつものをまとめた。

80~84・88は口縁部の蓮華文に三角形陰刻の抉りを施し、その後、花弁に縦の細い沈線を付ける。中でも80の蓮華文はしっかりしている。84・88は三角形陰刻の幅が狭いうえ、縦長のため太い沈線状を成す。81~84は花弁上に繩文地がかすかに残る。色調は80・88がにぶい黄橙色、81・82が黒褐色、83・84がにぶい褐色を呈する。胎土は80・88が砂質で雲母を含みやや粗質で、その他の破片は大粒の砂を含み粗質である。焼成は堅緻である。80・88の器形はa類に属し、他は器形不明である。

79はc類で、蓮華文は横位のLR繩文地に三角形陰刻の抉りで花弁を作り出す。花弁に1~2条の斜位沈線を施すが、沈線数が一定しない。半隆起線文は雑で、色調は内面が明褐色、外面が黒褐色を呈する。胎土は大粒の砂を含むがやや良質である。焼成は良好である。

78はa類で、蓮華文は横位LR繩文帯に三角形陰刻の抉りで作り出している。色調は内面がにぶい褐色、外面が黒色を呈する。胎土は雲母と大粒の砂を多く含み粗質で、焼成も良くない。

89・90・95は逆蓮華文である。89は三角形陰刻の抉りと花弁には数条の沈線が丁寧に施されている。色調は内面が褐灰色、外面がにぶい橙色を呈する。胎土は大粒の砂と雲母を含みやや粗質である。焼成は良好である。口唇は横ソギの調整で鋭角的である。器形はa類である。90の逆蓮華文状の文様は、上下からの沈線で雾團気を出している。95も同様であるが、少し粗雑である。器形はともにc類で、95は口縁部に若干の反りがある。ともに色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は大粒の砂が混じり粗質である。90は焼成が良く、口唇部から内面まで横ナデの丁寧な調整痕が認められる。

85は横位のLR繩文帯に縦位の密な沈線を施し、上端に三角形陰刻の抉りを入れ蓮華文としている。文様帶の下半は横位沈線を施す。胎土は雲母と大粒の砂を含む。焼成はやや良好である。器形はc類である。97は1類で横位のLR繩文帯に密な細い縦沈線、中央に横位の沈線を施し、三角形陰刻の抉りで蓮華文を作り出している。横位の沈線上に横位の三角形の抉りが入っているが、全体が判らない。口唇部や内面の調整は丁寧である。

86はc類で波状口縁と想定できる。格子目文を施文後、上端に2か所の切れ込みを入れてから粘土を抉り取り三角形を作り出し蓮華文とする。

多くの場合、三角形陰刻は施文具を斜めに入れて一気に粘土を抉り取るが、86と89の施文手

法は特異である。殊に89は北陸の手法に近いといえる。

91~94は上位区画に縦位の密な沈線・平行沈線・半隆起線文を施している。

91・94はa類で、92・93はc類である。92は斜めの竹管による半隆起線の集合体である。

93は横位のLR繩文帯の中ほどから縦位の沈線を施す。沈線は太目で、長さも一定しない。色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土は雲母を含む砂質で粗く、焼成も良くない。94は横位無文帯の上端から中ほどまで細い沈線を施している。沈線の間隔は一定しない。胎土は砂を含みやや粗質であるが、焼成は堅緻である。87・96の蓮華文には、縱横の沈線が施される。

G-2類 上位区画のみに軌軸文をもつものではなく、98は胴部片である。縦位沈線を先に、横位の沈線を後に施している。

G-3類 繩文をもつものをまとめた。

101~104はa類で、いずれもLR繩文である。101・102の横位の半隆起線は粗雑である。色調は104を除いて、にぶい橙色を呈す。104は内面が明赤褐色、外面が暗赤褐色を呈す。胎土はやや粗質である。103・104の口唇は内ソギにより稜線を呈す。103は繩文地に磨耗の調整痕が認められる。

99・100・105・106はc類で、100は細身の繩文のうえ、横ナデの調整により文様が不鮮明である。100と106の口唇部におこげ状の炭化物がこびりつく。色調は100を除き内面がにぶい橙色を呈し、105の外面は褐灰色を呈する。100の色調は褐色を呈す。胎土は大粒の砂を含みやや粗質である。焼成は100のみ堅緻である。

G-4類 その他の文様をもつものをまとめた。

107・108は横位の半隆起線文や爪形文を施したもののである。いずれもe類で、107は半隆起線文に粗雑さが目立つ。色調は明褐色を呈す。焼成は不良である。108の爪形文は竹管を弱く施したため、三日月状の沈線となっている。色調は内面が灰黄色、外面が暗褐灰色を呈す。胎土はともに雲母と大粒の砂を含み粗質である。焼成は良好である。

#### H類 (図版15, 39)

交互刺突文をもつものをまとめた。

109~113はすべて五領ヶ台式土器に比定される。

109・110は深鉢の口縁部である。口唇部に刻みが入り、口縁部は1条おきに交互刺突された半隆起線が巡る。110は頸部に丸い貼付が施される。色調は黒褐色を呈し、胎土は砂粒が混入する。焼成は良好である。

111の口唇部は内ソギ調整される。口唇部に刻みを入れ、その下は交互刺突文が横位に巡り、さらに無文帯が続く。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良質、良好である。

112は深鉢の胴部である。無文地に縦位の隆帯が貼付けられ、交互刺突される。色調はにぶ

い褐色を呈し、胎土、焼成は良質、良好である。

113は深鉢の頸部から胴部にかけての破片である。横位と縦位の交互刺突文・半隆起線で区画を作る。区画内はR L繩文である。色調は明黄褐色を呈し、胎土、焼成は良質、良好である。

#### I類 (図版15、39)

胴部片に半截竹管によるB字状文が施されるものをまとめた。口縁の形状が不明であるが、第I群のC～Gの土器群の胴部片である。文様構成の典型は2でみることができる。

半隆起線文で弧線を描き、B字状、R字状などの文様を施すものである。115～117・122・130は区画内に格子目文を持つ。116・117の色調はにぶい黄褐色を呈す。117の外面は黒褐色を呈す。胎土は雲母、砂粒を含み粗質である。116の焼成は堅緻である。器厚は5片とも1cm以上ある。

114の格子目文は縦位沈線が密である。半隆起線は細い。焼成は良好である。121・128・129・131は区画内の格子目文は浅い沈線で、施文も乱れがちである。131は色調が暗褐色を呈し、胎土は良質で、焼成も堅緻である。内面の調整は丁寧である。他は雲母や砂粒を含む。121は赤褐色を呈し、焼成は良い。器厚は1.3cmと厚い。

118～120・126・127は区画内が地文のままである。120・126・127の色調は赤褐色を呈する。胎土はともに雲母を含む砂質で粗い。119は焼成が良好である。

123・124は浅い半隆起線でU字の下を向かい合わせ、その間に円を描く文様である。色調は内面がにぶい橙色を呈し、外面はおこげ状の炭化物がこびりつき、暗褐色を呈す。胎土は雲母を含む砂質で粗い。焼成はやや良好である。

#### J類 (図版16、40)

類例の少ない文様をもつもの、および口唇部をまとめた。

133はキャリバー形を呈する深鉢の口縁部である。頸部に突起を有する。波状口縁の頂部付近から頸部に半隆起線が2条垂下している。頸部に半隆起線文が2条巡っている。器面には磨り消し繩文の痕跡が認められる。色調は淡黄色を呈す。焼成は良くない。口唇に竹管の調整がある。

134は口縁部がわずかに外反する深鉢である。口唇部に2条の半隆起線が巡り、間に爪形文を施す。横位繩文帯を挟み同類の文様がその下にも施される。Y字状の貼付け突起には繩の側面圧痕が垂下し、内面には凹がある。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒が混じり、焼成は良好である。

135は口縁がかすかに内湾し、L R繩文地に2条の繩文圧痕が巡る。口唇に内ソギの調整がなされている。胎土は砂粒混じり、焼成はやや悪い。

136は口縁部破片で器形を断定できない。口縁部上端に2条の半隆起線をひき、上部に爪形文を施す。色調はにぶい橙色を呈し、胎土、焼成とも良い。

137はc類で器壁は薄い。LR繩文帯を挟んで半隆起線が施される。口縁部上端を擒んで作ったような突起が特徴である。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

138は胴部の破片であろうが、器形は定かでない。細い半截竹管の背面で3条の継位沈線を施し、その脇にやはり竹管の背面で爪形文を施している。繩文地を磨り消した痕跡が認められる。器厚は薄手、色調は褐色を呈し、胎土は良く、焼成は極めて堅緻である。

139は深鉢の頸部破片である。半隆起線文と粘土紐の隆帯の文様から北陸系の影響を受けていると推定できる。器厚は厚く、色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土、焼成とも良い。

140は口縁部突起である。渦巻き状に盛り上る突起で類例がない。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

141は口縁部につく把手と想定される。器形が特定できない。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好である。

142は口縁部につく袋状の突起である。口縁部近くに貼付いていたものと想定できる。外面は爪形状に施される。色調はにぶい黄橙色を呈する。

143は上部から垂下した貼付の渦巻文様や隆起線で隅丸長方形の区画を作る。渦巻文様は複雑で、北陸系と異なる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は雲母を含む。焼成は良い。内面は丁寧な横ナデ調整がなされている。

#### K類（図版8、16、17、34、40、41）

繩文施文の粗製土器をまとめた。繩糸文もここで扱う。文様や施文方法により次のように分類した。繩文、羽状繩文、木目状繩糸文、繩糸文などである。

K-1類 4・5・144～148・150～153・160～163が該当する。

4・5・144～148は土器の器面全体にわたって繩文が施される。

4はc類に属し、胴部より底部まで残存する。LR繩文である。底部近くは調整により文様が磨滅している。色調は内面と外面底部がにぶい黄橙色、外面上部が灰黄褐色を呈する。底部のやや上に炭化物が広く付着する。胎土は砂粒が多く混入し粗質である。焼成は不良である。底部径は約17cm、現器高約25cmである。

5もc類でLR繩文である。底部は調整により文様が磨滅している。色調はにぶい黄橙色を呈する。口縁部に輪状の炭化物がある。口唇部より約7cm下に炭化物が帯状にある。胎土・焼成は4と同様である。口径約29cm、器高約38cmである。

144はe類に属し、145・147はc類に属する。いずれも炭化物の付着が認められる。色調は

にぶい黄橙色を呈す。胎土は4・5と同じである。147は焼成が良好である。146は橙色を呈し、焼成は良好、内面に横ナデの調整痕がある。

149はc類で、口唇部から垂下する隆帯が充填される。LR繩文地であるが、隆帯はRL繩文である。外面に炭化物が広く付着する。焼成は良好である。

148はa類でRL繩文である。口唇に玉抱き三叉文をもつ。口縁部の繩文には炭化物が認められる。

150はe類に属し、口唇部に刻目文をもつ。口唇外側と頭部に細く棒状に線がひかれている。色調はにぶい橙色を呈し、外面に炭化物がこびりつく。胎土はやや良質で、焼成は良い。

151～153は波状口縁部をもつ。

152はc類に属し、底部から直立する。単節の繩文である。波状口縁頂点より下に半球の突起を充填する4単位の文様である。外面は一面におこげ状の炭化物が付着する。色調は内面が明赤褐色を呈す。胎土は大きい砂粒を含み粗質で、焼成もやや不良である。口径約19cm、現器高約10cmである。153はRL繩文の目に炭化物が詰まっている。色調は内面が褐色を呈する。胎土は雲母を多く含み、焼成はやや良い。

151はe類に属する。頭部に繩文の磨り消し調整があるが、全体に繩文の磨滅が大きい。色調は内面がにぶい赤褐色、外面がにぶい橙色を呈する。焼成は不良である。

160はc類に属し、無節繩文をもつものである。色調は明黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良くない。

161～163は繩文側面圧痕をもつ。

161はe類に属する円筒形深鉢の口縁部である。口唇部は折り返しである。色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土、焼成とも良くない。162はe類に属す。LR繩文地に平行沈線を組合せて縦横に施している。色調は黒褐色、胎土は砂質で焼成はやや不良である。

K-2類 口唇部外側に粘土を貼付して段差を持つのが特徴である。

3はc類に属し、バケツ状を呈する。口縁部の貼付は無文である。口縁部から下はおこげ状の炭化物が一面にこびりつく。また、胴部内面下部にも炭化物が付着する。色調はにぶい褐色を呈し、焼成は良くない。口径約27cm、器高約37cmである。

154はe類に属し、口縁部に粘土紐の貼付を持つ。頭部より下は調整により無文帶である。色調は明赤褐色を呈す。胎土は雲母、砂粒を含み粗質で、焼成もやや悪い。口径約23cm、現器高約9cmである。156の横位無文帶は調整によるものである。外面はスス状の炭化物が付着する。色調はにぶい黄橙色を呈す。159はc類に属し、貼付部分にも繩文施文がある。口唇部、口縁部におこげ状の炭化物がこびりつく。158は撚糸文である。

K-3類 羽状繩文をまとめた。

1はc類に属する。底部からおよそ15cmより上まではおこげ状の炭化物が一面に付着する。

色調は内面がやや褐色で、外面がにぶい黄橙色を呈す。焼成は良くない。164は口縁部内側に粘土紐の貼付を持つ。外面に炭化物が一面付着する。色調は褐色を呈す。165はc類に属する口縁部で、わずかに膨らみを持ち、口唇部の貼付が剥落している。口縁部におこげ状の炭化物の帯があり、その下はスス状の炭化物が付着する。内面の色調は薄い褐色を呈する。

K-4類 木目状撚糸文のものをまとめた。

166はc類に属し、口縁部に若干の膨らみを持つ。内面、外面ともにおこげ状の炭化物が付着する。胎土は雲母、砂粒を含み粗である。焼成も良くない。

167・170・171は頸部に半隆起線文による横位の条線や半円を施すものであるが、爪形文も併用される。171は外面に炭化物が付着する。

K-5類 撥糸文をまとめた。

172はc類に属し、口縁部は横位の撚糸文である。炭化物の付着が認められる。175はe類に属する口縁部である。口縁部は斜位の撚糸文である。外面にかなりのおこげ状の炭化物がこびりつく。176は細目の半隆起線文により区画される。いずれも胎土、焼成とも良くない。

173は内面におこげ状の炭化物、174は外面にスス状の炭化物がそれぞれ付着する。

L類 (図版18、41)

無文の土器をまとめた。ほとんどが粗製である。9は波形の粘土紐を貼付けた4単位の波状口縁を持つ。外面の所々に炭化物が付着する。色調は褐色を呈し、胎土は雲母、砂粒を含み極めて粗質である。焼成も悪い。口径約30cm、現器高約36cmである。

182は丁寧な作りである。色調はにぶい黄橙色を呈す。口径約10cm、現器高約11cmである。178・180は口唇部に粘土紐の貼付があり、おこげ状の炭化物が付着する。

184はミニチュア土器に分類できる。色調は褐色を呈す。胎土は砂粒が混入し粗質で、焼成も悪い。口径約8cm、現器高約7cmである。

177はどの類型にも属さない器形である。内外面とも胎土が粗質のため表面に滑らかさがない。口唇は平縁である。色調は灰白色を呈す。口径約24cm、現器高約14cmである。

M類 (図版18、19、41、42)

M-1類 口縁部形状や文様構成がつかめない胴部片および底部をまとめた。

188～190は口縁部や口辺部が外傾ないし外反する器形で、L R繩文である。半隆起線と平行沈線の中間のような施文技術である。灰黄色を呈す。189は雲母や砂粒を含み粗質である。190は胎土に砂粒が少ない。

185・186はc～e類に属する器形の胴部である。185は胴部にわずかな膨らみがある。撚糸文を施している。

187は深鉢の胴部である。撚糸文の地文へ半隆起線文を縦横に施し、区画を設けている。胴部の半隆起線文は途中で消滅すると思われる。炭化物の付着がある。

192・195・196はC類に属し、細目の竹管による施文が特徴である。192は胴部であろう。LRの繩文地であるが調整があり、磨耗が著しい。色調は褐色を呈し、胎土は雲母、砂粒を含み粗質である。焼成はやや良である。

196は密な縦位半隆起線文の集合体を幅広の半隆起線で分かれ、下位に横沈線を施し、格子目文とする。色調は褐色を呈し、胎土は粗質で、焼成も良くない。195は縦横に平行沈線を施文、B字状文の部分も若干あり、幾何学文様を作り出す。B字状文と格子目文の変形文様は、これ1点のみである。地文はLR繩文である。おこげ状の炭化物が少し付着する。色調は内面がにぶい黄橙色、外面が灰黄褐色を呈する。胎土は雲母、砂粒を含む。焼成はやや良である。

191～193はこぶりの器であるが、器形は定かでない。191は細目の縦位の平行沈線を一定間隔に施文している。胴部下位によく見る文様構成である。色調は明赤褐色を呈し、胎土は良質で、焼成も堅緻である。192・193の地文は無節の繩文である。繩文原体を多方向に転がしており、繩文が一定しない。竹管による縦位の平行沈線は胴部途中で消滅する。194は内面に炭化物が付着する。色調は内面が黒褐色、外面がにぶい黄橙色を呈す。胎土は砂粒を含み、焼成はやや良である。

206は器形は定かでない。羽状繩文が施される。細目の縦位半隆起線（深い平行沈線）により4単位の文様構成を成す。半隆起線の条数は不揃いで各々3条・4条・不明・6条である。色調は明黄褐色を呈し、胎土は良質で焼成も良好である。

M-2類 底部の出土数は小片を含めて138片であるが、実個体数はもっと少ないと想される。底部の形態を見ると深鉢器形となるものが大半を占める。台付底部が2点あるが、ともに台付浅鉢土器である。

底部径の測定可能なもののうち、底部径は最小4cmから最大は推定約24cmまでの幅があり、7cmから10cmまでの範囲のものが半分を超える。底部径が6cm以下のものは16点出土した。197・199・201～204は底部径が15cm～18cmと比較的大型である。

底部の立ち上がり0度～35度の間におさまる。しかし、全容の分かるものは少数であり、断定はできない。197・200は角度が小さく、203は20度であるが、ほぼこれらの間にに入る。

胴部下位に施文されている文様を竹管文（半隆起線文、平行沈線文）、繩文、撚糸文、無文とに分類してみると138個のうち不明とするものが41%と最も多く、竹管文が12%、繩文が21%、撚糸文が5%、無文が21%となる。繩文・無文がもっとも多いが、胴部下位まで竹管文を施さない例があるので、実態は竹管の割合がもう少し増え、繩文の割合が減るであろう。また、無文の割合も大きい。

底部圧痕文をみると、138個のうち不明なものが54個(39%)で、無文とみなされるものが54

個(39%)と半分を占め、スダレ状圧痕を持つものが29個(21%)、網代痕をつけるものが1個で、木葉痕を持つものは認められなかった。199・204はスダレ状圧痕である。

#### N類(図版10、20、36、42、43)

N-1類 浅鉢形土器は出土例が僅少である。18は大型品で復元完形となった。口径約27cm、器高約13cmで器台がつく。器台径約8.5cm、器台高約5cmである。口唇は平縁であるが、外向きである。鉢部外面は全面にわたって口唇まで撚糸文が横位ながらやや不規則に施される。また、口縁部内側に指先による締付痕も認められる。器台取付部は摩耗により撚糸文が消えているものの継位に施されている。器台底部は自重による潰れが認められるが、特徴のある底部圧痕は認められない。施文後、器台に4方向から二対のえぐり貫き加工が施される。一対は径約1cmの円形であり、一対は分銅形である。分銅形は若干整合性を欠く。色調は灰黄色を呈し、胎土は良で、焼成も良好である。207は器台付浅鉢形土器の器台部分のみである。器台はやや外開きである。LR繩文が施されている。鉢部を成形後、器台を取付けている。鉢の接合部外側を鏝で加工をし、内側は指で丹念に押し込んで接合強化を行っている。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は大粒の砂を多量に含み粗質である。焼成はやや不良である。

208は波状口縁を呈する浅鉢形土器の口縁部と想定できる。口唇は竹管による調整が施される。地文はLR繩文で、丁寧な施文である。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土はやや良質で、焼成も堅敏である。

N-2類 209は無文の有孔鈎付土器の口縁部である。口径約16cm、現器高約6cmである。孔は約3.5cm間隔である。鈎は粘土紐貼付後、調整されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は雲母を含むが良質な方で、焼成はやや良である。

N-3類 ミニチュアの小型土器をまとめた。小型土器ではあるが、ススやおこげ状の炭化物が付着し、使用痕跡がありミニチュア土器に分類しがたいものも一緒に扱った。底部の径で分類すると、4cmのものが7点、5cmのものが5点、6cmのものが4点の計16点ある。210は舟型土器に類するものと想定できる。長軸方向の口径約10cm、底径約6cm、短軸方向の口径約8.5cm、底径約5.5cmである。器高約4cmである。口唇は平口縁を呈する。内外面とも胎土に大きな砂粒が混入するためか、横方向の擦痕が無数に認められる。底部内面は滑らかな調整である。製法は手づくねである。色調はにぶい橙色を呈す。焼成は良くない。

211は胴部に少し膨らみを持ち、口縁が外反する。無文である。色調は黒褐色を呈す。胎土はやや粗であるが、焼成は良好な方である。

212は底径約5.5cmの小型深鉢形土器である。外面は、粘土中の砂粒のため外面に縦の筋が認められる。色調はにぶい褐色を呈し、胎土はやや粗質、焼成は良い。

213は胴部に膨らみを持つミニチュア土器である。手づくね製法である。胴部は内外面とも

指痕が残る。底部の張出しも指で摘んでいる。

#### 第II群土器（図版20、43）

縄文時代中期中葉に属する土器である。

214はキャリバー形深鉢の口縁部と想定できる。L R縄文地に曲直線の半隆起線を施す。口唇部に竹管による調整痕がある。色調はにぶい橙色を呈す。胎土は雲母、砂粒を含みやや粗質であるが、焼成は堅緻である。

#### 第III群土器（図版20、43）

縄文時代中期後葉に含まれる土器をまとめた。

216はL R縄文地を幅広の継位沈線により区画した。区画外は磨消している。器形は特定できない。色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土は砂質分を含みやや粗質な方で、焼成もあまり良くない。217は216と同様の文様モチーフであるが、沈線が曲線であり、曲がりくねっている。

219は平行沈線による渦巻き文様を施し、周囲に櫛搔きによる沈線を施した。口縁部で器形はキャリバー形と想定される。色調は褐色を呈し、胎土はやや良質で、焼成は堅緻である。

218は口縁部が直立するキャリバー形を呈し、半隆起線文により二種の長柄円を交互に施している。頸部に横位半隆起線を施し、胴部と分かつ。地文はL R縄文であるが、磨耗が大きい。胎土は雲母、砂粒を含み粗質で、焼成も良くない。

215は指と棒具による太い渦巻き文を横位に連続施文している。口縁部全体に指圧痕が認められる。口辺部以下は継位の沈線を施し、交互に磨耗面を作り出している。色調は明赤褐色を呈し、胎土は大きな砂粒を含みやや粗質ながら、焼成は堅緻である。

#### 第IV群土器（図版20、43）

縄文時代後期に含まれる土器をまとめた。土器片数は少なく、中期の遺物数に比して微量である。

220は直立て、口辺部に沈線による3つの横位縄文帯を作り、それぞれの文様帯に曲線の沈線を施文する。地文は細目の縄文で磨耗がかなりある。口縁部内側は箒による横調整で稜線が巡る。色調はにぶい黄褐色を呈す。胎土は良質で、焼成も良好である。器厚は薄く堅い。

221は波状口縁部である。器形は定かでない。文様のモチーフは221とほとんど同じである。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は砂質を含むが良質な方で、焼成も良好である。

222・223は同一個体であると想定される。223は底部付近である。無数の豆粒状の粘土を適当に貼付けているが、粘土粒を貼付けた後、跡先でまわりの粘土を搔いて押し付けている。色調は明褐灰色を呈し、胎土は大きな砂粒を若干含むが、良質で焼成はやや良である。

224・225は胴部片である。刺突具により規則正しく丹念に器面に施している。色調は内面が

明赤褐色で、外面が褐灰色を呈し、胎土は砂を含み粗質で、焼成はやや良い。

#### 第V群土器（図版20、43）

縄文時代晩期に含まれる土器である。1点のみ確認できた。

226は深鉢の波状口縁部である。文様は直曲線の沈線文を交叉させて施されている。磨り消しの調整が施されているが、若干縄文が認められる。色調は褐色を呈し、胎土は良質であり、焼成も堅緻である。器厚は薄手である。

#### 第VI群土器（図版20、43）

弥生時代に含まれる土器である。3点確認できた。

227は口辺部から頸部にかけての破片である。横位に波状の沈線を施す。地文は細いR L 縄文である。少し磨耗した部分もある。色調は内面が黒色、外面がにぶい橙色を呈す。胎土は雲母を多く含む砂質で粗く、焼成はやや良である。

228の口唇部は棒状の工具により刻目文が施される。頸部は壠先で連続に浅い抉りが施される。口縁部内側のへりはかなり屈曲している。色調は褐色を呈し、胎土は良質で焼成も堅緻である。

#### 土製品

##### 土偶（図版20、43）

1体のみの出土である。頭部・足部が欠損する。板状土偶で、背面が大きく窪み、腹部・胸部を前へ出し反った状態である。腹部が張り肉厚である。腰部も充実している。現高8.6cm、手を広げた長さ11.9cmで、両腕に楕円形の孔が通る。腹部の膨らみは貼付で調整痕を認める。腹部の裂け目は深さ3mmで、胸部から一直線に引いたものである。胸部の沈線は調整で磨消している。頭部・足部とも分割塊製作技法によりそれを胴部と合体させる。指・鎧による調整痕が認められる。色調は明黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含みやや粗で、焼成は良好である。

##### 耳栓（図版20、43）

1個の出土である。直径2.1cm、高さ2.4cmである。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良くない。

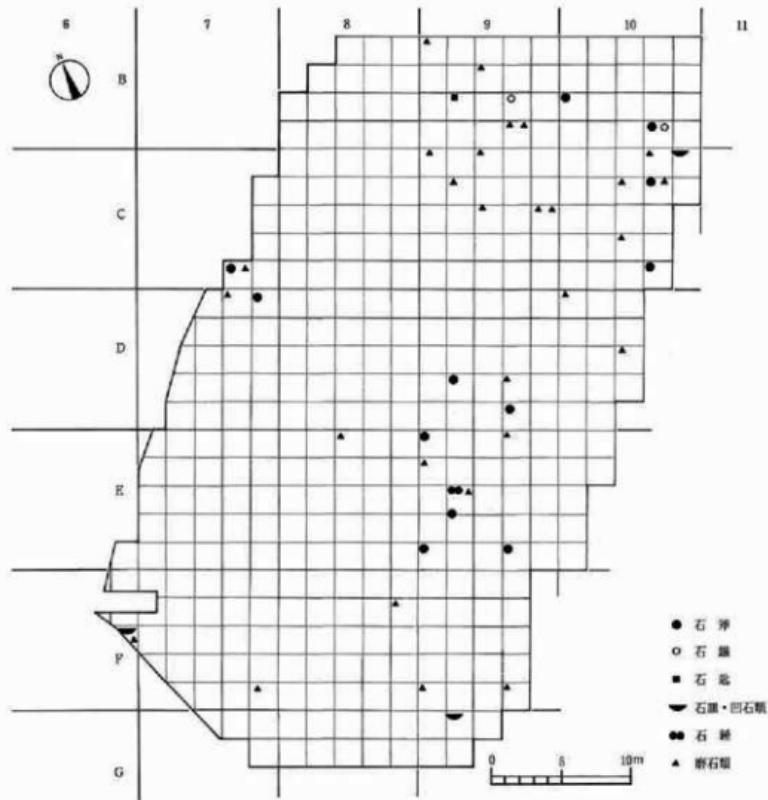
##### 不明（図版20、43）

231はラケット形土製品で用途等一切不明である。長さ4.9cm、幅3cm、厚さ0.9cm赤褐色を呈し、焼成やや良である。

## (2) 石器 (図版21~23、44~46)

萩野遺跡から出土した石器・剥片類は、総数207点である。内訳は石器器種39点（石鎌2点・石匙2点・打製石斧1点・磨製石斧15点・石錐2点・磨石類13点・台石4点）、剥片64点、石核2点、石片79点、疊23点である。縄文時代の土器を見ると中期前葉に属するものが大部分であり、石器の出土地点と土器の出土集中範囲が重なることから、石器も縄文時代中期前葉に属するものと解する。出土状況を見るとほとんど包含層からの出土で遺構に伴うものはない。

## 1) 石鎌 (図版21、44)



第6図 萩野遺跡石器出土状況 (A地区)

石鏃は2点出土している。2は凹基無茎鏃〔鈴木1989〕で抉り部分の深さは5mmである。長さ2.8cm、幅1.6cmで長さは幅の1.75倍ある。石材は玉髓である。この形態は縄文時代中期に属するものが多い。1は凸基有茎鏃である。長さは3.5cm、幅1.6cmで幅に比して長さは長い。石材は頁岩である。この形態は、縄文時代後期以降に繁出するものである〔鈴木前掲〕。本遺跡からは以上2点の出土のみで、細かな所属時期の確定はできない。

## 2) 石匙 (図版21、44)

「つまみ状の突起を一端につけ、鋭い歯を持った打製石器」〔坪井1959〕を石匙とした。2点出土している。3は剥片の両側縁に二次加工を施し浅い抉りを作り、そこをつまみ部とする。刃部には細かな剥離が見られるが、意識的な二次加工ではない。石材は頁岩である。4はつまみ部の小さい横型石匙である。二次加工は主につまみ部に集中し、刃部の裏面の一部に二次加工が見られる他は未加工である。石材は玉髓である。

## 3) 打製石斧 (図版21、44)

1点のみの出土である。撥形で石材は頁岩である。素材は横長剥片と推定され、片面は鱗表皮である。二次加工は周縁のみで刃部は欠損している。石材は結晶片岩である。

## 4) 磨製石斧 (図版21、44)

15点出土しているが、完形品(6)は1点のみで、他は全部折損している。基部のみ残存するもの(8~15)8点、刃部のみ残存するもの(16~18)3点、体部のみ残存するもの3点である。13・14は擦切手法の痕跡が片側面に明瞭に残っている。9は敲打法により成形し素材を研磨したものである。17も敲打法の可能性が高い。研磨調整の方向の判るものには、図中に矢印で方向を示した。石材は6・7・10~15・18が蛇紋岩、8が砂岩、9が安山岩、16・17がハンレイ岩である。

## 5) 石鍤 (図版22、45)

出土は2点で、ともに鱗石鍤である。素材は楕円ないしはやや角のある楕円形の扁平盤である。纏かけ部の作出方法は、2点とも大まかな剥離によっている。纏かけ部はともに長軸の端部にあるが、19は短軸の端部にも剥離が施されている。石材は流紋岩である。

## 6) 磨石類 (図版22、23、45、46)

ここで取り扱うものは従来、磨石・敲石・凹石・圓石とそれぞれ呼称されてきた石器である。これらのものの中には同一個体に複合した機能を合わせ持つ場合多いため、磨石類として一括取り扱う。13点出土している。

### A群(磨石)

正裏面あるいは側面・横線上に磨面を持つ石器である。3点出土している。石材は28が花崗閃緑岩、29が石英安山岩である。素材形状は28が棒状楕円形で、29が楕円形である。断面は28がほぼ円形であり、29は楕円形である。29は正裏面とも広い磨痕があるが、使用頻度は少ない。

28は正面のみに磨痕がある。29よりは使用頻度が高い。

#### B群（敲石）

側面あるいは稜線の上下端に敲打痕を持つ石器である。このうち、A群（磨石）、C群（凹石）と複合するものを除いた。7点出土している。石材は21・22が安山岩、23がチャート（頁岩）、24が流紋岩、25が石英安山岩、26が安山岩、27が花崗閃綠岩である。素材の形状は細長い棒状のものが4点ある。断面は楕円形である。27は形状・断面とも楕円形であり、25・26は折損品であるが、形状は棒状であろう。21～24・27は片側面にのみ、敲打痕がある。21の敲打面は磨面とまちがうほどざらつきが少ない。22はかなり硬いものを敲打したらしくアバタ状の敲打面を持つが、使用頻度は少ないようである。23は両側面と頂部の3か所に敲打面があるが、いずれも敲打面でのこぼこが大きい。

#### C群（凹石）

正裏面（主に正面）に敲打によるアバタ状のツブレ、もしくは摺鉢状の窪みを有するものである。2点出土している。33は敲打面も持つがここで扱う。石材は32が流紋岩、33が角砂礫凝灰岩である。32の素材形状は楕円形で、断面は扁平である。33はほぼ円形で断面が楕円形である。32は1個の摺鉢状の窪みとアバタ状が複合している。33は1個の摺鉢状の窪みがあるだけであるが、両側面に磨面より少しざらつきの強い敲打面を持つ。

#### D群（A・B群複合）

磨痕と敲打痕が同一個体に認められる石器である。2点出土している。磨痕と敲打痕が別々の面に認められる。石材は30が石英安山岩、31が閃綠岩である。形状は楕円形、断面も楕円形である。31は最も使用痕が多く、正裏面に磨痕が、両側面と頂部に敲打痕を有する。右側面の敲打面はアバタ状になっていない。頂部の敲打面は範囲は狭いが、凹凸の大きなアバタ状である。28は右側稜線の4分の3は磨痕、4分の1は敲打痕を持っている。両者の境目が判然としないが、敲打の後に磨痕が入ったものと推定する。

#### 7) 台石（図版23、46）

石皿と台石は機能的には区別が難しい。石皿は作業面が皿形に延んでおり、周囲の縁面との境に明瞭な稜を有し、掃出口があるということが一般的である。本遺跡では4点出土している。いずれも石皿とするには作業面の条件が不十分であり、台石として扱う。

34は正裏面に磨面を持つ。裏面では薄い側面に向かって幅10cmほどの磨り込んだ痕跡を有している。スリ作業の台石としたものであろう。側面にも磨痕がある。頂部には凹凸の大きい敲打痕がある。35は片面のみに磨痕があり、使用頻度が低いためか縦表皮の部分が点在する。石材は花崗岩である。

第2表 荻野遺跡石器観察表〔単位はcm・g ( )内は現存値を示す〕

## 石器

No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
1	C10-4	2.8	1.6	0.5	1.0	玉	無基盤
2	B9-19	3.5	1.6	0.9	2.8	玉	有基盤

## 石器

No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
3	B9-17	5.2	4.8	1.1	20.0	玉	無
4	B18-10	5.9	3.8	1.1	19.0	玉	無

## 打制石斧

No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
5	B10-16	12.3	6.1	1.2	172.0	結晶片岩	完形

## 磨製石斧

No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	基部幅	石材	備考
6	D7-5	6.1	2.7	1.3	37.0	1.5	蛇紋岩	完形
7	B10-24	(6.5)	(4.0)	1.9	(78.0)	2.2	蛇紋岩	刃部折損
8	B12-23	(10.6)	(4.5)	2.2	(184.0)	1.9	砂岩	刃部折損
9	E8-24	(6.6)	(4.5)	2.8	(120.0)	2.6	安山岩	刃部折損
10	E9-12	(6.4)	(5.5)	2.9	(114.0)	3.3	蛇紋岩	刃部折損
11	D4-24	(5.0)	(5.0)	2.6	(74.0)	2.6	蛇紋岩	刃部折損
12	C7-24	(7.0)	(3.4)	3.3	(172.0)	2.8	蛇紋岩	刃部折損
13	C10-9	(6.3)	(4.3)	2.7	(134.0)	2.8	蛇紋岩	刃部折損
14	E9-21	(6.3)	(5.0)	2.4	(78.0)	2.8	蛇紋岩	刃部折損
15	E9-24	(5.0)	(4.0)	1.7	(72.0)	2.8	蛇紋岩	刃部折損
16	D9-19	(6.0)	(5.4)	3.2	(155.0)	蛇紋岩	基部折損	
17	C10-24	(8.8)	(8.2)	2.4	(218.0)	ハニレイ岩	基部折損	
18	E9-1	(7.6)	(5.0)	2.2	(142.0)	蛇紋岩	基部折損	

## 石器

No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
19	C14-15	10.3	9.0	2.1	272.5	流紋岩	
20	E9-13	10.9	9.2	2.2	312.0	流紋岩	

## 磨石類

No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
21	D19-13	16.0	6.4	3.7	590	安山岩	
22	不明	14.8	5.5	3.5	421	安山岩	
23	B10-24	(11.0)	6.5	5.8	(470)	チャート	
24	E8-8	22.0	7.4	5.2	1180	流紋岩	縫合
25	B9-24	11.3	6.5	3.9	434	石英安山岩	
26	C9-13	(10.2)	6.0	5.0	(495)	安山岩	
27	B9-24	16.8	6.1	6.0	1060	花崗閃綠岩	
28	C19-4	18.5	6.9	3.7	750	花崗岩	
29	D9-14	12.5	8.4	5.1	845	石英安山岩	
30	D7-4	(9.2)	7.2	5.1	(511)	石英安山岩	
31	C19-18	11.5	8.7	4.4	720	花崗岩	圓石
32	C18-5	12.3	7.0	3.3	303	流紋岩	圓石
33	F8-10	10.3	8.6	5.1	565	角礫凝灰岩	

## 石皿類

No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
34	E11-13	33.0	18.0	6.0	6.5	花崗岩	
35	G12-10	34.5	21.0	5.0	10.0	花崗岩	

## 第V章 官林遺跡

### 1. 調査の経過

第IV章萩野遺跡「1 調査の経過」の項で両遺跡をまとめて記載したことで官林遺跡の調査経過にかかる。

### 2. グリッド設定と基本層序

#### (1) グリッド設定

日本道路公団が設置した高速道路法線の中心杭である STA No732+00を基点として、100m離れた STA No733+00を結ぶ線を東西方向の基線とした。これに直交する南北ラインを設定し、10m×10mを1区画として大グリッドを設定した。そしてその北西隅を起点に南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表わし、両者の組合せで A1・A2…とすることにした。各大グリッドは2m×2m単位で25の小グリッドに細分し、北西隅を1として、東へ2、3…と続けて、南東隅を25とした。そして、各小グリッドはA5-8、C10-21区などと表記した。

#### (2) 基本層序

本遺跡の現況は畑地・牧草地で、耕前まで松の多い林だった所を戦後開墾して今日に至っている。本遺跡は戦後の開墾事業により地山面まで削平されており、消滅状態である。

遺跡は五頭丘陵の南端から舌状に突き出た標高約30mの台地に位置する。遺跡の南側には旧蘿戸川の一部であった赤坂堤がある。

基本的な層序は以下のとおりである。

I層 暗褐色土 表土(耕作土)。層厚は15~20cmである。

II層 萩野遺跡におけるII層に相当する土層はない。

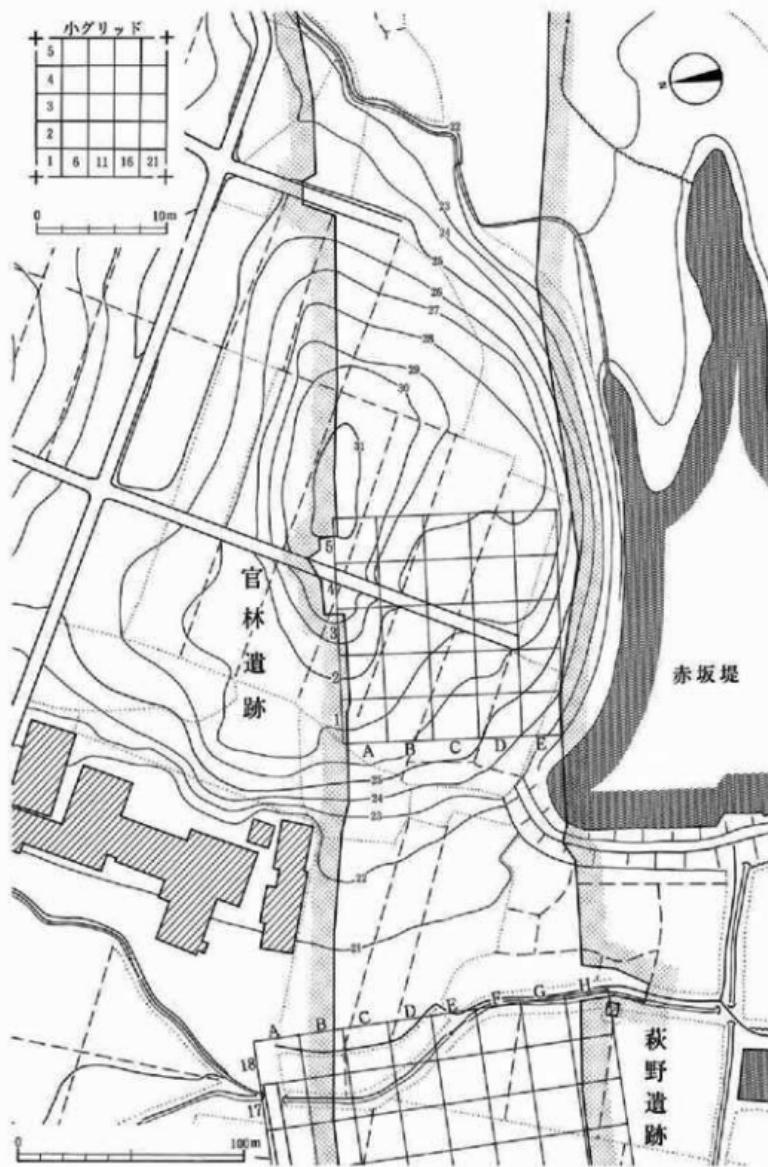
III層 萩野遺跡におけるIII層に相当する土層はない。

IV層 褐色土 減移層。層厚は10~20cmである。

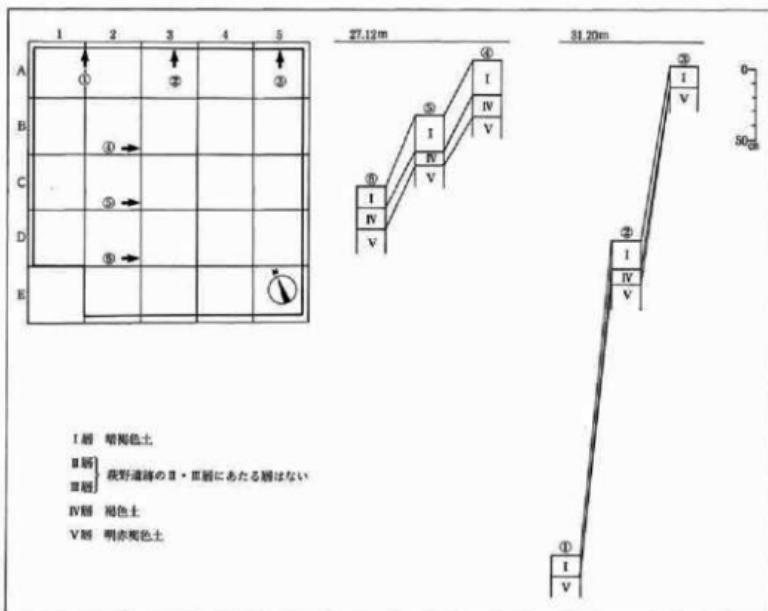
V層 明赤褐色土 地山。非常に硬い土である。

開墾による削平のため、包含層であるII・III層がまったく存在しない。調査範囲はA5区を

2. グリッド設定と基本順序



第7図 官林遺跡グリッド設定図



第8図 官林遺跡の層序

頂点として、南と西に向かって傾斜する。なお、戸野遺跡で確認されたV層以下の沼沢火山灰層は、本遺跡では存在しない。

### 3. 遺構

官林遺跡ではピット3基が検出された。遺構内からの出土遺物はなく、明確に時期を特定できない。

#### (1) ピット1(図版24、49)

A3-23区で検出された。形状は隅丸長方形で、断面は浅鉢状である。規模は長径が1m、短径が55cmである。底部長径は70cm・短径は33cmで、深さは20cmである。覆土は暗茶褐色を呈する。地山の土ほどではないが、硬いほうである。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

#### 4. 遺 物

##### (2) ピット 2 (図版24、49)

A 3-23区で検出された。形状は隅丸三角形で、断面はお盆状である。規模は径約35cm・深さ12cm・底径約27cmである。覆土は暗茶褐色を呈し、硬目である。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

##### (3) ピット 3 (図版24、49)

D 5-11~16区で検出された。形状は円形で、断面はロート状である。規模は径50cm・深さ45cm・底径12cmである。覆土は暗茶褐色を呈し、ピット1・2よりは軟らかくさらさらした感じである。木炭片が少し出土したが、時期の特定はできない。

#### 4. 遺 物

出土遺物は縄文土器片が12点、石刃1点、剥片1点である。包含層は削平され、すべて地山直面上からの出土である。時期の特定や遺跡の性格を特徴づけるようなものではない。

##### A 土 器 (図版24、49)

###### (1) 縄文土器

胴部の破片で、文様はL R縄文である。粗製土器であろう。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は砂質分を多く含む。焼成は普通である。出土地点はD 5-22区である。

##### B 石 器 (図版24、49)

###### (1) 石 刃

長さ5.5cm・幅2.4cm・厚さ0.6cmである。左側縁には連続しない小刻離がみられる。石材は頁岩である。出土地点はE 5-17区である。

###### (2) 剥 片

正面の右側上部と左側面に二次加工が施される。石材は頁岩である。出土地点はD 5-21区である。

## 第VI章 ま と め

### 1. 土器について

土器は破片総数で6,000点余り出土したが、明確に遺構に伴うと判断されるものはない。文様構成・器形等から北陸編年の新保・新崎様式の特徴と類似している。また、県内では巻町豊原遺跡(小野1988)の土器群が層位的に安定し、同町大沢遺跡(前山1990)は前者と前後関係にある。これらの縄文中期前葉の土器群を指標に萩野遺跡の土器をまとめる。

#### (1) 北陸系土器

萩野遺跡出土遺物を器形で大別すると、233点の中で口縁部の判明するうち101点が円筒形深鉢、29点がキャリバー形深鉢である。円筒形深鉢はc類が圧倒的に多く、e類やc類とe類の中間形がそれに次ぐ。以下、土器分類に従って記述する。

B類 細半隆起線文グループは新保・新崎第Ⅲ様式に併行すると考えられる。県内では豊原遺跡第V群・津南町上野遺跡(可見1962)・柏崎市剣野E遺跡(金子1987)に類例がある。

C-1類 半隆起線文を口縁突起から垂下させるシンプルなモチーフは安田町中道遺跡(川上1980)・朝日村下ゾリ遺跡(富樫1990)・豊原遺跡第VI群土器にも類似モチーフがある。

C-3類 蓮華文を波状口縁にモチーフした例は吉川町長峰遺跡(室岡1984)にあるが、本例は纏糸文であるから、同時期に比定できるか検討の余地を残す。

D-1類 新保・新崎第Ⅲ様式に併行する。石川県徳前C遺跡第VI群土器(平田1983)、中道遺跡第3類土器群、大沢遺跡Ⅲ期土器群中に類似例をもつ。また、文様構成・器形が類似している豊原遺跡第VI土器群と、集合平行沈線と半隆起線の組合せが類似している。下ゾリ遺跡(富樫1990)土器群とのつながりも指摘できる。

D-2類 軌軸文、爪形文、胴部のB字状文の組合せは、豊原遺跡第VI群土器、大沢遺跡Ⅲ期土器群に類似点がみられる。3遺跡とも口唇から垂下する逆J字状文を持ち、4単位の文様構成を有する。

E-1類 交互三角形陰刻手法は中道遺跡に類似例がある。退化蓮華文は中道遺跡、剣野E遺跡第I群、豊原遺跡第V群に類似品がある。萩野遺跡では爪形文を伴わないのが特徴である。また、玉抱き三叉文・逆J字状文・鳥口状の突起など北陸系の文様をもちながら、シンプルに爪形文をもたない3条の半隆起線で全体をまとめており東北系の影響もでている。

E-3類 波状口縁は中道遺跡で同類が見つかっている。また、文様のモチーフでは中道遺跡、下ソリ遺跡、大原遺跡第VI群土器と同一である。逆J字状文は文様単位の基準となるものが最初に施される文様であり、口唇から垂下する隆帯で、口辺部文様体の半ばか、その文様帶を縦に区画している。新保・新崎第III様式に併行する。県内では変形と考えられるものを含め比較的多くの報告がある。

主として逆J字が口唇から口縁部文様帶の途中まで施されている場合（栄町吉野屋遺跡〔中島1974〕・長峰遺跡II〔室間1980〕・上野遺跡〔江坂1962〕・大沢遺跡・柏崎市剣野B遺跡〔品田1990〕）、逆J字状文が口縁部途中から頸部まで施されている場合（加治川村貝塚遺跡〔新潟県1983〕・出雲崎町タテ遺跡〔高橋1985〕・湯沢町岩原I遺跡〔北村1990〕・長峰遺跡II）のどちらかが多い。

爪形文は半隆起線文が3条以上の場合に多く施文され、特に蓮華文との組合せが目立つ。器形では3類の円筒形深鉢に多く充填される（第3表）。

F-1類 新保・新崎第III様式に併行する。中道遺跡・豊原遺跡第VI群・大沢遺跡II期群・岩原I遺跡・タテ遺跡に類似例がある。

F-3類 下ソリ遺跡・タテ遺跡に文様の類似例がある。

中期前葉を特徴づける蓮華文（広義）は施文方法や形態から分類すると、横位無文帯ないしは横位無文帯に②三角形陰刻か鎖鎖状竹管で施文し、③花弁に沈線を入れて作り出す。時期が新しくなると①縦位沈線か縦位平行半隆起線文によって②を代行するようになるという。ただそこへ1条ほどの縦位沈線を施すこともある。②・③の作業の後、花弁の区切りのみを充填することもある。沈線を施す際にこの3段階の作業をどの施文作業を選択し、どこで止めるかで蓮華文の特徴に変化が生ずる。以下に幾通りかの分類を考えてみた。

a …②+③、b …②、c …①+②+③、d …①+②、e …①。

第3表 萩野遺跡 爪形文と他の文様の組合せ

分類	№	器形	半隆起線文の条数	爪形文の位置	併用の文様
C3	14	c類	5条	上2条	蓮華文・対状貼付腰帶・角状波状口縁
C3	19	c類	3条	中央	織紋混合文様・織紋貼付腰帶（口唇～脚部）・B字状文
C3	29	c類	4条	中2条	蓮華文・角状波状口縁
D1	36	c類	2条	下	軌道文・刺突文
D2	21	e類	3条	中央	格子文・軌道文・B字状文・縦位貼付腰帶・角状波状口縁
D3	45	a類	2条	上	圓文
D4	51	不明	3条	中央	2段区画（下段不明）・縦位貼付腰帶
E3	20	e類	3条	中央	2条半隆起線文・類似一側面貼付腰帶・L字状文・圓文地・口唇部突起
E4	68	e類	3条	中央	3段区画（上下、半隆起線文・爪形文）・繩文
G1	80	a類	3条	中央	蓮華文
G1	88	a類	3条	中央	蓮華文
G1	89	a類	3条以上	3条目	逆蓮華文
G1	87	不明	3条	中央	蓮華文・縦位半隆起線文
G1	96	不明	3条	中央	蓮華文
G3	99	c類	3条	中央	上段区画（横抜織文帶）
G4	107	c類	5条	中央	半隆起線文
J	134	不明	3条	中央	Y字状貼付・側面圧痕

実際には横位の文様帯が広狭・無文縄文等で分類され、①・②も2大別され、③は斜位・縦位に分けられる。①の段階で軌軸文と併用の例もあり、蓮華文は多種類となる。萩野遺跡の場合、三角形陰刻の花弁に沈線が入るものが中心で、逆蓮華文は1点のみである。蓮華文の施文手法、正位・逆位について県内の遺跡から探ってみた(第4表)。花弁の長い蓮華文は総じて連鎖状竹管文に多い。集合沈線・平行半隆起線の退化蓮華文とするものは省略した。蓮華文は新保・新崎第IV様式で初めて登場するというが、萩野遺跡では新保・新崎第III様式に併行するキャリバー形深鉢にも用いられている。三角形陰刻の蓮華文が最初に登場し、北陸地方へ伝播して連鎖状半截竹管の蓮華文に変化し、その後上越地方から北上したものであろうか(寺崎1988)。

G-2類 軌軸文は徳前C遺跡第4群土器と併行するが、県内の遺跡からの出土が極端に少ない。軌軸文はD類に多くF類にはない。

G-3類 キャリバー形で口縁部に地文のみを持つシンプルな文様例は見当たらないが、E-3類に繋がる様式と考えられる。G-3類も同様に理解する。

G-4類 幅の異なる半截竹管による半隆起線文と爪形文は、中期中葉へ受け継がれるモチ

第4表 蓮華文の出土比較(報告書掲載分)

遺跡名	施文手法	正位	逆位	合計	遺跡名	施文手法	正位	逆位	合計
萩野遺跡 (安田町)	三角形陰刻	26	1	27	山下遺跡 (長岡市)	三角形陰刻	2		2
	連鎖状竹管					連鎖状竹管	6		6
中道遺跡 (安田町)	三角形陰刻	4	3	7	千石原遺跡 (三島町)	三角形陰刻	3	1	4
	連鎖状竹管					連鎖状竹管	7	1	8
貝塚遺跡 (加賀治川村)	三角形陰刻	4	6	10	長崎遺跡Ⅱ (吉田町)	三角形陰刻	45		45
	連鎖状竹管					連鎖状竹管	34	2	36
下ノリ遺跡 (朝日村)	三角形陰刻	3		3	岩原I遺跡 (湯沢町)	三角形陰刻	11	1	12
	連鎖状竹管	1		1		連鎖状竹管	2	1	3
古風敷遺跡 (田上町)	三角形陰刻	8	5	13	上野遺跡 (津南町)	三角形陰刻	5	4	9
	連鎖状竹管	1		1		連鎖状竹管	1		1
吉野尾遺跡 (東町)	三角形陰刻	27	8	35	大貝遺跡 (新井市)	三角形陰刻			
	連鎖状竹管	14	1	15		連鎖状竹管	4	1	5
農原遺跡 (巻町)	三角形陰刻	7	8	15	十二平遺跡 (熊生町)	三角形陰刻	4		4
	連鎖状竹管	1		1		連鎖状竹管	16		16
大沢遺跡 (魚町)	三角形陰刻	12	7	19	長者ヶ原遺跡 (魚沼川市)	三角形陰刻	2		2
	連鎖状竹管	8	2	10		連鎖状竹管	8		8
剣野B遺跡 (柏崎市)	三角形陰刻	2		2	長者ヶ平遺跡 (小本町)	三角形陰刻	13	2	15
	連鎖状竹管	6	1	7		連鎖状竹管			

## 1. 土器について

フである。豊原遺跡に出土例がある。半隆起線により直曲線、B・V字状の施文を多様に組合せて変化をもたせている。新保・新崎第Ⅲ様式に併行する代表的モチーフである。

K-1類 口唇部に刻目文をもつものには豊原遺跡第V群土器、無節縄文をもつものは剣野B遺跡・吉野屋遺跡に類似例がある。

K-3類 萩野遺跡の羽状縄文土器は豊原遺跡では第V群新段階に見える。萩野遺跡の無節縄文と類似している遺跡として、剣野B遺跡・吉野屋遺跡があげられる。

K-4類 木目状撚糸文は新保・新崎第Ⅲ様式をもって使用されなくなるといわれている。以下、豊原遺跡の分類に準じて説明する。

萩野遺跡では木目状撚糸文C種（小野1988）が何点か出土したが、数が少なく系統立てることができない。中道遺跡・タテ遺跡・吉野屋遺跡はC1種が多数を占める。豊原遺跡はB種が第V群に、C種が第VI群に多く、第VII群ではまったく出土していない。田上町古屋敷（中島1976）は2点ともB2種である。長峰遺跡（室岡前掲）は大半がC1種で、若干B1種がある。貝塚遺跡では3点ともB1種である。長者ヶ平遺跡は大半がB1種である。口縁部の施文方向が縦横に異なるモチーフは豊原遺跡第VI群が多い。

L類 無文土器は口辺部が直立する円筒形の深鉢がほとんどである。

M類 地文はほとんどがL・R縄文で撚糸文・木目状撚糸文は少なく、胴部片は組合せがよくわからないものが多い。土器の中に細目の半隆起線文を巡らすものがあるが、豊原遺跡第V群・タテ遺跡・吉野屋遺跡・古屋敷遺跡に同一文様がある。下ゾリ遺跡ではなく、中道遺跡では確認できない。土器底部では網代状圧痕は少なく簾状圧痕の底部が多い。新保・新崎式では第Ⅱ様式から簾状圧痕が出現する（加藤1988）が、萩野遺跡は土器本体の所属時期がそれより新しい。豊原遺跡では簾状圧痕が大量に出土し、上限は前期後葉新段階（十三菩提式期）から中期前葉古段階（V群土器古段階）までの間の可能性が高い（小野前掲）。また、この簾状圧痕は石川・富山・新潟の三県で濃密な分布が確認されている（渡辺1976）。吉野屋遺跡でも網代状圧痕が3点で、あとはすべて簾状圧痕である。萩野遺跡全体の傾向もこの範囲でとらえてよいだろう。

N-1類 浅鉢形土器は口縁部が「く」の字状に内屈せずシンプルな器形を呈す。器台付土器が2点出土した。

N-2類 有孔鈎付土器は、縄文時代中期に東日本の各土器様式にみられ、殊に中部地方の勝坂様式において著しい（後藤子1988）。県内では長峰遺跡・柏崎市十三仏塚遺跡（新潟県史1988）・新井市大日遺跡（新潟県史1983）・小木町長者ヶ平遺跡（青木1981）・豊原遺跡・吉野屋遺跡等で散見するのみである。吉野屋遺跡ではミニチュアのものである。北陸・新潟では出現時期は中期中葉（小野前掲）とされているが、萩野遺跡はその上限を示す。県内各地の遺跡でまとまって出土する例が少なく紹介された機会も少ない。

## (2) 東北系土器

東北系土器は出土数が少ない。中期前葉の大木式土器は大木7a式が新保・新崎第Ⅱ様式に、大木7b式が新保・新崎第Ⅲ様式に対応する。

### 大木7a式系土器

E-3類 器形は円筒形深鉢で地文と逆の縄文圧痕のある葺状隆帯が口唇から口縁部文様帶を充填するものが出土している。豊原遺跡第V群・長者ヶ平遺跡に類似文様がある。また、葺状ではないが、笛神村杉遺跡に同一器形・文様の深鉢がある。また、隆帯がないだけで同一モチーフが見えるものもあるが、大木7a式か7a式から7b式への移行期のものと考えられる。中期初頭に位置付けられる。

### 大木7b式系土器

J類 J類の中に1点だが、側面圧痕と爪形文を組合せた、Y字状貼付と突起を有する土器片がある。

K-1類 縄文の側面圧痕土器は出土数が僅少だが、大木7b式に併行すると考えられる。

K-2類 肥大口縁を持つ特殊な口縁部で7点出土しているが、一般には関東の下小野式土器に顕著（中島1974）である。本県では吉野屋遺跡（中島前掲）に類例がある。側面圧痕がそうであるように下小野式とはほぼ併行する東北大木7a式に近い要素をもつ（丹羽1988）ものと解したい。器形はc類ないし e類の円筒形深鉢に限定される。また、折り返し部分に縄文原体の押圧がなされる場合は、大木7b式に近い（中島前掲）という。ただし、本県との関係は一部を除いてはうすい。

## (3) 関東系土器

### 五領ヶ台式系土器

A類 五領ヶ台系の土器のうち、球胴形の胴部を持つ土器個体は、東関東の五領ヶ台IIb式（今村1985）あるいは中部高地でのIIc式（三上1987）に併行するものと考えられる。これによるると球胴形の土器は縄文時代前期に既に登場しているが、中期初頭の特徴の一例として、口唇部直下に短沈線を並べて縁取りすること、交互刺突文が発達しそれに沿って沈線や列点が巡ること、そして、帯状の文様で縦横を区画することがあげられる。東関東ではこの系統の土器が比較的多く存在する。22と同一文様を持つ胴部片が茨城県美浦村虚空藏貝塚（大島1978）で出土している（註1）。24と同一の文様・器形の破片が上野遺跡（江坂1962）で出土している。柄尾市柄倉遺跡（藤田1961）・岩原I遺跡にも同一モチーフがある。138と同一文様は柄倉遺跡・岩原I遺跡で出土している。

H類 口縁部破片の中に多かった段重ねの交互刺突文や、渦巻き文と沈線文が接觸する部分

の交互刺突文も、上記の時期とほぼ一致すると考えられる。

#### 阿玉台式土器

J類 口縁部把手で阿玉台式土器様式の特徴が出ている。村杉遺跡にも出土したが、下越地方では稀な例である（高橋1989）。関東系の土器は、萩野遺跡では客体の可能性が高いものが多い。

萩野遺跡出土土器の編年は、豊原遺跡の編年を基本に、新保・新崎様式に当てるができる。豊原遺跡第V群に相当し、新保・新崎第II様式に比定できる東北系の土器が何点か出土している。しかし、萩野遺跡にはこの期の北陸系の文様であるソーメン状浮線文・Y字状文・連續山形文・斜格子目文・絡状体圧痕文・横位平行線文が出土しない。三角形陰刻文・縦位集合沈線・蓮華文と爪形文の併用土器は第II期まで遡る可能性がある。

萩野遺跡を中心となる文様は、半隆起線文・蓮華文（広義のものを含む）・爪形文・B字状文・格子目文・縦位集合沈線である。ただし連續状竹管手法蓮華文はない。新保・新崎第II～IV様式にまたがるものもあるが、萩野遺跡は、新保・新崎第II様式、豊原遺跡第V群土器の後半をわずかに含みながら、大半は新保・新崎第III様式、豊原遺跡第VI群土器に併行するごく限られた時期のものと考えたい。なお、地理的には東北地方に近い遺跡であるが、東北系の影響が希薄な遺跡であるといえよう。

#### (4) 土偶

この時期の県内の土偶は板状で、上部が逆三角形または長方形をなし、下部は三角形の腰部がくびれた感じか、または、腕部が長く脚部が無いもの（Aタイプ）と、上部はAタイプと同じながら、腹部が横に張り出して裏面がややへこむ感じとなり、腕部はAタイプより短く脚部があるもの（Bタイプ）の2つに大別される（鷹形1992）。萩野遺跡の土偶はBタイプの条件を充たしている。両腕に縦方向の孔が通じている。分布傾向は信濃川中流域を境に北にA、南にBが多いという。

#### (5) その他の

縄文時代中期中葉・後葉、後期、晩期、弥生時代の土器片が若干あるが特異なものはない。214～219は縄文中期後葉と推定される。土器様式は加曾利式、大木式いずれにも解せるが、地理的に大木式土器の影響を受けているものと解した（註2）。

## 2. 石器について

萩野遺跡から出土した石器・剥片等は207点である。このうち明確に石器器種と判断された

第5表 萩野遺跡 連華文の種類と他の文様の組合せ

No.	器 形	正 邪	連華文の種類	地 文	併用の文様
33	c類	正	三角形階刻・舟沈線	不 明	下段横旋無文帯・1条半隣起線文
34	c類	正	三角形階刻・舟沈線	不 明	下段横旋無文帯・1条半隣起線文
12	c類	正	三角形階刻・舟沈線	L R 縦文	下段横旋無文帯・2条半隣起線文・U字状文
53	c類	正	三角形階刻・舟沈線	不 明	下段横旋無文帯・1条半隣起線文
79	c類	正	三角形階刻・舟斜線	L R 縦文	3条半隣起線文
80	a類	正	三角形階刻・舟沈線	不 明	3条半隣起線文・爪形文
81	不 明	正	三角形階刻・舟沈線	L R 縦文	3条半隣起線文
82	円筒形	正	三角形階刻・舟沈線	不 明	不明
83	円筒形	正	三角形階刻・舟沈線	不 明	半隣起線文（3条確認）
85	c類	正	三角形階刻・舟沈線	不 明	3条半隣起線文・同一区画内（上端季文、下軌軸文）
86	円筒形	正	長三三角形階刻・舟沈線	不 明	半隣起線文（1条確認）
88	a類	正	長三三角形階刻・舟沈線	不 明	3条半隣起線文（爪形文）
73	a類	正	細長三角形階刻・舟沈線	L R 縦文	2条半隣起線文の下段区画あり・縦位半隣起線文・降帯
74	a類	正	細長三角形階刻・舟沈線	L R 縦文	2条半隣起線文・縦位半隣起線文
75	a類	正	細長三角形階刻・舟沈線	L R 縦文	2条半隣起線文の下段区画あり・縦位半隣起線文
86	c類	正	三刀形階刻・舟子目文	不 明	文様單独の区画あり
87	不 明	正	三角形階刻・軸軸	不 明	3条半隣起線文（爪形文）・縦位半隣起線文帯
89	a類	逆	突・二辺削取・舟沈線	不 明	2条半隣起線文（細）
14	c類		三角形階刻	挑 細 文	草状跡・降帯・角状波状口縁・爪形文
29	c類		三角形階刻・大花卉	挑 細 文	4条半隣起線文（2条爪形文）・角状突起の波状口縁
30	c類		三角形階刻・帆船文	不 明	舟波状口縁・縦位文様区画重下疊
31	c類	正	三角形階刻・帆船文	L R 縦文	2段目区画無文帯・3条半隣起線文
32	ヰ リ		六角形断文・帆船文	不 明	下段横旋無文帯・1条半隣起線文
16	c類		三角形階刻	L R 縦文	下段横旋無文帯・交差三角形階刻
71	a類		三角形階刻	L R 縦文	下段横旋無文帯・2条半隣起線文
72	a類		三角形階刻	L R 縦文	下段横位半隣起線文帯・1条半隣起線文・降帯
78	a類		三刀形階刻	L R 縦文	2条半隣起線文・下段横位半隣起線文
19	c類		縦位集合比縫	L R 縦文	3条半隣起線文（爪形文）・垂下點付葉巻・B字状文
6	e類		縦位集合比縫	L R 縦文	3条半隣起線文（横役調文帯・逆J字彙帯（4単位）
90	円筒形		縦位集合比縫	不 明	半隣起線文（1条確認）
95	円筒形		縦位集合比縫	不 明	半隣起線文（2条確認）
35	e類		縦位沈線	L R 縦文	2段目区画無文帯・2条半隣起線文・文様4単位
54	c類		縦位沈線	L R 縦文	3条半隣起線文・縦位織文帯
58	c類		縦位沈線	L R 縦文	以下略文
16	a類		縦位沈線	不 明	2条半隣起線文の下段区画あり
93	円筒形		縦位沈線	L R 縦文	半隣起線文（1条確認）
94	a類		縦位比縫（間隔広）	不 明	2条半隣起線文帯
56	a類		縦位細縫半隣起線文	L R 縦文	2条縦半隣起線文・下段横文帯
37	a類		縦位細縫半隣起線文	不 明	2段目区画幅広無文帯・垂下陳量
38	c類		縦位平隣起線文	R L 縦文	2段目区画無文帯・1・3段目同一
40	c類		縦位平隣起線文	不 明	2段目区画無文帯・1・3段目同一・3段目直状接帯
41	c類		縦位平隣起線文	不 明	2段目区画無文帯・1・3段目同一・3段目直状接帯
43	a類		縦位平隣起線文	不 明	2段目区画無文帯・3条半隣起線文
55	c類		縦位平隣起線文	L R 縦文	2条応半隣起線文
91	a類		縦位平隣起線文	不 明	2条半隣起線文
87	c類		平行彎線（幅広）	L R 縦文	下段区画無文・2条半隣起線文
7	f類		縦位広半隣起線文	R L 縦文	2段目区画幅広無文帯・1・3段目同一
42	c類		縦位広半隣起線文	不 明	2段目区画無文帯

## 2. 石器について

ものは40点余で、剥片類も少数であり、調査範囲内で石器を生産した可能性は低い。

石鎌は繩文時代中期と後期に属すると考えられるものが各1点である。15点出土した磨製石斧は形状から撥形11点、短冊形1点である。撥形擦切石斧が繩文中期前葉に集中的に内陸部に分布するが、それを如実に裏付けるものである。また、磨製石斧の石材は、蛇紋岩9点と多い。糸魚川方面からの搬入品と思われる。砂岩の磨製石斧は敲打による成形後、磨き上げたものである。磨製石斧の占める割合が高いのも北日本の特徴である。

磨石は細長い棒状のものに特徴がある。いずれも素材の稜線部ないしは側面部に敲打痕がある敲石が多い。塩沢町五丁歩遺跡〔高橋1992〕・堀之内町清水上遺跡〔高橋1990〕でも同様の傾向という。また、角ばった細長い線の稜線に敲打痕がある敲石は中期以降東北地方に多いという。

萩野遺跡は石器の面では、かなり東北的色彩を持っていたようである。

以上、萩野遺跡の遺物について述べたが、宮林遺跡はほとんど壊滅状態のため省略する。

註1…加曾利貝塚博物館、佐藤順一氏の御教示と資料提供による。

註2…加曾利貝塚博物館 肯沼道文氏の御教示によると、加曾利E式土器と大木9式土器を的確に判別できる基準はなく、加曾利E式土器の編年、文化層についてはこれから解明が待たれる課題であるという。

## 要 約

## 萩野遺跡

1. 萩野遺跡は北蒲原郡安田町大字六野瀬字館野に所在する。遺跡は五頭丘陵から延びる台地の先端部と阿賀野川右岸の沖積平野の接点で、標高約22mの南・西方に3度ほど傾斜する低い台地状の平坦地に位置する。
2. 発掘調査は磐越自動車道の建設に伴い、平成2年5月8日から10月12日にかけて実施した。調査面積は低い台地状の平坦面を中心に5,800m<sup>2</sup>に及んだが、本遺跡の主体部分は調査範囲の北側の道路法線外と想定され、全容の解明には至らなかった。
3. 調査の結果、縄文時代中期前葉の土器・石器が多数出土した。しかし、明確に遺構と断定できるものは僅少であった。
4. 出土遺物は総数6,300点にのぼるが、このうち縄文時代中期前葉と考えられるものが、約5,850点である。特に新保・新崎第Ⅲ式、豊原遺跡第VI群土器という限られた時期に対比される土器が主体である。球胴形の胴部を持つ土器は五頭ヶ台Ⅱ b式土器（今村1985）に併行し、県内での出土は例がない。また、器台付き浅鉢も出土例が少ない。
5. 東北地方に近いとはいえ、文様では北陸の影響を受けた在地の土器が目立つ。
6. 石器類の出土は207点とわずかであった。しかし、磨製石斧が15点あり、大半が撥形に分類されることが特徴である。
7. 縄文中期後葉の土器は大木9式の土器様式が目立つ。
8. 1個体のみ出土した土偶は、板状土偶で特徴のあるものである。

## 官林遺跡

1. 官林遺跡は北蒲原郡安田町大字六野瀬字宮林に所在する。遺跡は萩野遺跡の約200m東に位置し、阿賀野川右岸の標高約30mの台地上の南端に立地する。
2. 発掘調査は磐越自動車道の建設に伴い、平成2年7月19日から8月3日にかけて、萩野遺跡の発掘調査と並行して実施した。調査面積は2,100m<sup>2</sup>であるが、遺跡の本体は、戦後の墾事業により壊滅していた。
3. 遺構はピットが3基検出されたが、時期を特定できない。
4. 土器は12点出土したが、文様は縄文のみのうえ、磨滅も進み、時期の特定はできない。
5. 石器は石刃1点、剥片1点である。石刃は先土器時代に属する可能性も考えられる。

## 引用・参考文献

- ア青木 豊ほか 1981～1984 「長者ヶ平」－I～IV－ 新潟県佐渡郡小木町教育委員会
- 安孫子昭二 1988 「勝坂式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』 小学館
- 甘粕 健ほか 1981 「大沢遺跡 B・B' 地区の調査概報」 新潟県巻町・潟東村教育委員会
- 甘粕 健ほか 1982 「大沢遺跡 II 第3次調査概報」 新潟大学考古学研究室
- イ石川秀雄 1971 「安田町寺社、藩堂遺跡予備調査概報」(孔版) 水原博物館
- 石川日出志 1989 「新潟県安田町・大曲遺跡弥生時代再葬墓の発掘調査」『北越考古学第2号』 北越考古学研究会
- 福葉・木村・二宮 1976 「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『新潟県立教育センター研究報告No.9』 新潟県立教育センター
- 今村啓爾 1965 「五領ケ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に－」  
『考古学研究室研究紀要 第4号』 東京大学文学部
- エ江坂輝弥ほか 1962 「新潟県中魚沼郡津南町上野遺跡発掘調査報告」 新潟県津南町教育委員会
- 海老沢稔 1982 「茨城県内における縄文中期前半の土器様相(1)」『婆良岐考古第4号』 婆良岐考古同人会
- オ小野 昭ほか 1988 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究IV』 巷町
- カ可見弘明ほか 1962 「津南町文化財調査報告4 上野遺跡」 新潟県津南町教育委員会
- 加藤三千雄 1988 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』 小学館
- 川上貞雄 1980 「上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告IV(概報) 中道遺跡」 新潟県安田町教育委員会
- キ北村 亮 1990 「関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原I遺跡・上林原遺跡」 新潟県教育委員会
- コ胸形敏朗 1982 「新潟県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集 土偶とその情報』 国立歴史民俗博物館
- サ坂井陽一 1981 「新潟砂丘における腐食層と砂丘列の鉱物組成」『新潟県立教育センター研究報告No.14』 新潟県立教育センター
- シ品田高志 1980 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書第12 刃野山縄文遺跡群一刃野B遺跡確認調査報告」 新潟県柏崎市教育委員会
- ス杉原在介 1970 「新潟県六野湖遺跡の調査」『考古学集刊第4卷第1号』
- 鉢木道之助 1983 「石器II」『縄文文化の研究7 加藤晋平他編集 雄山閣
- セ岡 雅之ほか 1972 「安田町文化財調査報告2 ツベタ遺跡発掘調査報告」 新潟県安田町教育委員会
- タ高橋 保 1985 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第39集 国道116号埋蔵文化財発掘調査報告 タテ遺跡」 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報第4号』 新潟考古学談話会

- 高橋 保・高橋保雄 1992 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩道跡・十二木遺跡」 新潟県教育委員会
- 高橋保雄ほか 1990 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡」 新潟県教育委員会
- 只見川第四紀研究グループ 1966 「只見川・阿賀野川流域の第四系の編年～とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について」『第四紀総合研究進路 誌 №8』
- 浮石質火山灰疊堆植物中の天然木炭片の資料  
"C年代 4870±110年 B.P. (学習院大学木越研究所にて測定)
- 地学団体研究グループ 1966 「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の"C年代-日本の第四紀層の"C年代XXVI』
- 浮石質砂層の最下部で黒色の泥土に半ばうまたものが採取された資料  
"C年代 4950±130年 B.P. (学習院大学木越研究所)
- ツ坪井清足ほか 1959 「『圖解考古学事典』 東京創元社
- テ寺崎裕助 1968 「新潟県長者ヶ原遺跡出土の鐵文土器」『新潟考古学談話会報第2号』 新潟考古学談話会
- ナ中川成夫 1966 「安田町文化財調査報告1 ツベク遺跡」 新潟県安田町教育委員会
- 中川成夫ほか 1970 「水原郷の遺跡・遺物」『新潟県文化財年報第10 水原郷』 新潟県教育委員会
- 中島栄一ほか 1976 「田上町文化財調査報告書第2輯 古稲敷遺跡」 新潟県田上町教育委員会
- 中島栄一ほか 1974 「古野屋遺跡」 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班
- 南部郡教育委員会連絡協議会 1975 「水原郷遺跡日録」
- ニ新潟県 1983 「新潟県史資料編1」
- 丹羽 茂 1988 「大木式土器」「闕文化の研究4」 加藤晋平他編集 雄山閣
- ヒ平田天秋ほか 1983 「鹿島町徳前C遺跡調査報告(IV)」 石川県立埋蔵文化財センター
- フ藤田亮策ほか 1961 「棚倉」 新潟県柏尾市教育委員会編 吉川弘文館
- 藤田亮策ほか 1964 「長者ヶ原」 新潟県糸魚川市教育委員会
- 藤巻正信ほか 1991 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 関越自動車道関係調査報告書城之腰遺跡」 新潟県教育委員会
- ヰ本間信昭ほか 1974 「安田町文化財調査報告3 藤堂遺跡発掘調査概報」 新潟県安田町教育委員会
- 本間嘉晴ほか 1977 「堂の貝塚 新潟県佐渡郡金井町堂の貝塚発掘調査報告書」 新潟県金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会
- マ前山精明 1987 「巻町伏部採集の擦切石斧-製作地をめぐって-」「まきの木 第37号」 新潟県巻町郷土資料館友の会
- 前山精明 1990 「大沢遺跡」 新潟県巻町教育委員会
- 前山精明 1991 「巻町豊原遺跡VI群3類土器考」『新潟考古第2号』 新潟県考古学会

- ミ三上徹也ほか 1986 「梨久保遺跡」 梨久保遺跡調査団編 長野県岡谷市教育委員会発行
- ム室岡 博ほか 1984 『長峰遺跡Ⅱ 新潟県中頸城郡吉川町長峰遺跡第3次発掘調査報告』 新潟県吉川町教育委員会
- ヤ山本典幸 1991 「五領ヶ台式土器様式」『圓文土器大綱3 中期Ⅱ』 小学館
- ヨ吉田東吾 1889 「越後国北蒲原郡安田町ツベタ調古代土器」『人類学雑誌第4卷第41号』 東京人類学会
- ワ和田寿久ほか 1990 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 下ソリ遺跡』 新潟県朝日村教育委員会
- 渡辺 誠 1976 「スダレ状压痕の研究」『物質文化』第26号 物質文化研究所

# 図版

## 凡例

### 地図

位置と周辺の遺跡分布

国土地理院発行（平成2年） 2万5千分の1地形図「新津」「村松」「出湯」「馬下」による。

荻野・宮林遺跡のグリッド設定図

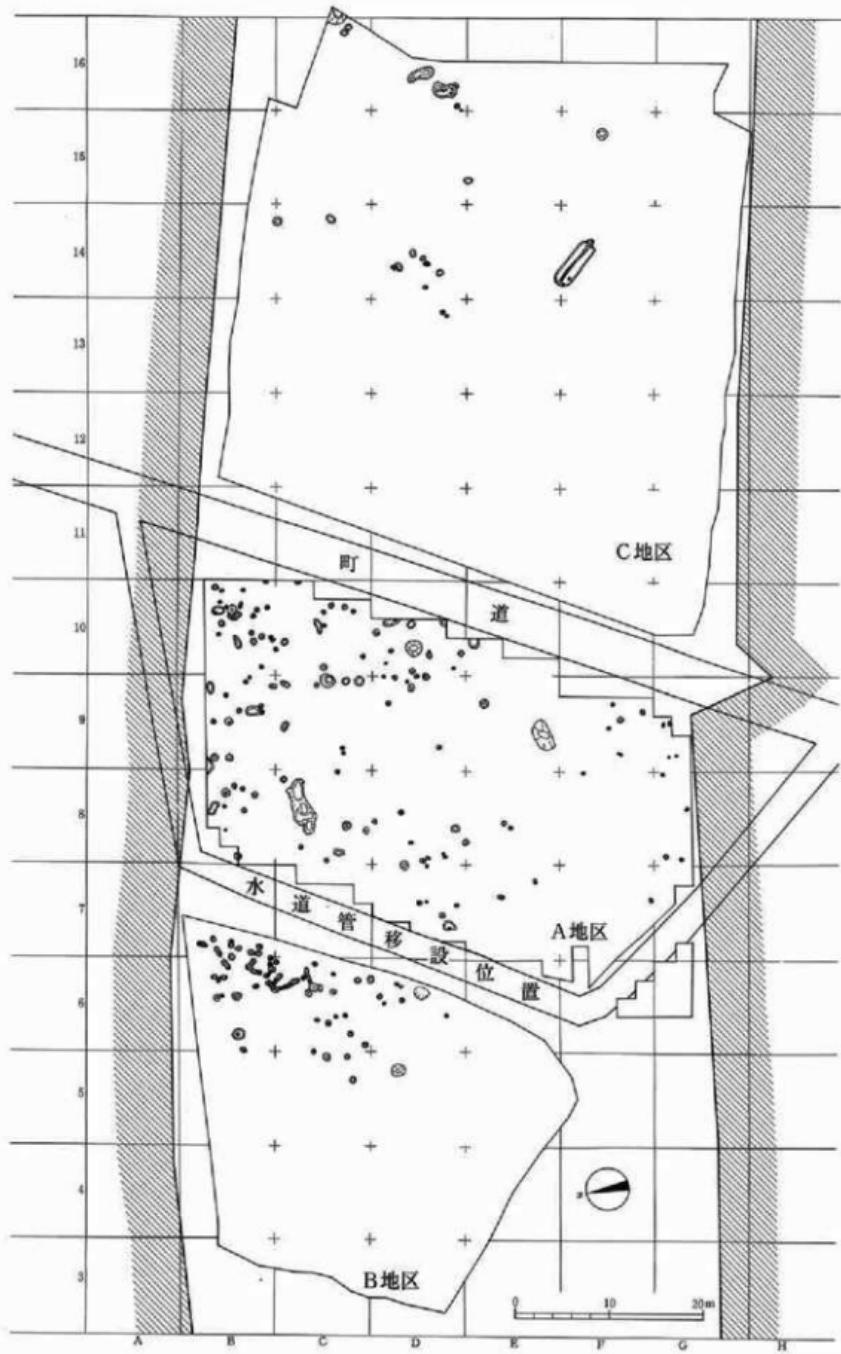
日本道路公团新潟建設局新潟工事事務所作成 「東北横断自動車道 安田西工事区 平面図1,000分の1」による。

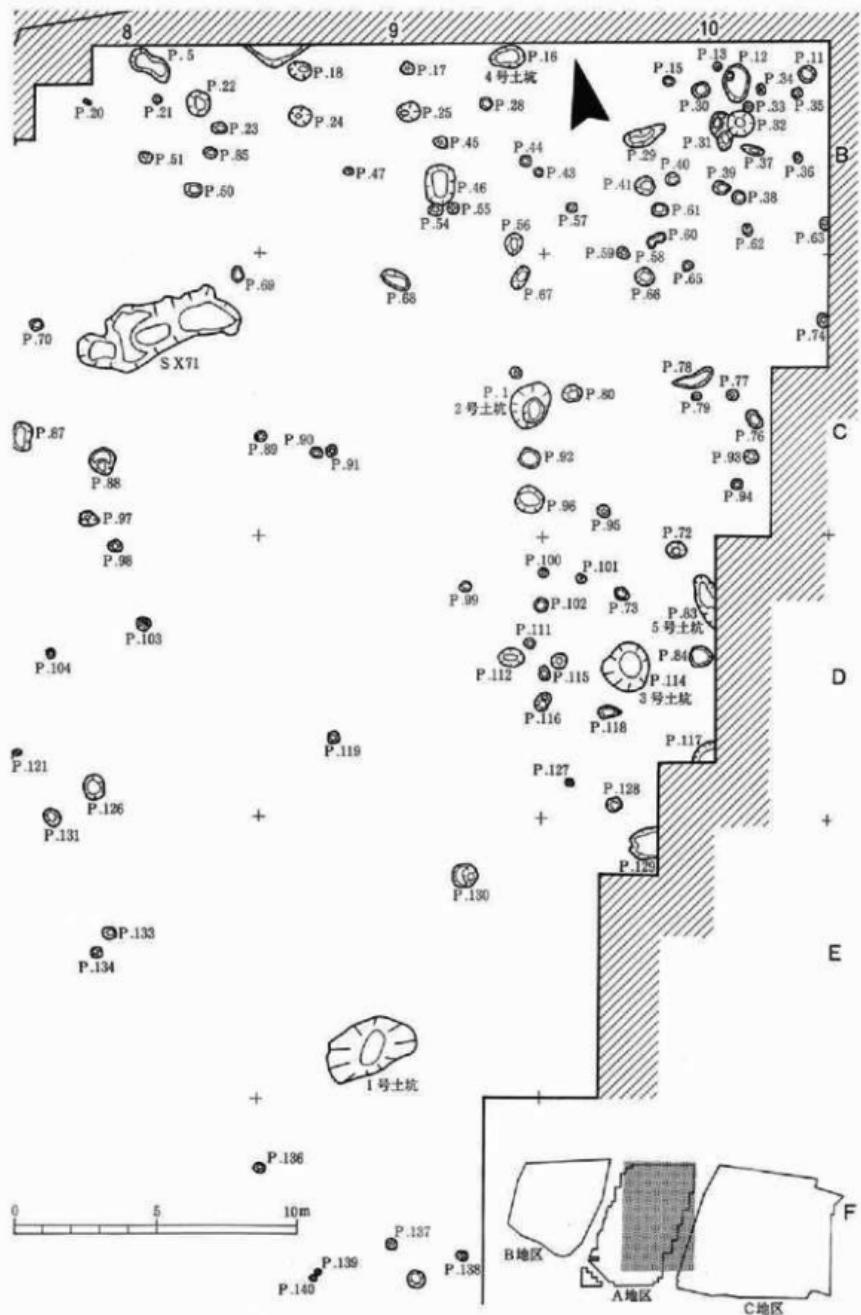
### 遺構

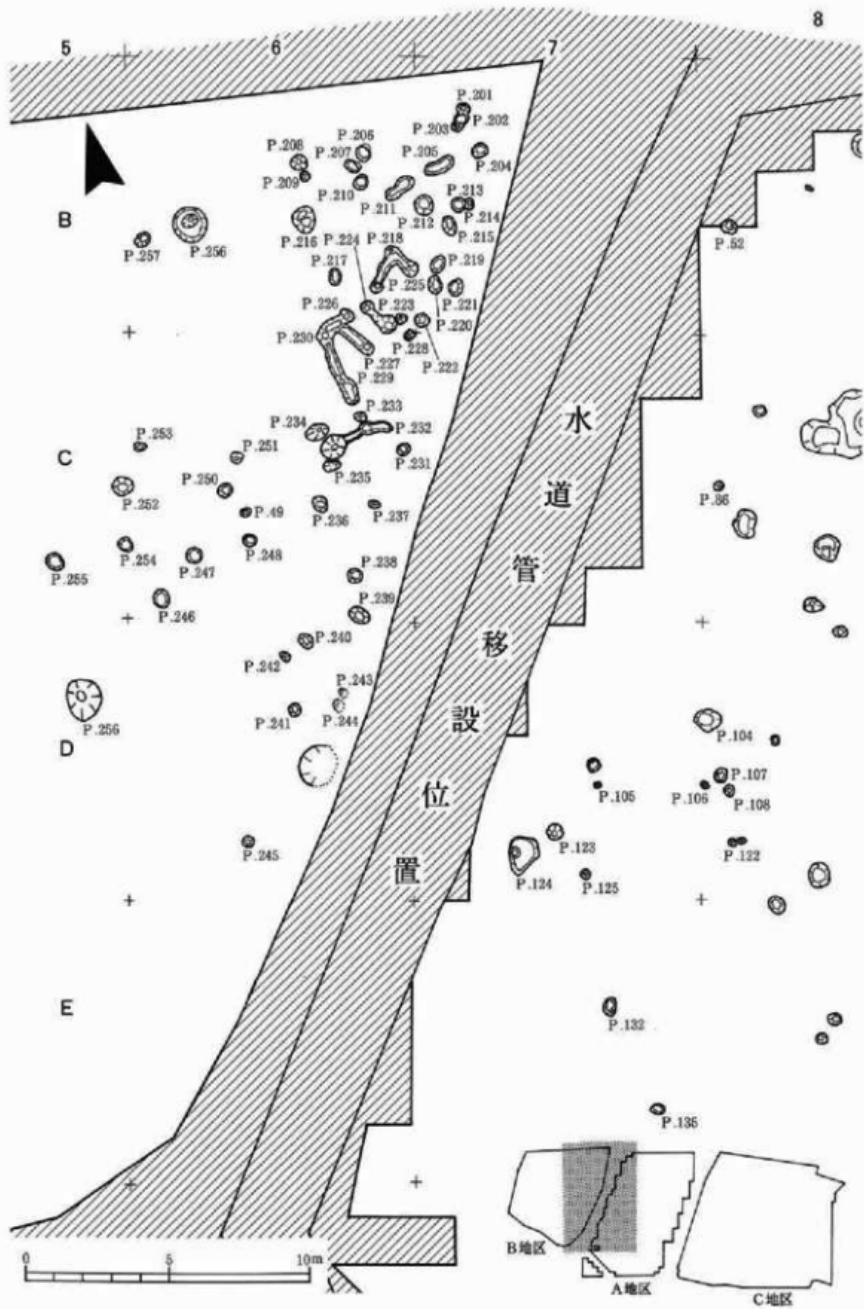
- 1 遺構は種別ごとに一連番号をつけた。
- 2 遺構の寸法単位はメートルである。

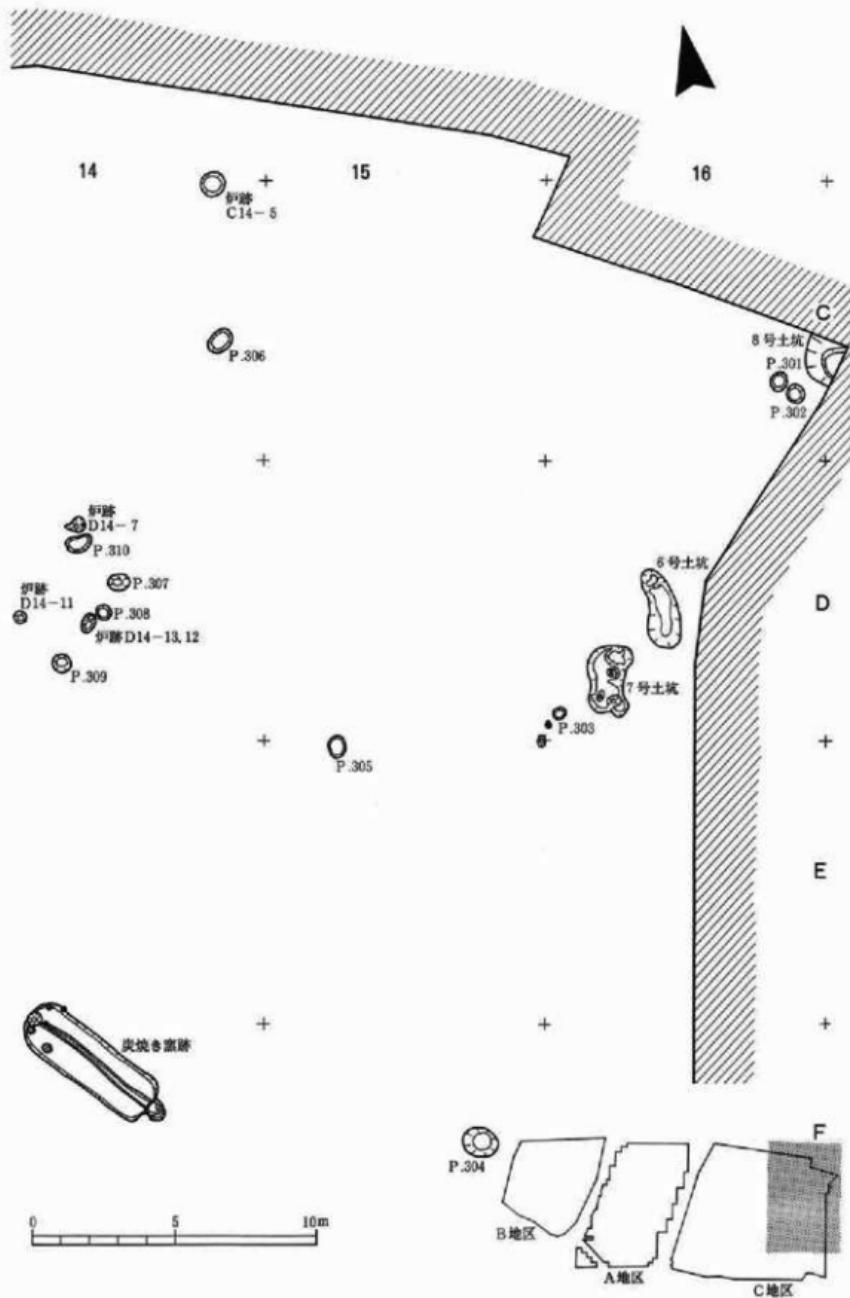
### 遺物

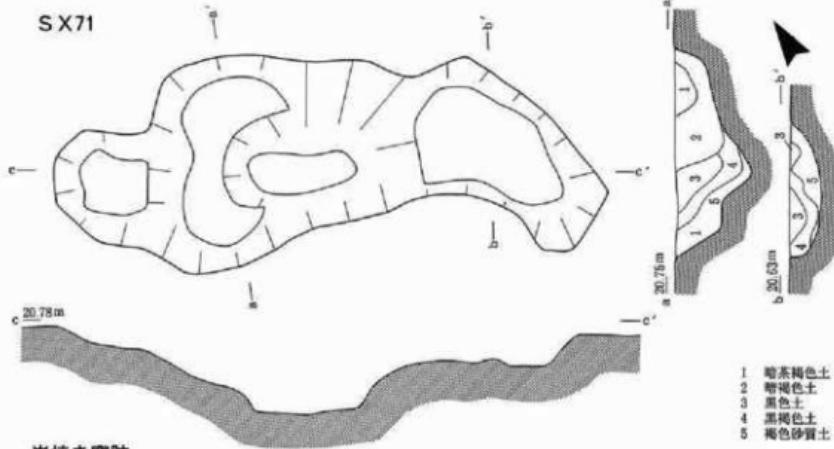
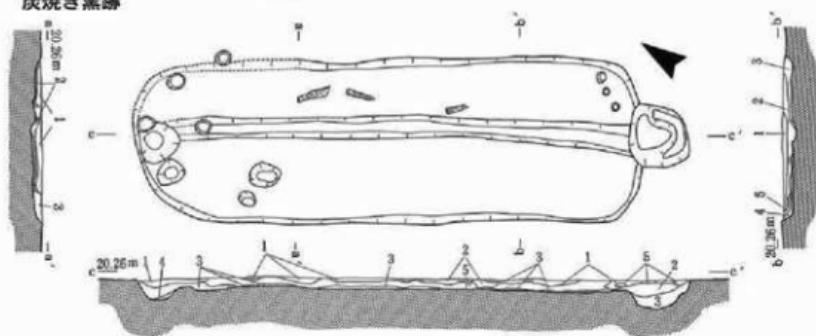
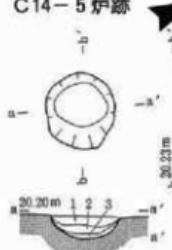
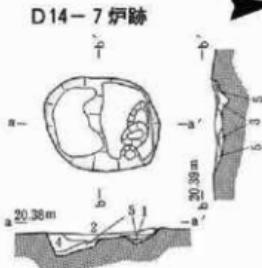
- 1 遺物は土器・石器ごとに一連番号を付してある。なお、報告書に掲載した遺物については青書きで掲載番号を書き入れた。
- 2 土器の実測図は縮尺3分の1を基本とする。ただし、特に大きい遺物は5分の1、小さい遺物は2分の1とした。石器も3分の1を基本とし、大きいものは5分の1、小さいものは3分の2とした。









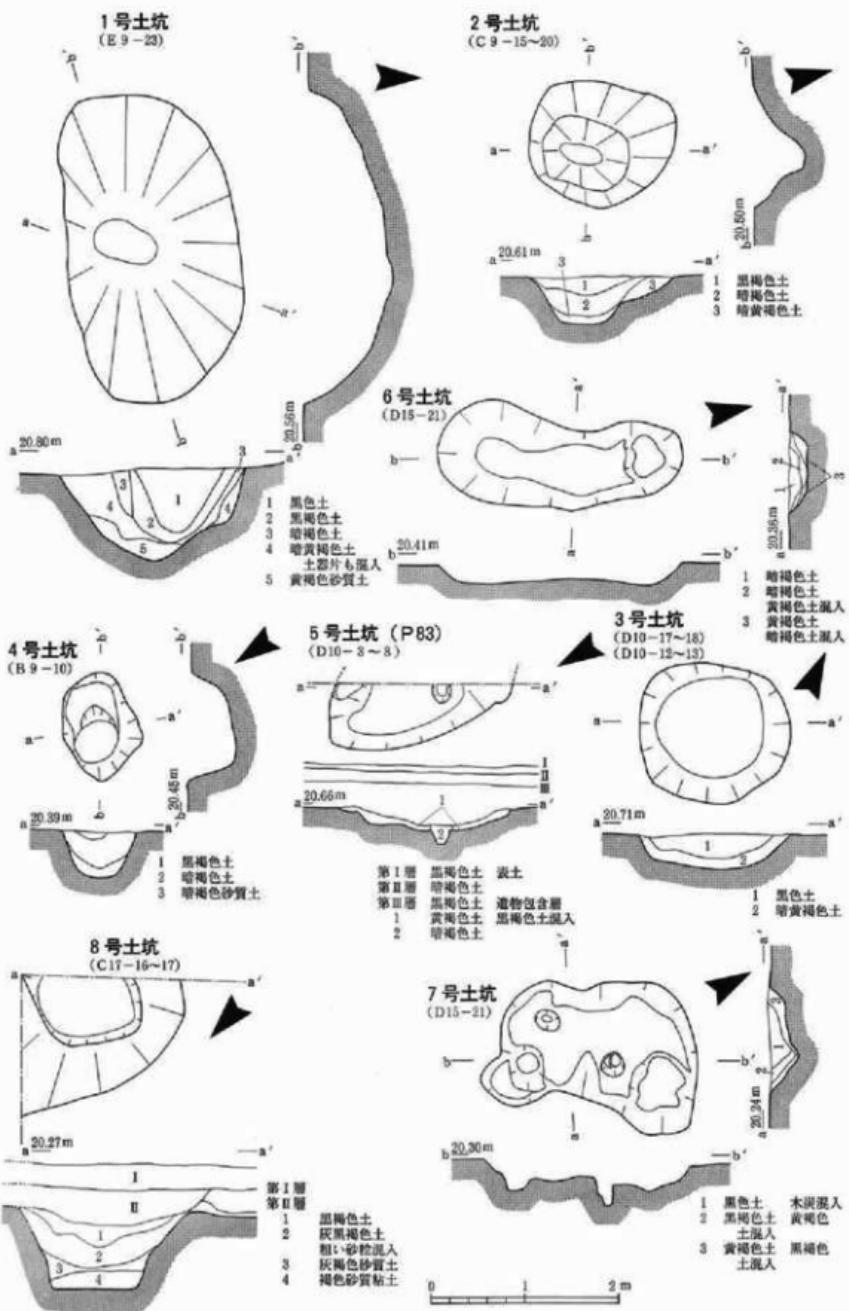
**炭焼き窯跡****C 14-5 炉跡****D 14-11 炉跡****D 14-7 炉跡**

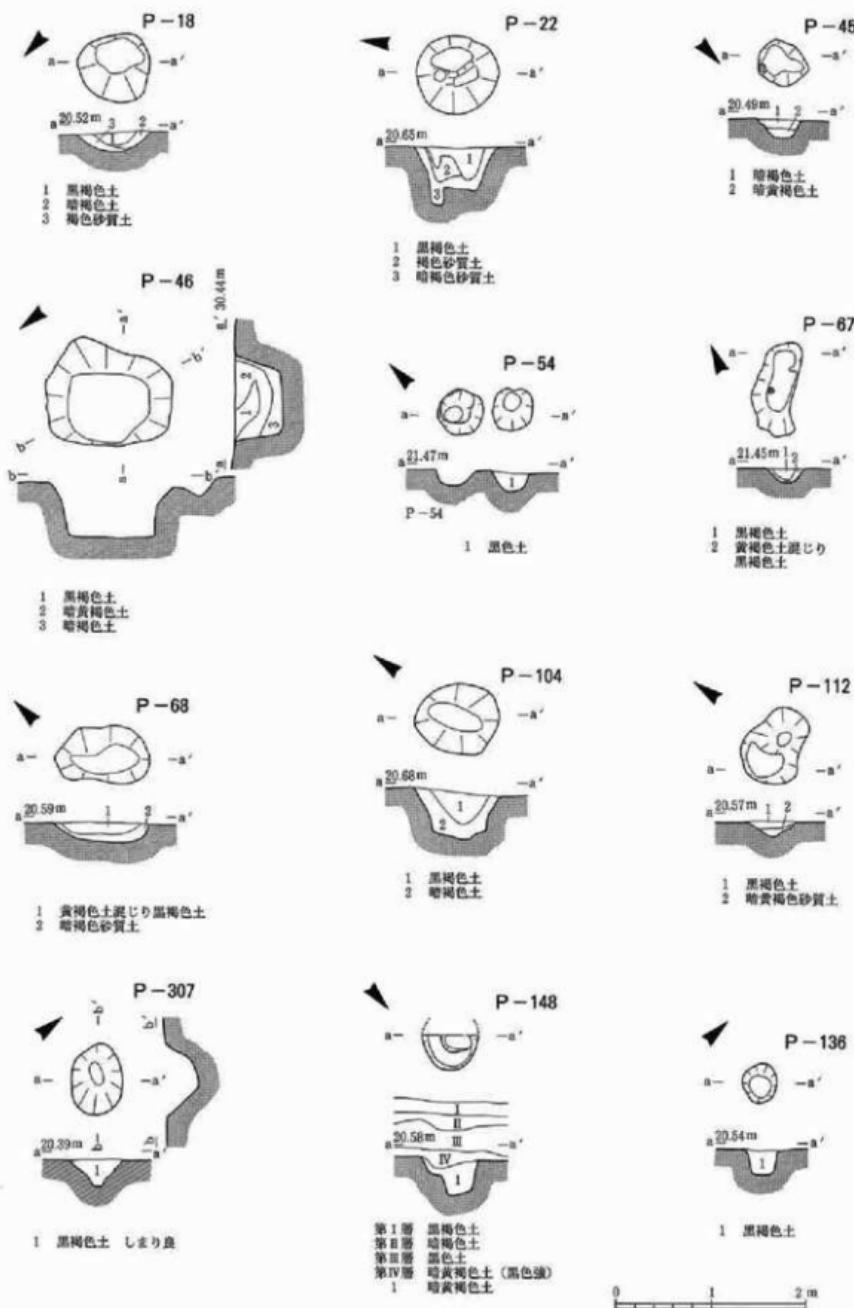
1 黑褐色土 炭化物混入  
2 黑色土 炭化物混入  
3 黄褐色土 黄褐色土混入

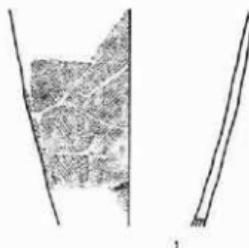
1 黑褐色土 炭混入  
2 黑色土 炭混入  
3 黄褐色土 黄褐色土混入  
4 黄褐色土 黄褐色土混入

1 烧土  
2 黑褐色土 木炭混入  
3 黑褐色土 木炭混入  
4 黑褐色土 黄褐色土混入  
5 黑褐色土 黄褐色土混入  
6 黄褐色土 黄褐色土混入

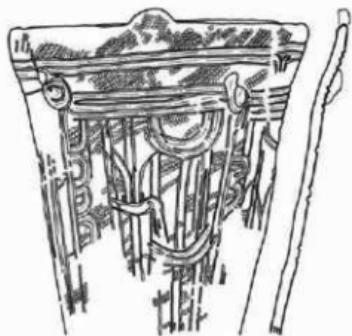
0 1 m 2 m



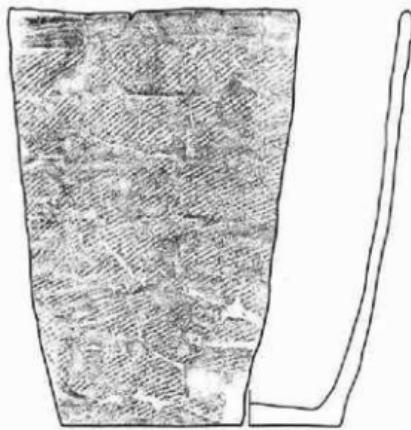




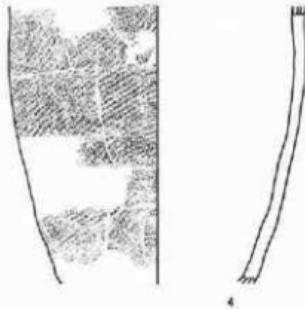
1



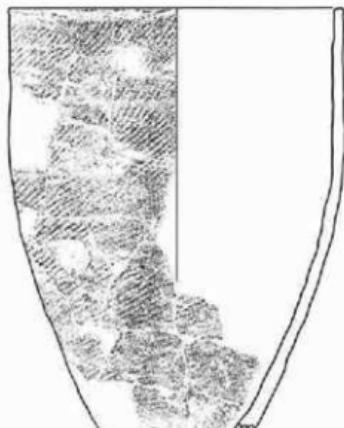
2



3

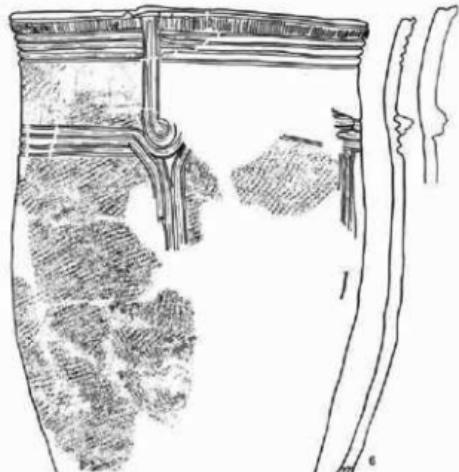


4



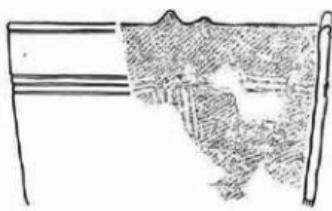
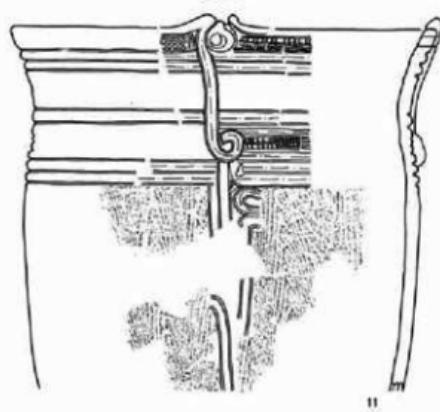
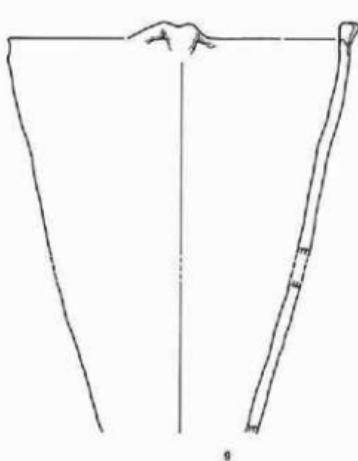
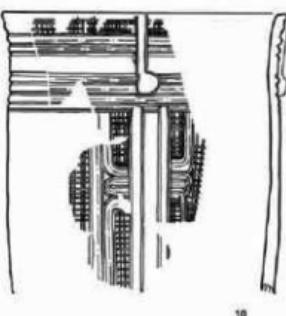
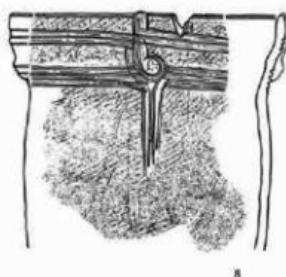
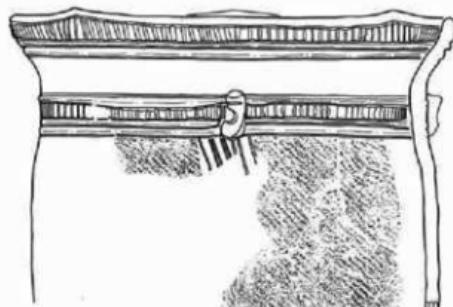
(1 : 5)

5

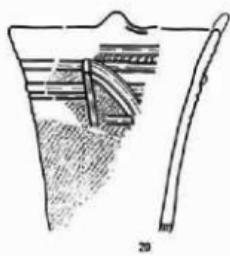
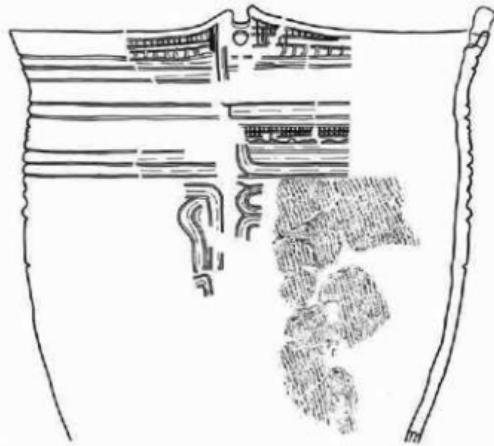
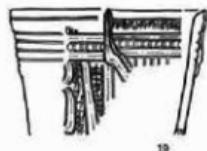
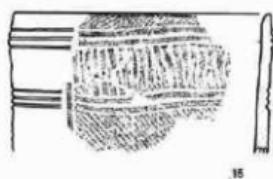


6

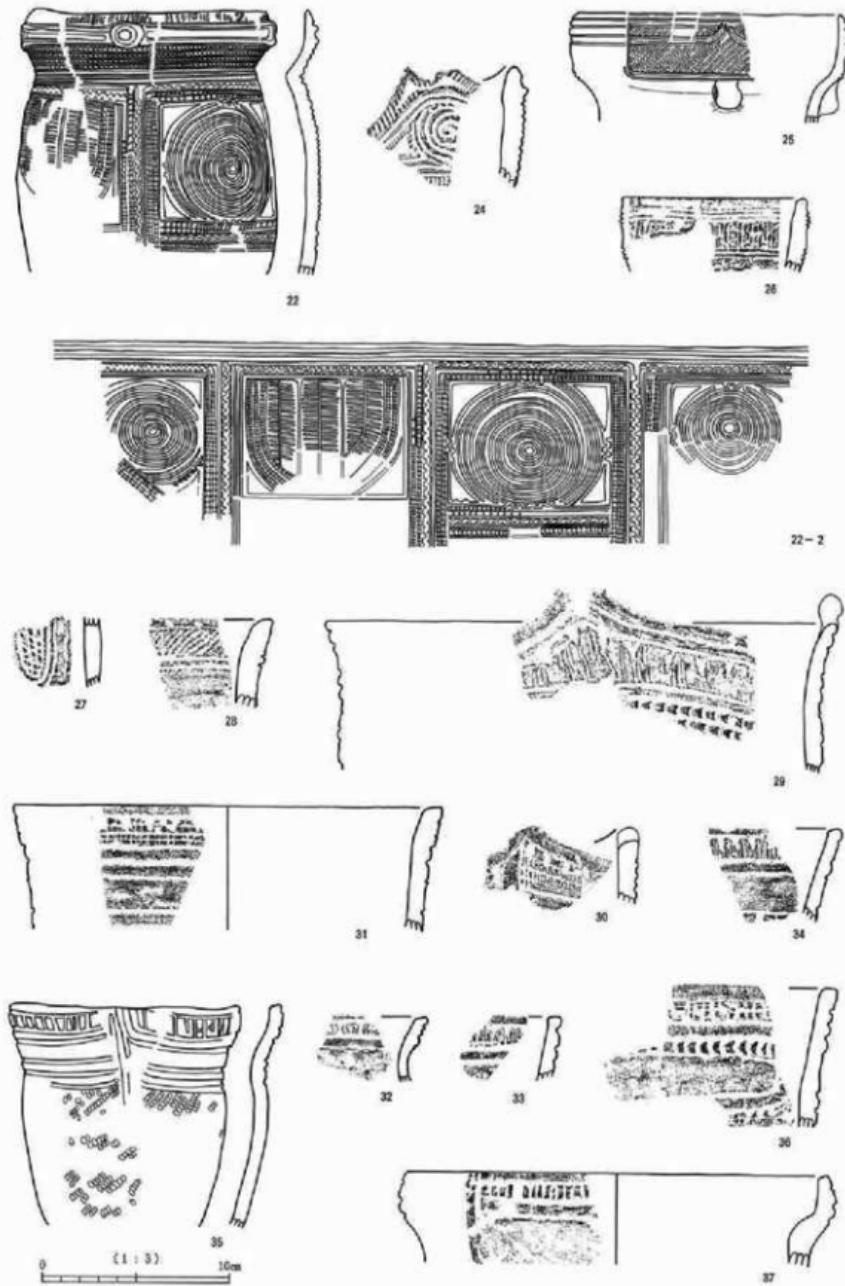
0 20cm

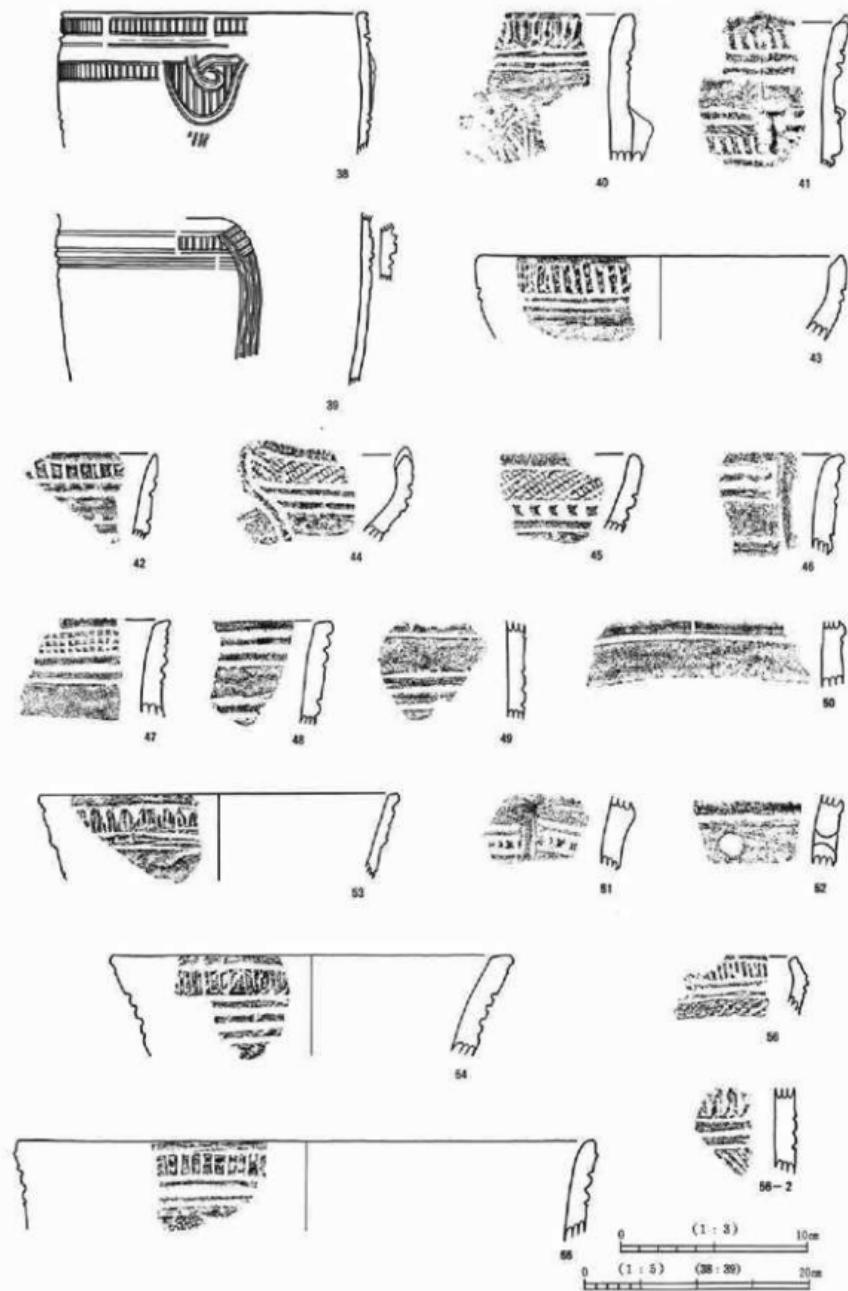


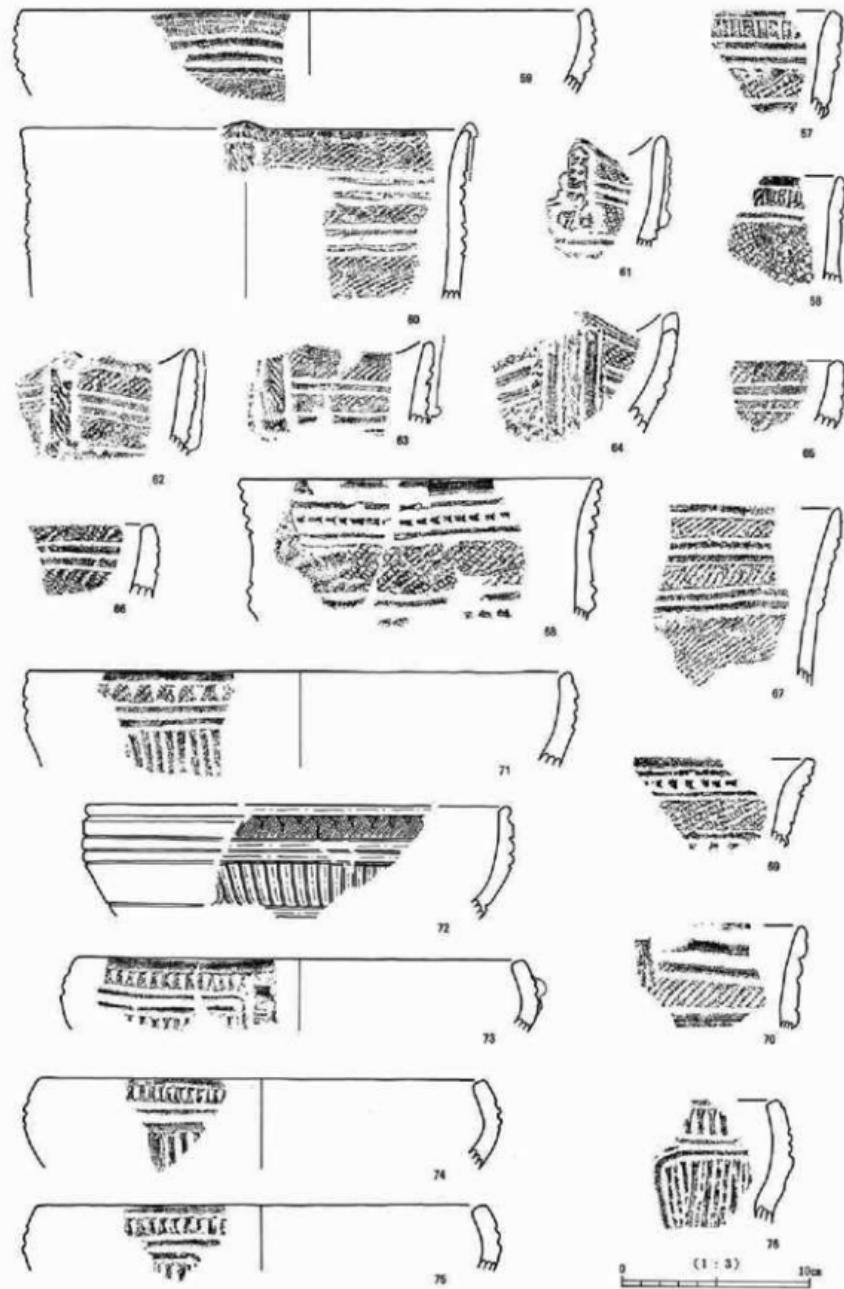
0 (1 : 5) 20cm



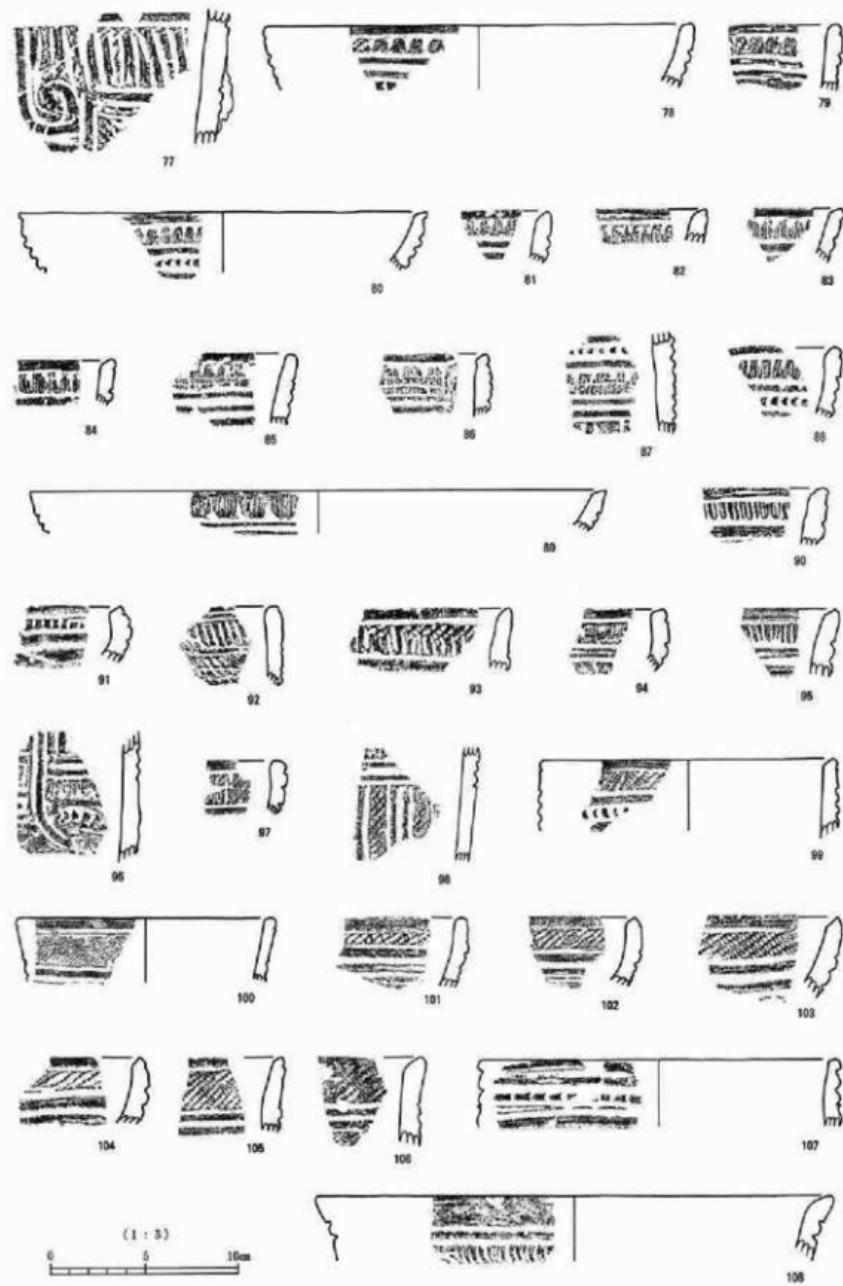
0 (1 : 5) 20cm

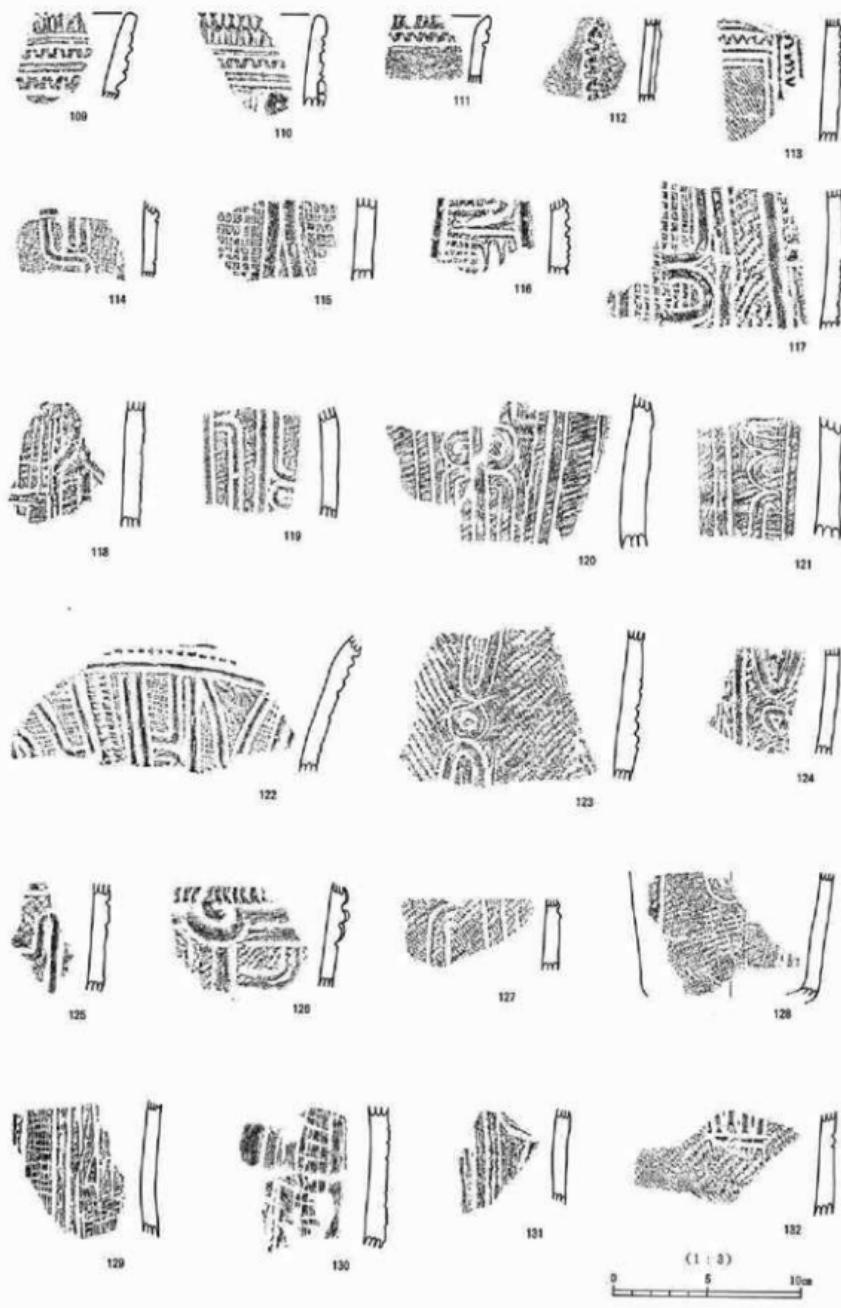




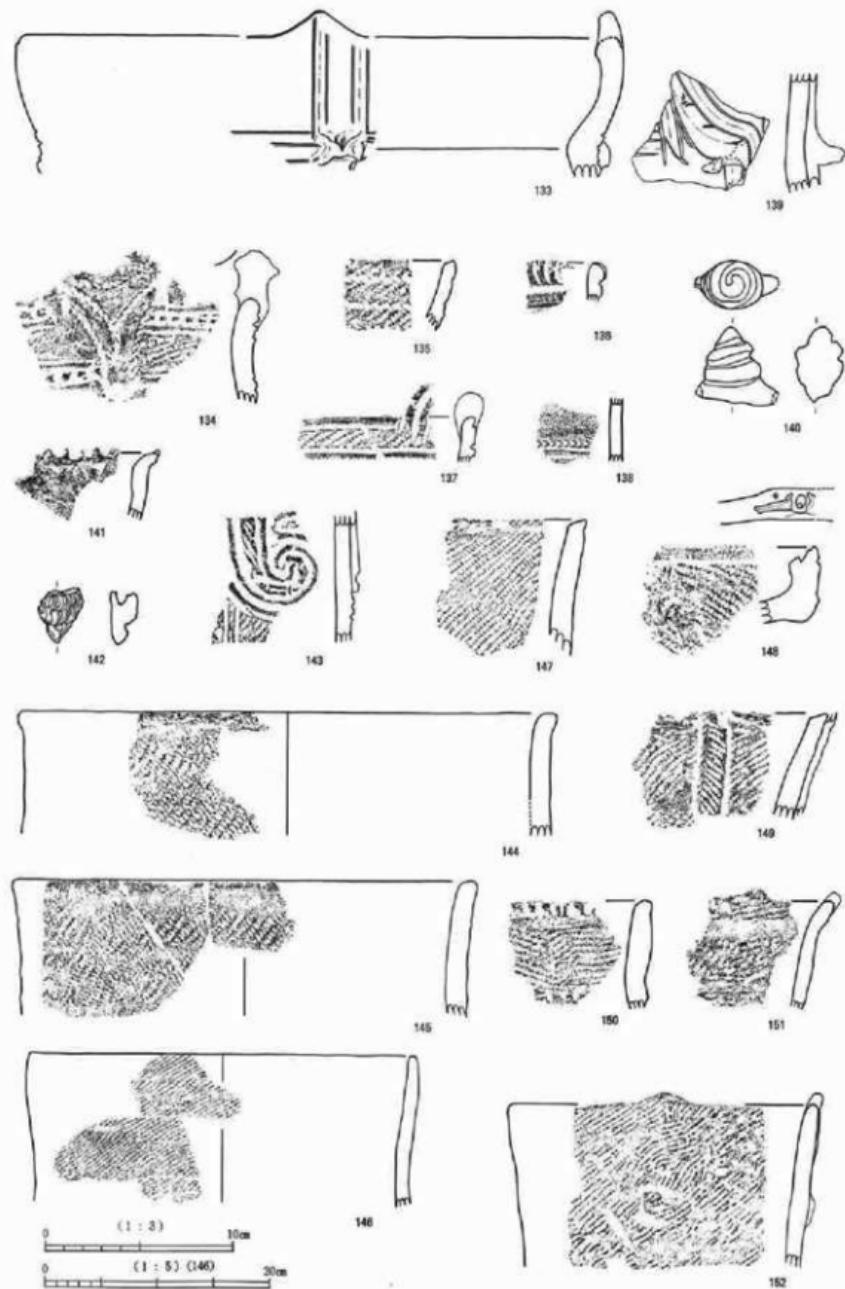


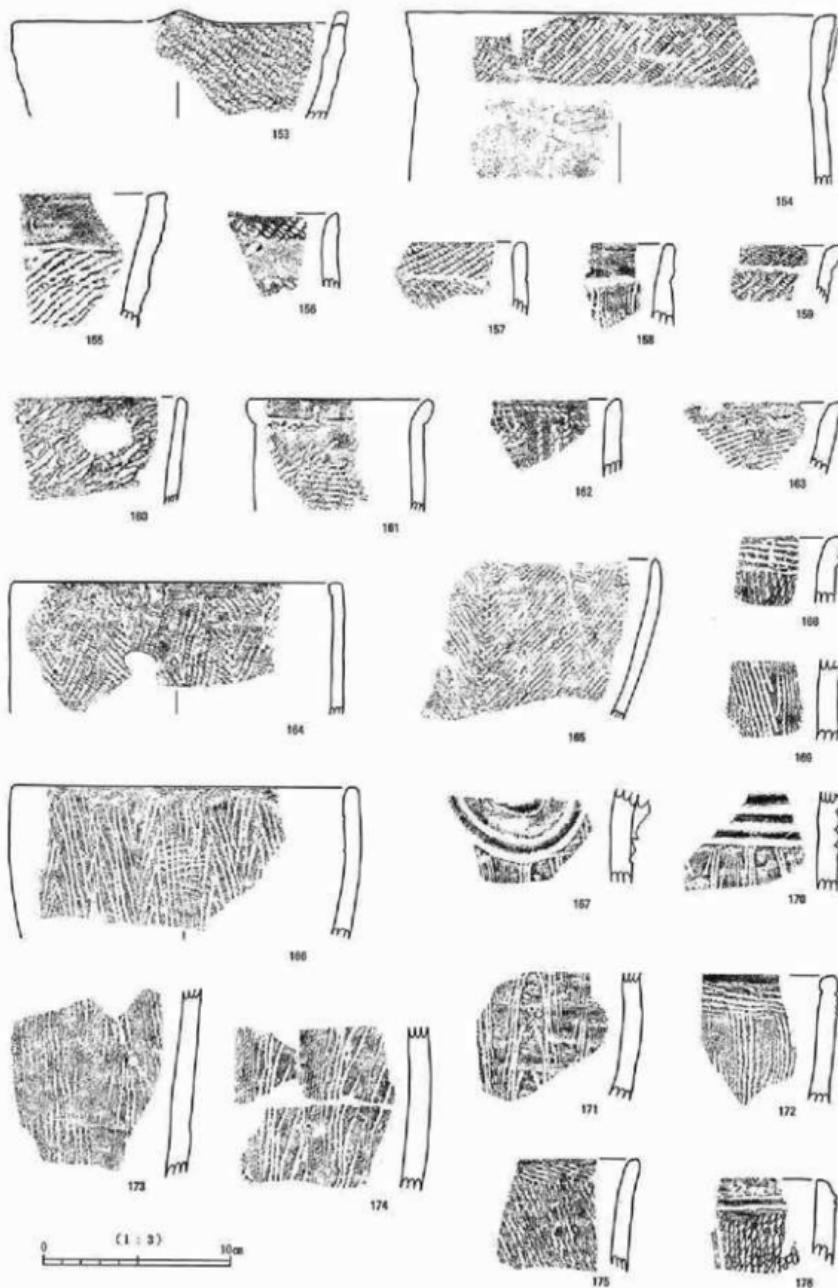
0 (1 : 3) 10cm

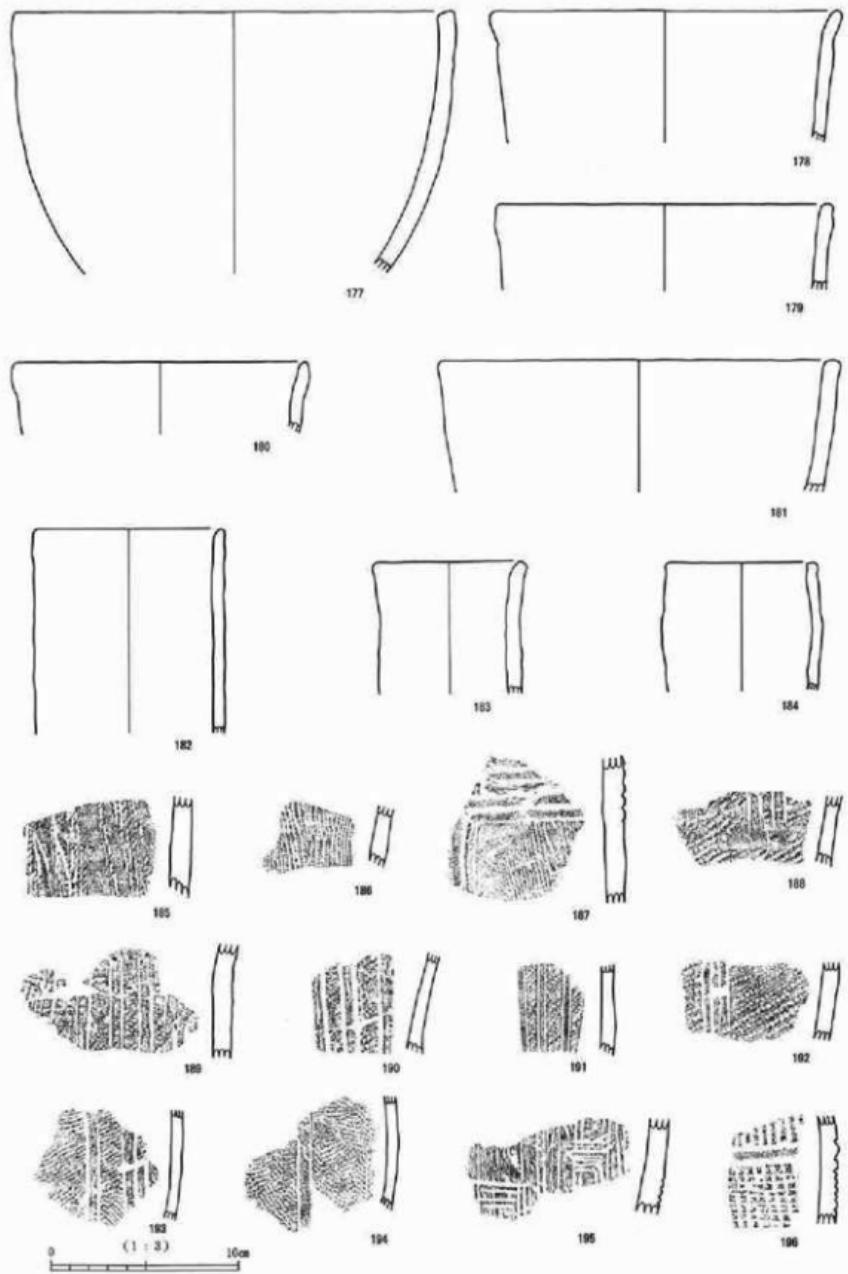


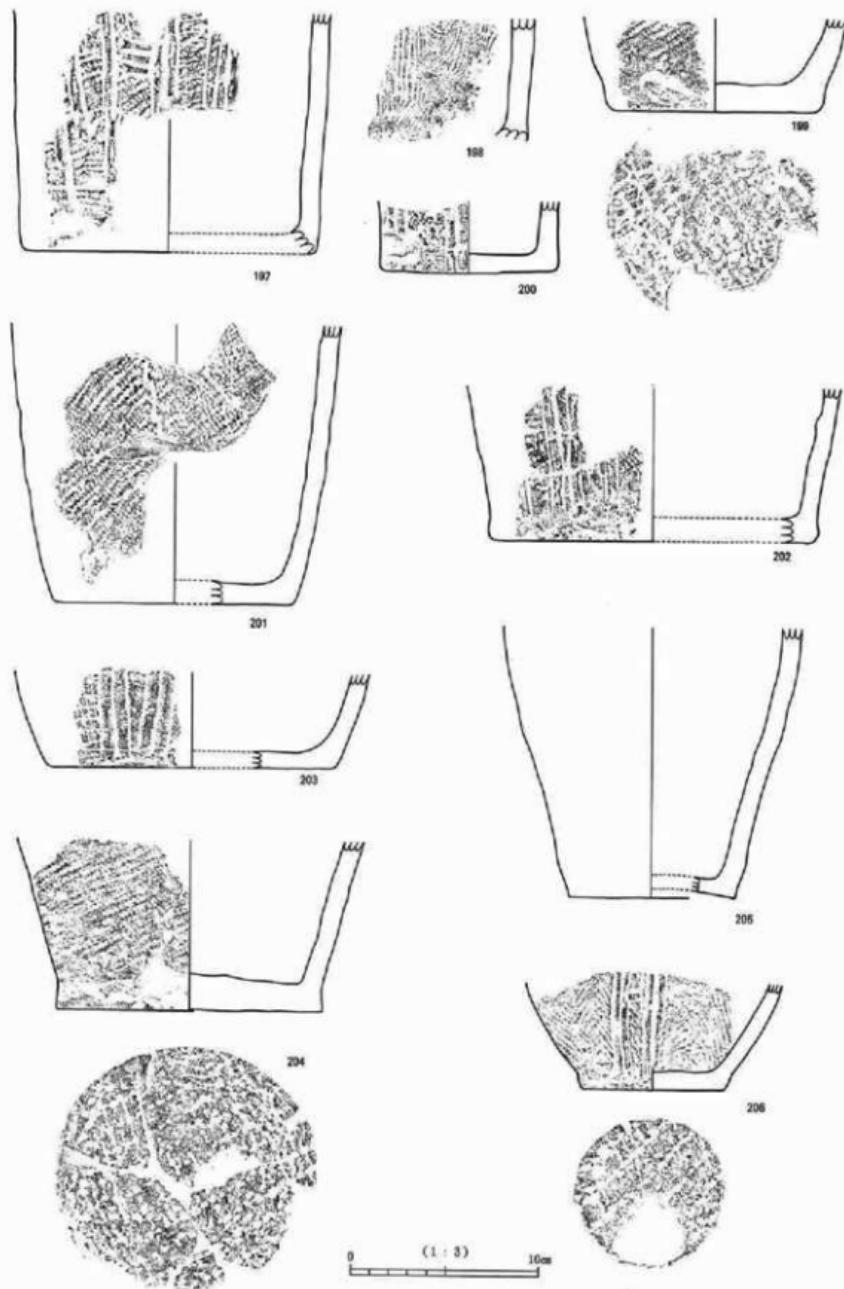


(1 : 2)  
0 5 10cm

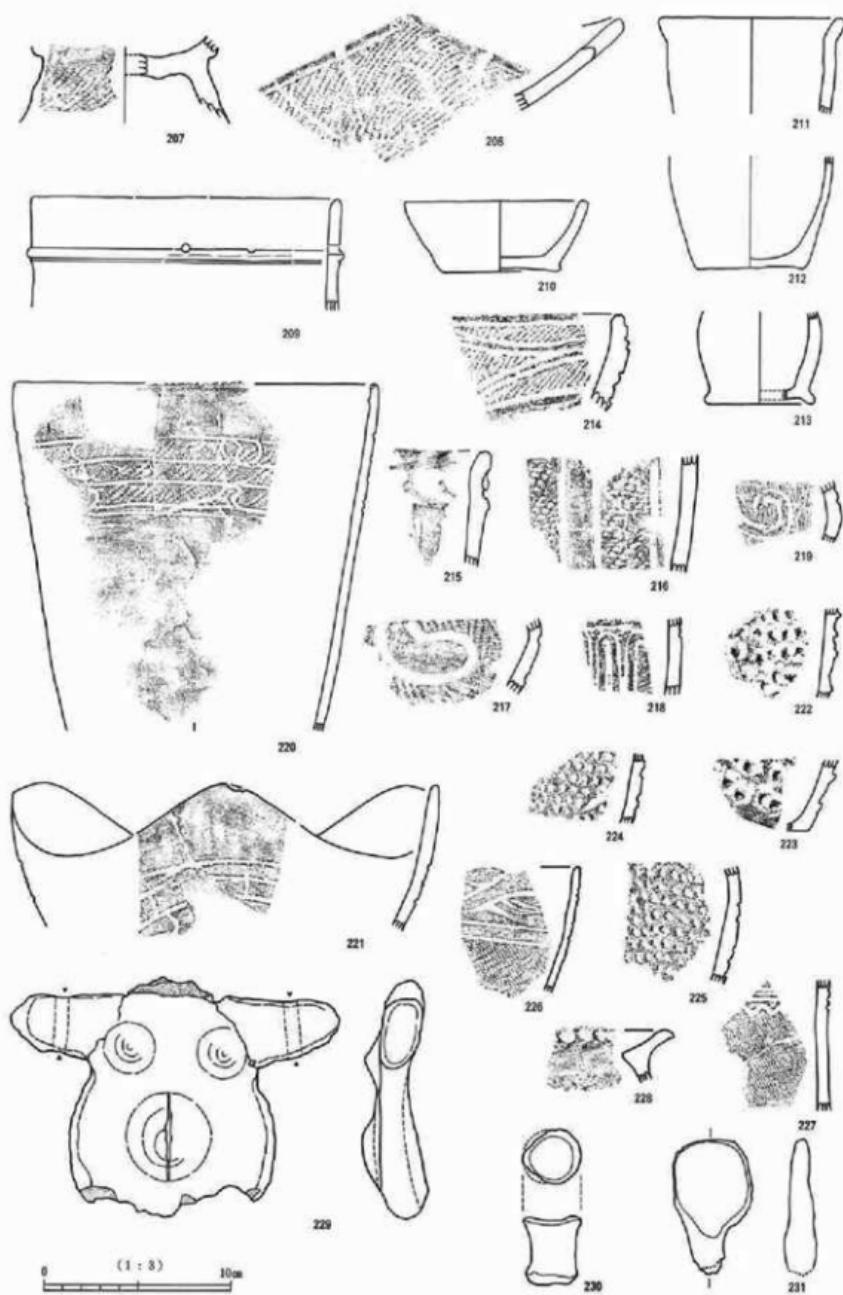




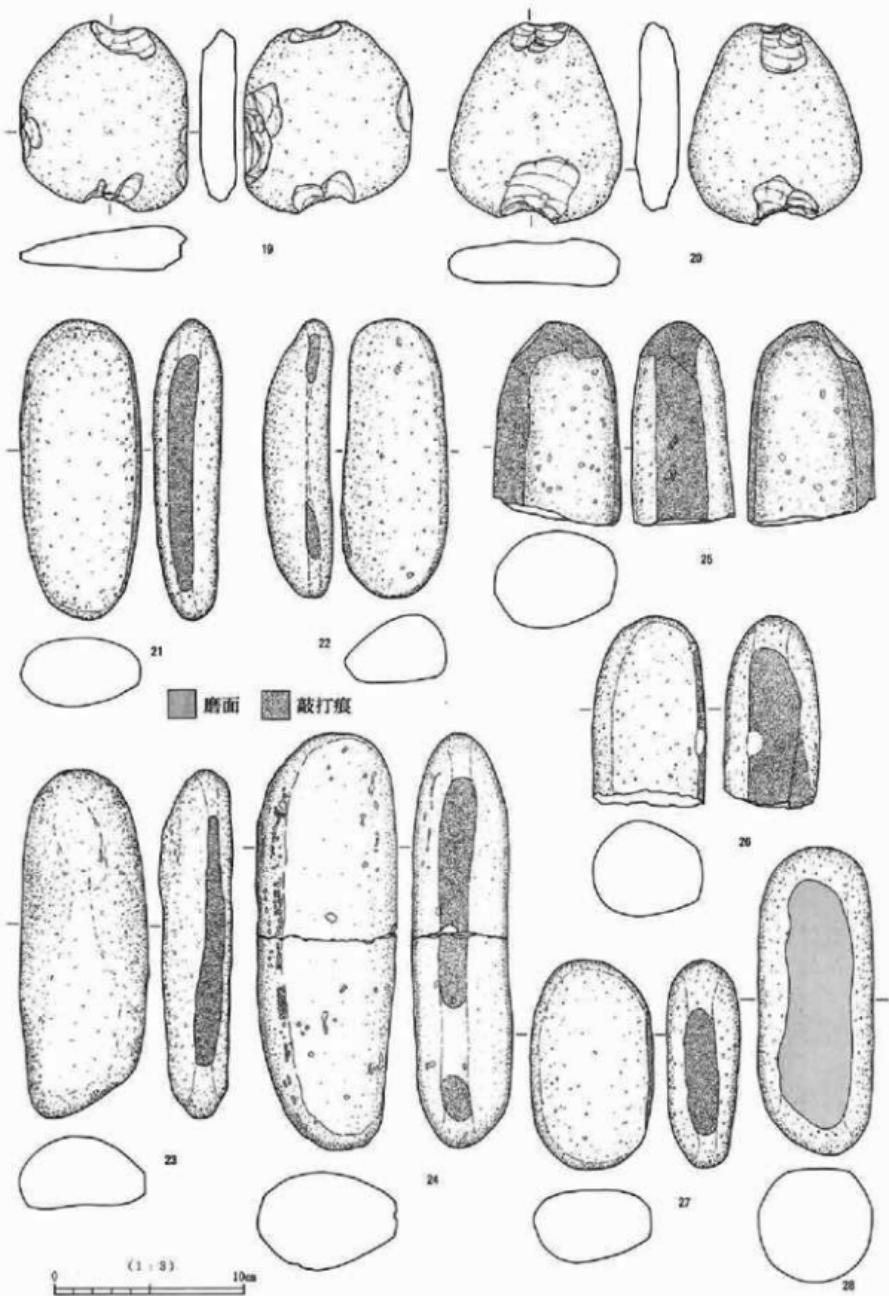


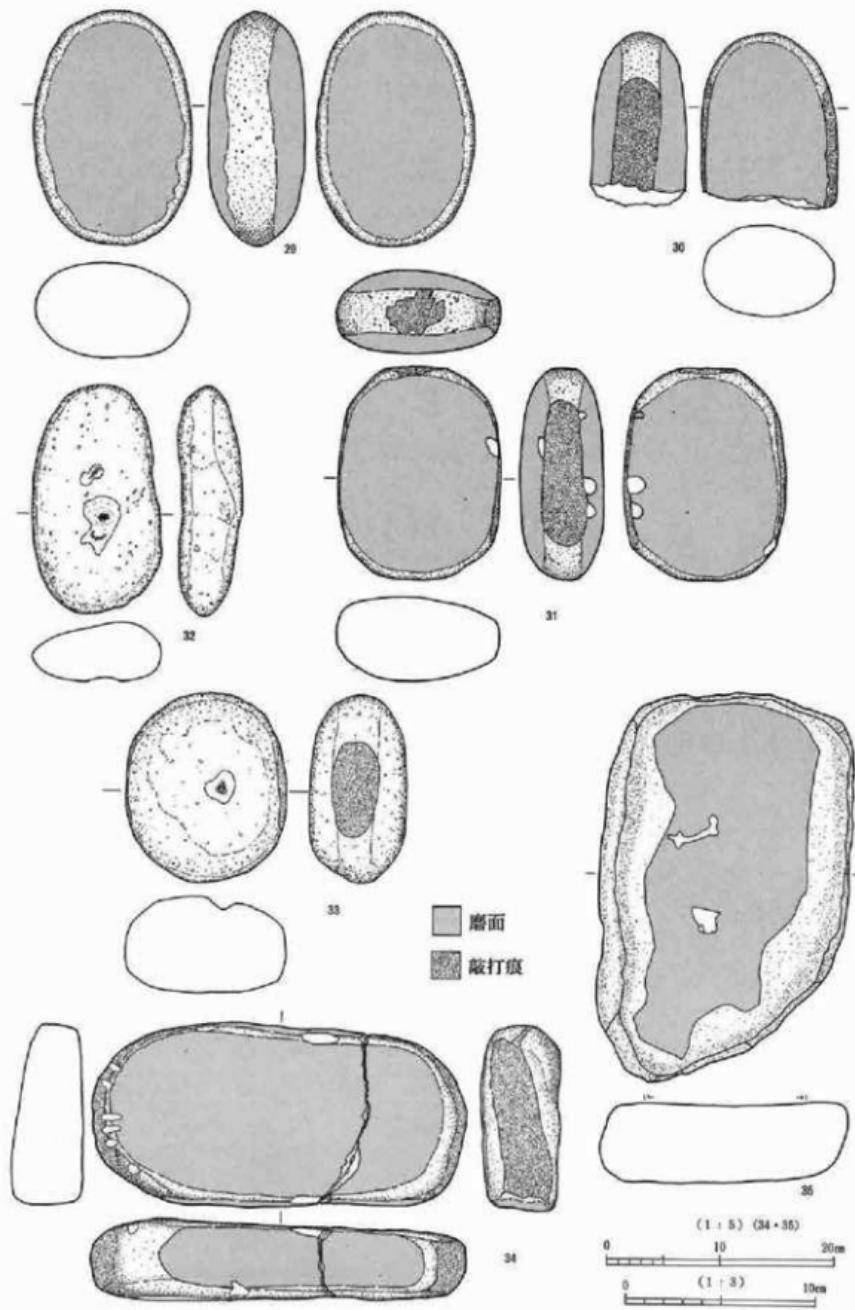


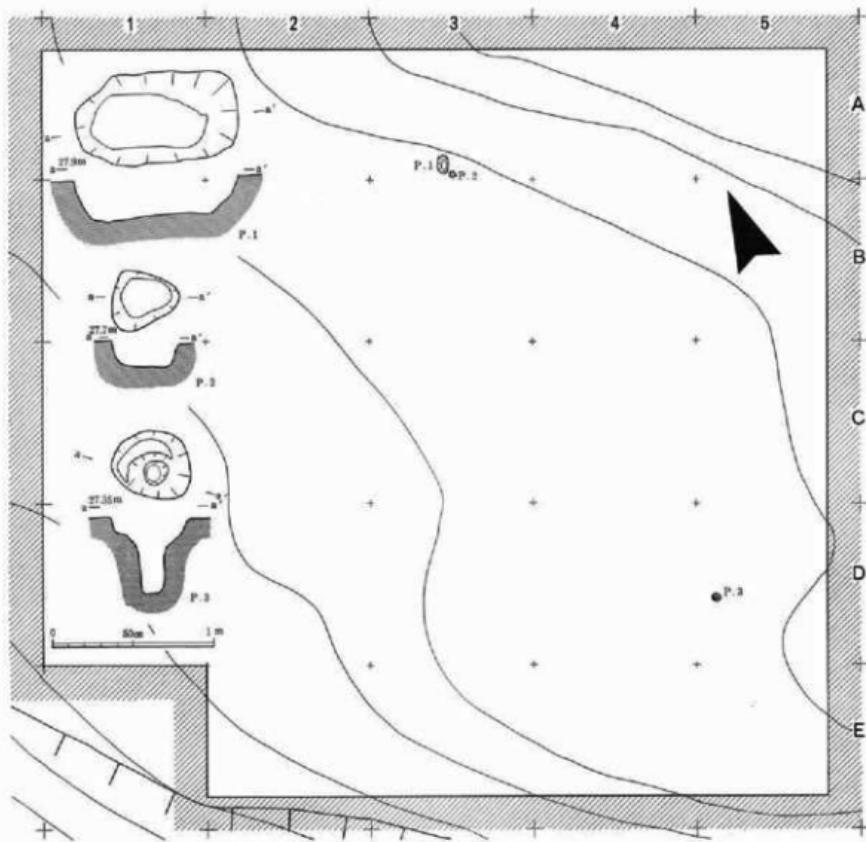
0 (1 : 3) 10cm



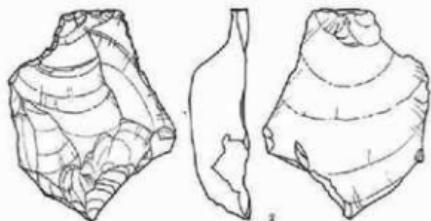
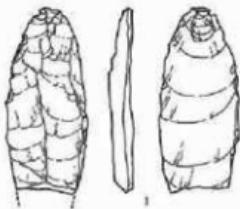








0 10m 20m





遺跡A地区  
南から



遺跡B地区  
北西から



遺跡C地区  
西から



1. 遺跡遠景  
東から



2. F 9・G 9付  
近  
A地区完掘状況  
東から



3. E 10付近から  
A地区完掘状況  
南から



4. B地区完掘状況  
西から



5. C地区完掘状況  
北から



6. A地区D 9付  
近調査風景  
南から



7. A地区C 10付  
近調査風景  
北から



8. B地区C 5付  
近調査風景  
西から



9. B地区C 6付  
近調査風景  
北から

1. A地区南北土層E 9-25付近  
西から



2. A地区南北土層B 9-10付近  
西から

3. A地区東西土層G 9-8付近  
北から



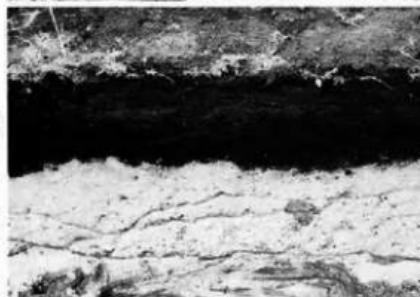
4. A地区東西土層E 7-3付近  
北から

5. B地区東壁土層B 7-3付近  
西から



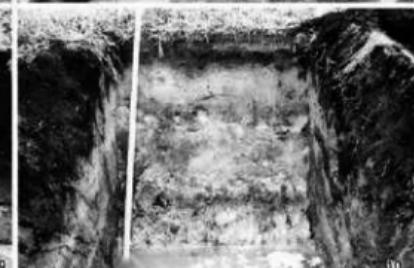
6. B地区東壁土層C 7-6付近  
西から

7. B地区北壁土層B 6-2付近  
南から



8. B地区北壁土層B 6-4付近  
南から

9. C地区南壁土層G 14-22付近  
北から



10. C地区土層柱状圖D 16-10付近  
南から

荻野遺跡

1. C地区土層柱  
状図G 10-12  
付近  
北から

2. C地区土層柱  
状図E 11-7  
付近  
南から

3. A地区遺物出  
土状況  
E 9-22 II層

4. A地区遺物出  
土状況  
E 9-20 II層

5. A地区遺物出  
土状況  
E 9-11・12  
III層

6. A地区遺物出  
土状況  
E 9-12 II層

7. A地区遺物出  
土状況  
E 9-11 III層

8. A地区遺物出  
土状況  
C 10-14 III層

9. A地区遺物出  
土状況  
D 9-19 III層

10. A地区遺物出  
土状況  
F 9-11・12  
III層



1. C地区炭焼き  
窯跡完掘  
F14-2・3・  
8

南から



2. 炭焼き窯跡完  
掘

東から

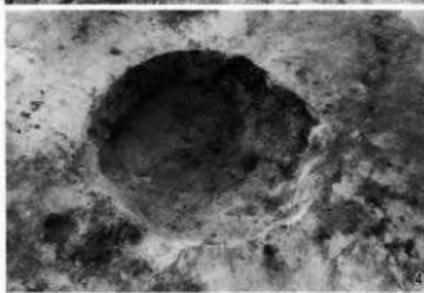


3. 炭焼き窯跡  
北から



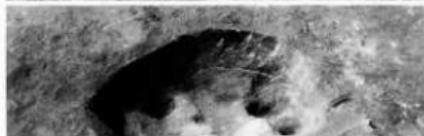
2

4. C地区  
C14-5炉跡  
完掘



4

5. C14-5炉跡  
プラン



4

6. C地区D14-  
7炉跡完掘

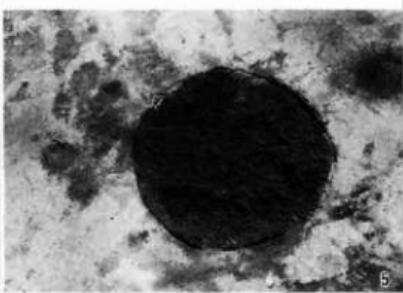


6

7. D14-7炉跡



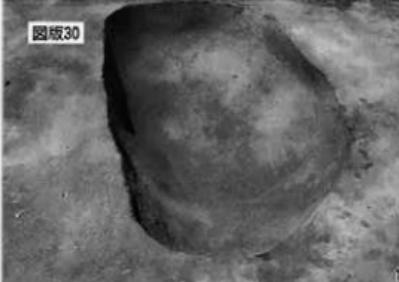
3



5



7



4.



5. A地区東側ビット群  
B10・C  
10-D10-  
E10  
北から



7.

7. ビット112付近  
D 9-15  
西から

1. ピット16完掘  
B 9-10  
南から



1

2. ピット16土層  
断面  
南から



2

3. ピット18完掘  
B 9-6  
南から



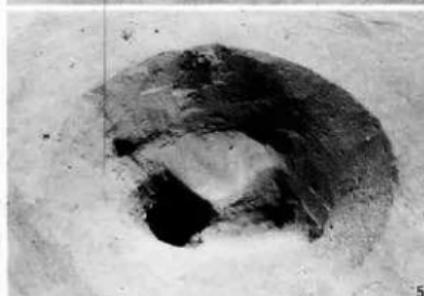
3

4. ピット18土層  
断面  
西から



4

5. ピット22完掘  
B 8-9  
西から



5

6. ピット22土層  
断面  
西から



6

7. ピット45完掘  
B 9-19  
西から



7

8. ピット45土層  
断面  
南から



8

9. ピット48完掘  
B 9-19・24  
南から

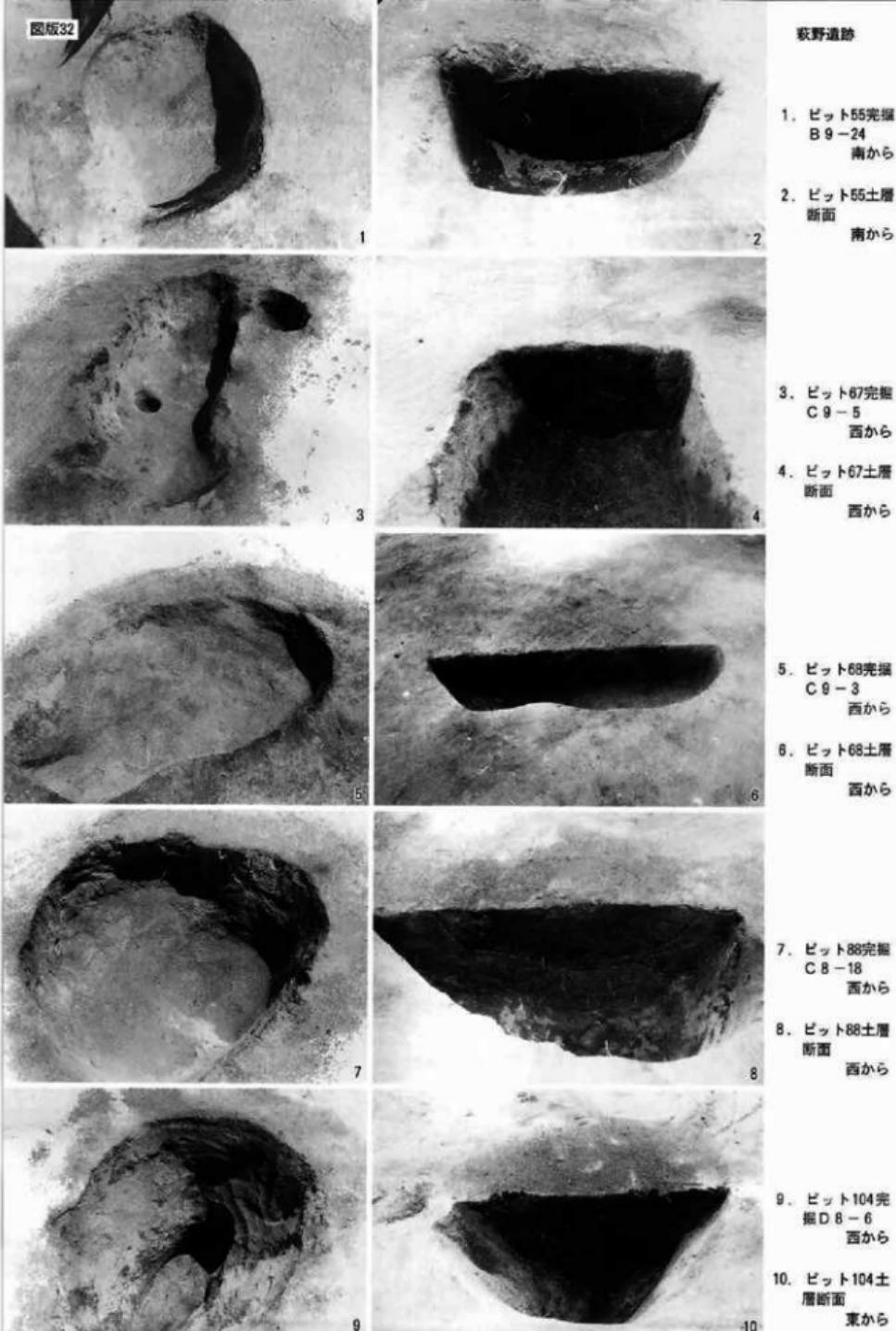


9

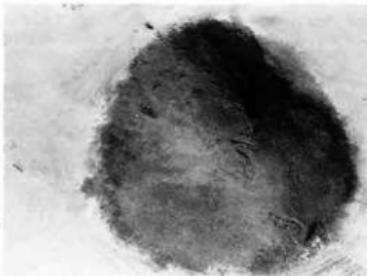
10. ピット48土層  
断面  
南から



10



1. ピット112完  
掘  
C 9 - 15  
西から



2. ピット112土  
層断面  
東から



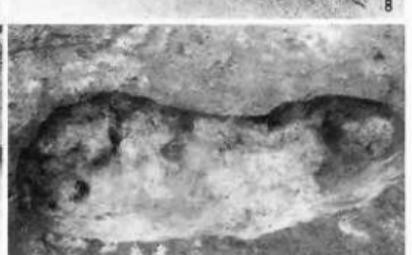
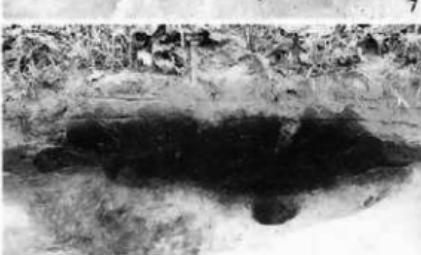
3. ピット130完  
掘  
E 9 - 4 ~ 9  
北から



6. ピット148土  
層断面  
北から



7. ピット308と  
D14-13跡跡  
完掘  
北から



8. ピット136完  
掘  
F 8 - 10、F  
9 - 6  
北から

9. 5号土坑完掘  
D10 - 3・8  
西から

10. 6号土坑完掘  
D16 - 11  
東から



1



2



3



4



5



6

(1 ; 5)



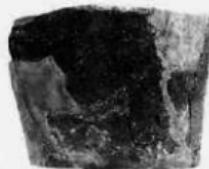
8



7



10



9



12



11



13



14



15



16



18



17



19



20



22



21

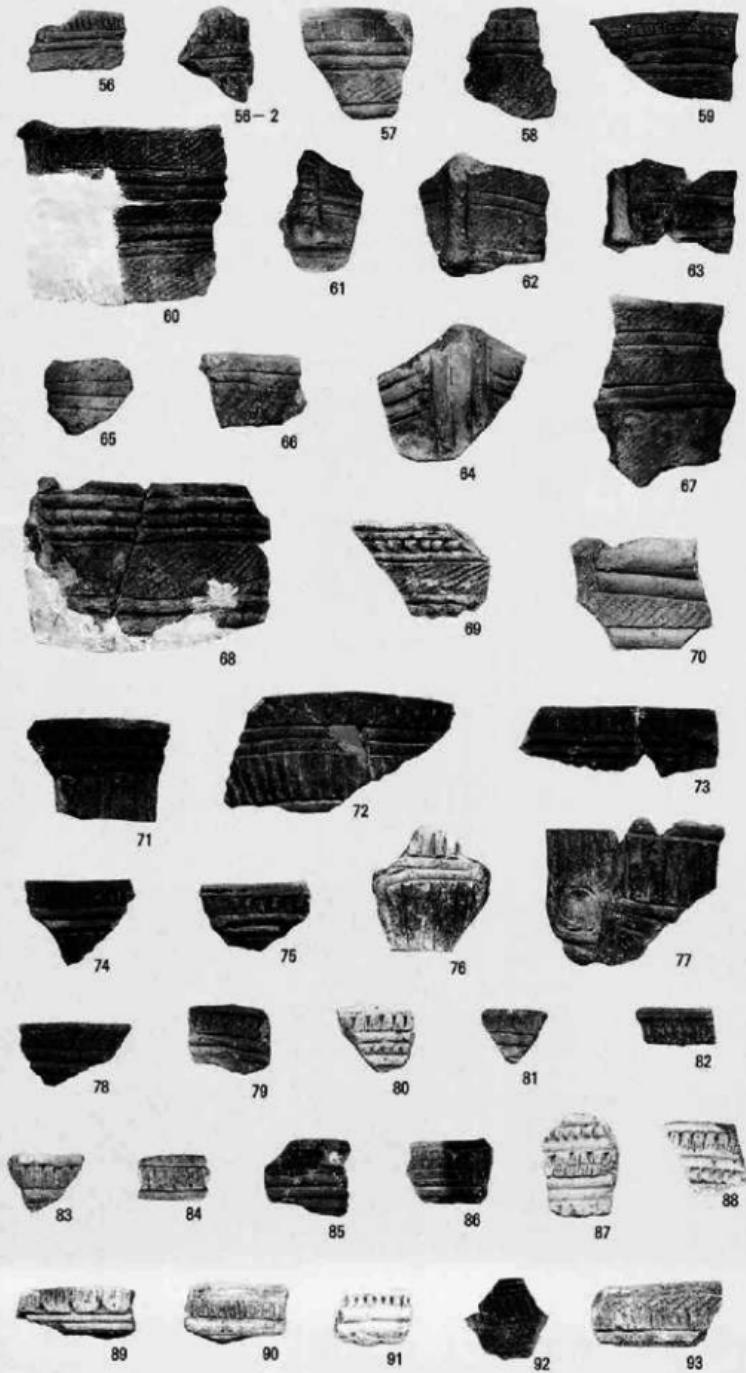
(1 : 5)

(1 : 3) 22

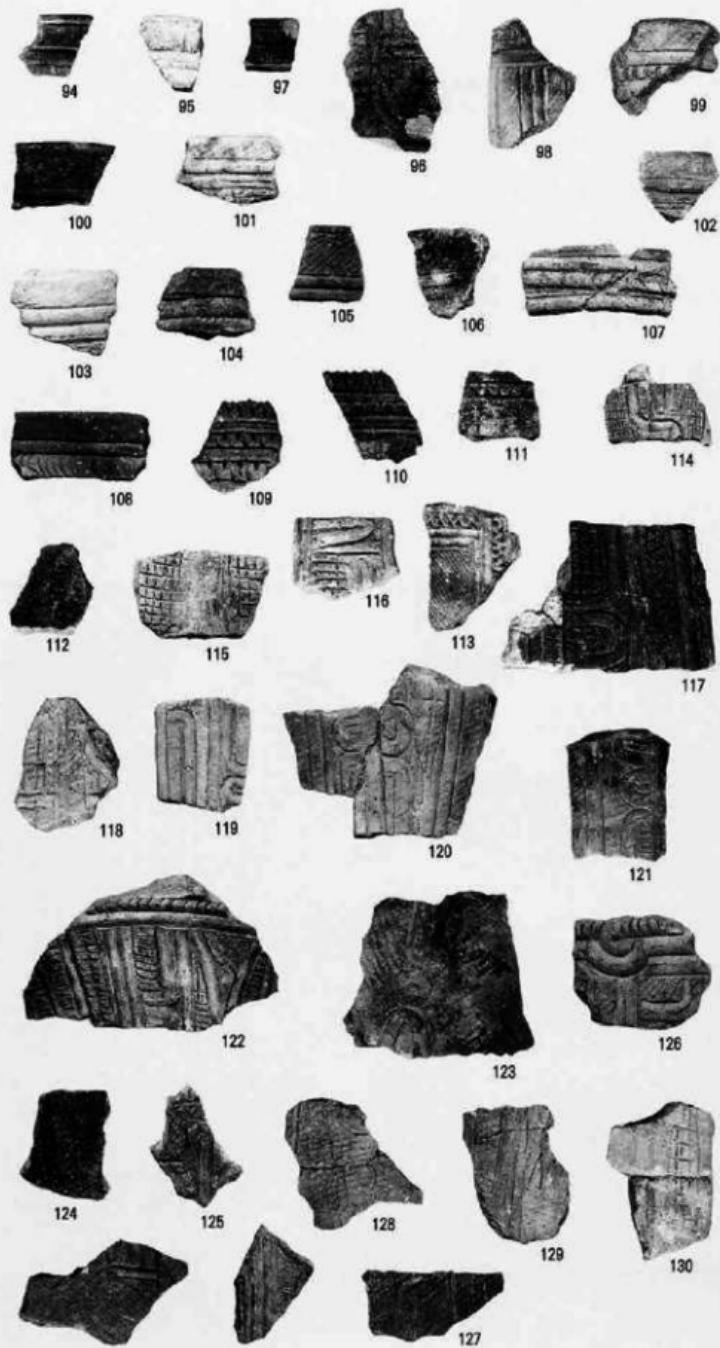
## 第1群土器



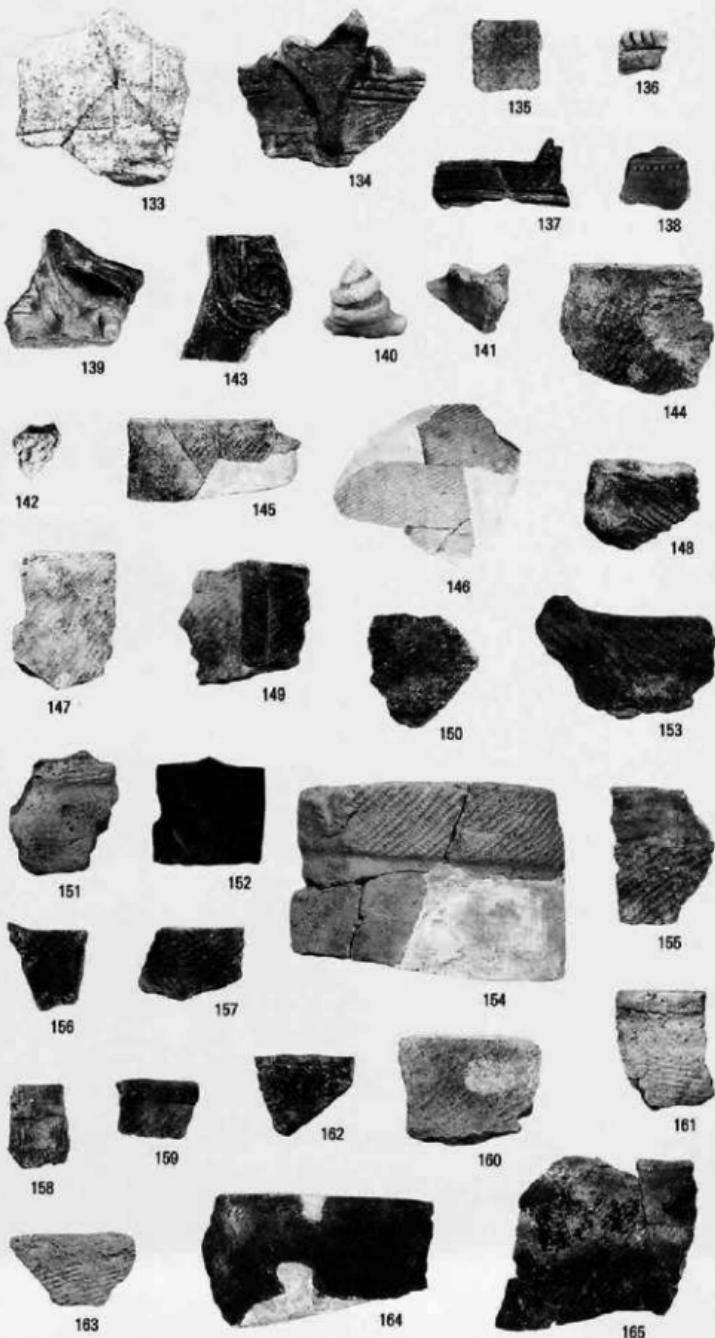
## 第1群土器



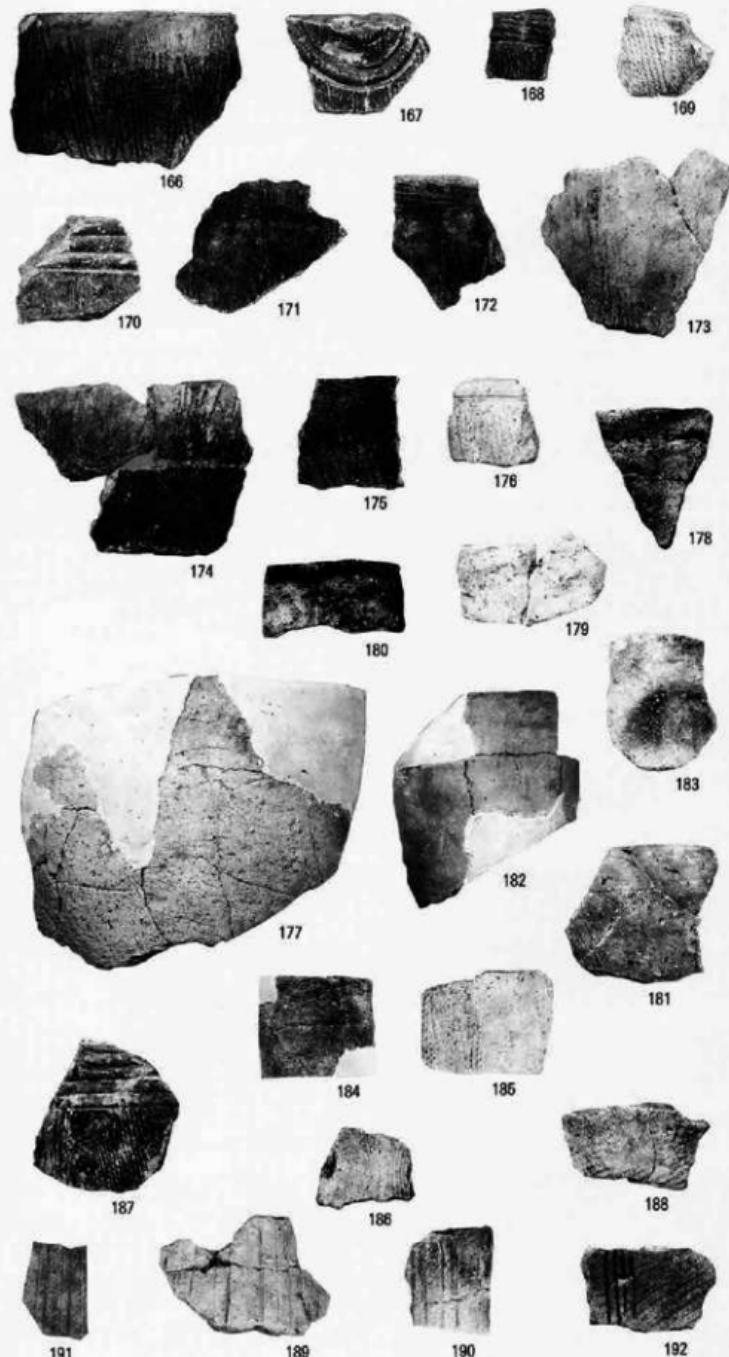
## 第1群土器



## 第1群土器



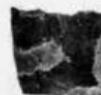
## 第1群土器



## 第1群土器



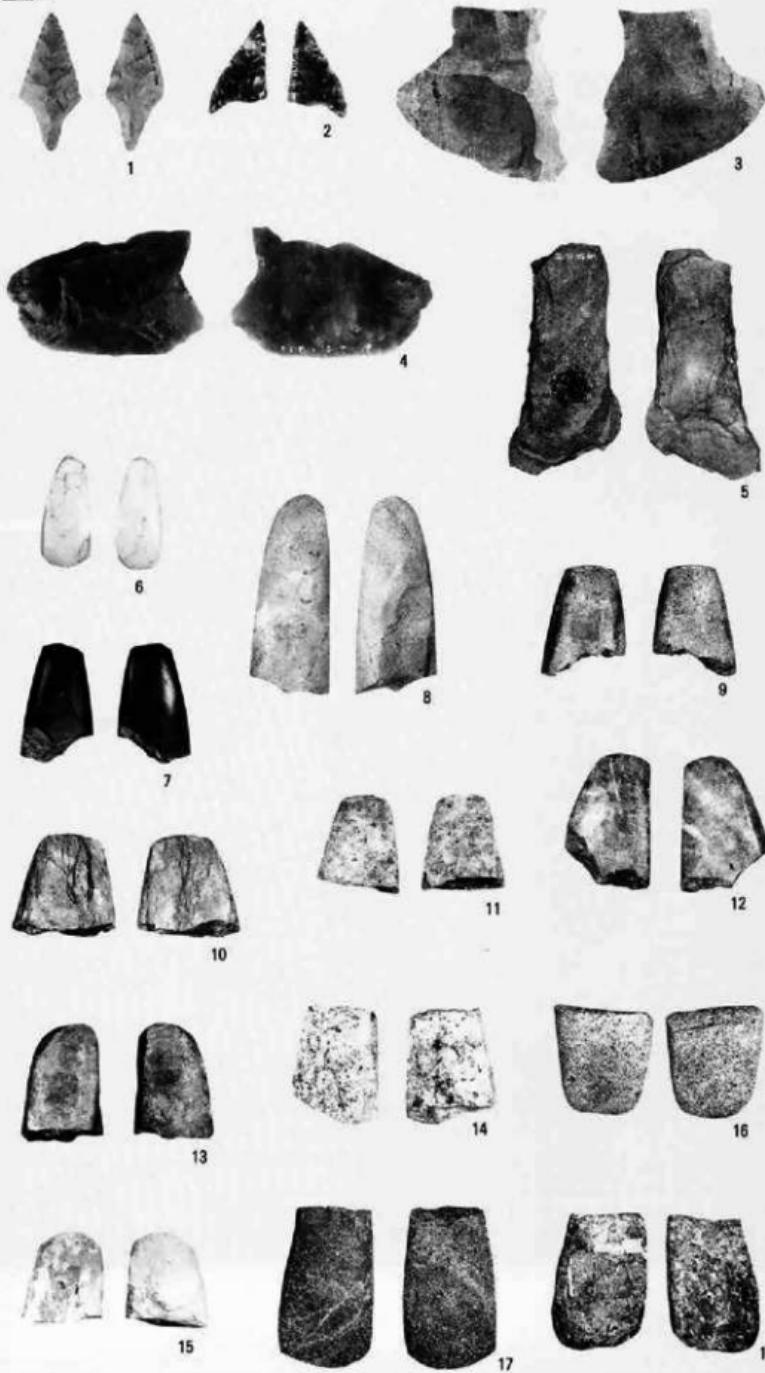
## 第Ⅰ群土器

第Ⅱ～VI群  
土器

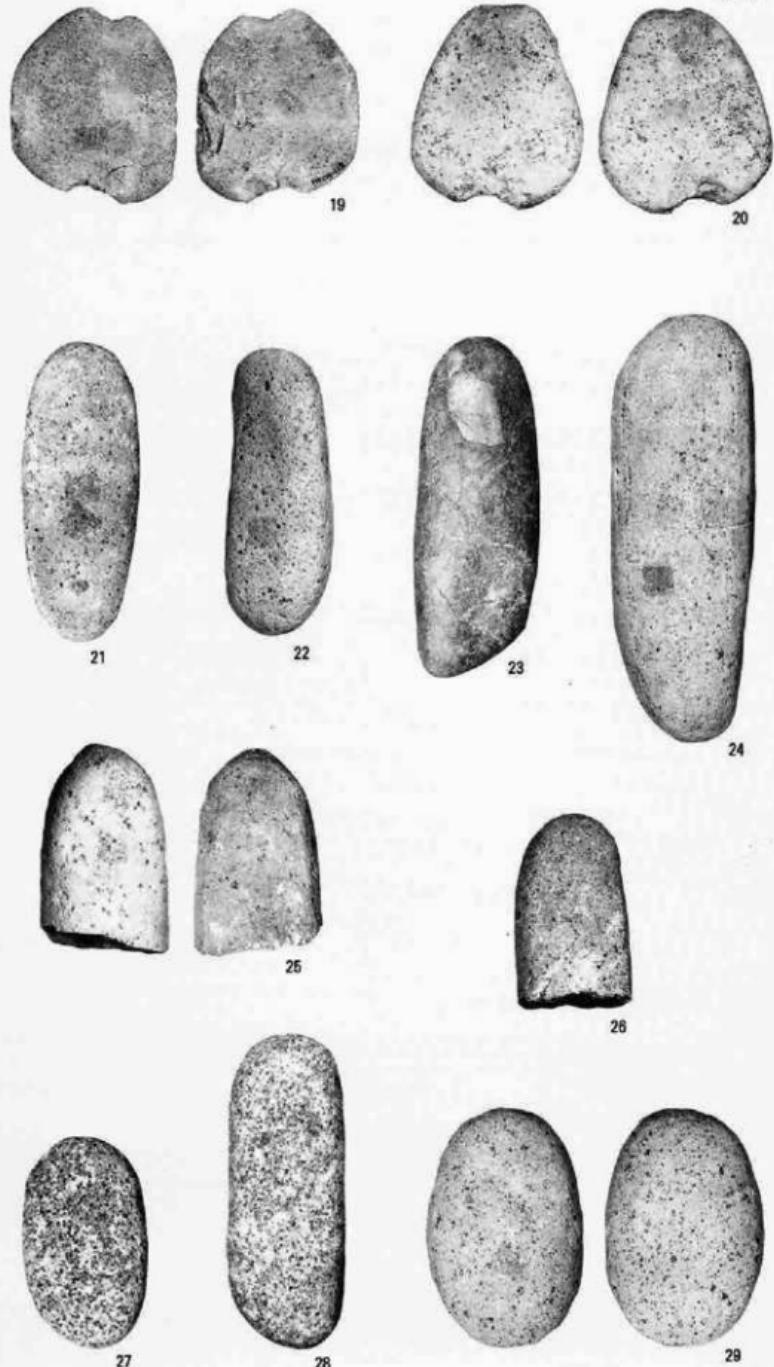
## 土製品



(2:3)



(1 : 3)  
(2 : 3) 1~4





30



31



32



33



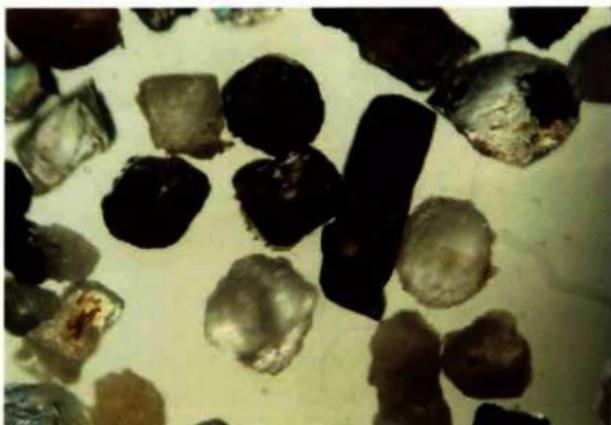
35



34

(1 : 3)

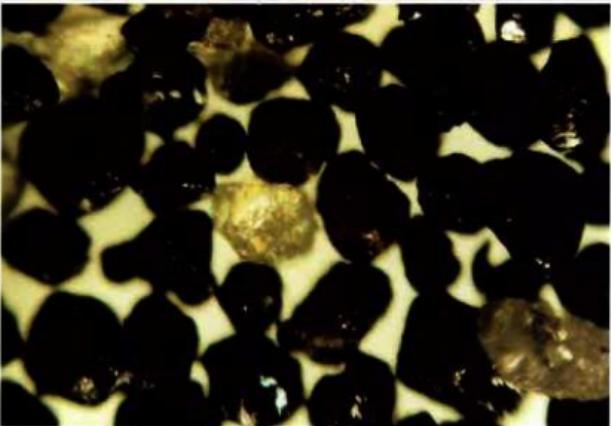
(1 : 5) 34, 35



(a) 10×4 (直交ニコル)  
磁鉄鉱、角閃石、高温型石英、  
白色軽石、石英



(b) 10×4 (直交ニコル)  
紫蘇輝石、磁鉄鉱、チタン鉄鉱、  
石英、軽石



(c) 10×4 (直交ニコル)  
磁鉄鉱、チタン鉄鉱、石英



官林遺跡  
全景  
東から



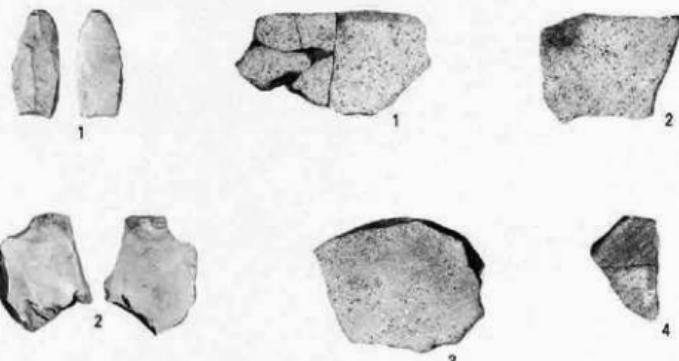
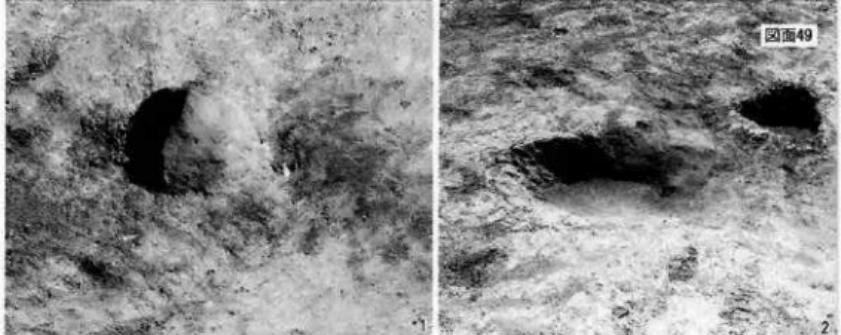
官林遺跡  
完掘  
東から



官林遺跡  
完掘  
北から

1. ピット3  
完掘  
東から

2. ピット1・2  
完掘  
西から



(1 : 3)

## 報告書抄録

書名	萩野遺跡 宮林遺跡						
副書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 61 集						
編著者名	龟井功・鈴木俊成・本間信昭・望月正樹・荒木繁雄						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒951 新潟市一番堀通町5923-46 TEL 025-223-5642						
発行年月	西暦 1994年3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
萩野遺跡 他	新潟県北蒲原郡安田町 大字六野瀬字萩野1122 他	301 91	37度 44分 58秒	139度 15分 22秒	第一次調査 19880609～19880625 第二次調査 19891211～19891222 19900508～19901012	342 874 5,800	道路（磐越自動車道いわき～新潟線）の建設に伴う事前調査
官林遺跡 他	新潟県北蒲原郡安田町 他	301 90	37度 44分 56秒	139度 15分 26秒	第一次調査 19900226～19900303 第二次調査 19900723～19900804	413 2,100	道路（磐越自動車道いわき～新潟線）の建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
萩野遺跡	遺物包蔵地	縄文時代 中期・後期	焼成窯跡・炉跡、 土坑・ピット	縄文土器・土製品・石器（石 鏃、石匙、打製石斧、磨製石 斧他）			
官林遺跡	遺物包蔵地	縄文時代 時期特定不可		縄文土器・石器（石刀、剥片）			

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第61集  
磐越自動車関係発掘調査報告書

## 萩野遺跡

## 官林遺跡

平成6年3月31日印刷  
平成6年3月31日発行編集 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒950 新潟市一番堀通町5923-46  
電話 025(223)5642  
FAX 025(228)1762発行 新潟県教育委員会  
〒950 新潟市新光町4-1  
電話 025(285)5511

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

印刷 傅双葉印刷  
〒950 新潟市網川原1-4-13  
電話 025(283)7373